

長岡京跡・淀城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一三三

長岡京跡・淀城跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀城跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび淀駅高架工事に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

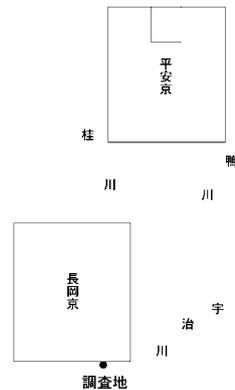
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 長岡京跡・淀城跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市伏見区淀池上町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼 |
| 4 調査期間 | 5次調査 2006年6月14日～2006年7月11日
6次調査 2006年8月21日～2007年2月28日 |
| 5 調査面積 | 5次調査 64 m ² 、6次調査 1,350 m ² |
| 6 調査担当者 | 5次調査 尾藤德行
6次調査 尾藤德行・丸川義広・能芝 勉・布川豊治 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「神足」「納所」「円明寺」「淀」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 掲載順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | I 尾藤德行
II 尾藤德行：1、2-(1)・(3)～(8)、4
丸川義広：2-(2)
能芝 勉：3 |
| 17 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・
山口 眞 |



(調査地点図)

目 次

I 長岡京跡・淀城跡（5次調査）

1. 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	3
(3) これまでの調査	3
2. 遺 構	5
(1) 基本層序と遺構概要	5
(2) 遺 構	6
3. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器・陶磁器類	11
(3) その他遺物	12
4. ま と め	14

II 淀城跡（6次調査）

1. 調査経過	18
(1) 調査の経緯	18
(2) 位置と環境	19
2. 遺 構	20
(1) 基本層序と遺構の概要	20
(2) A 1 区の遺構	21
(3) A 2 区の遺構	23
(4) B 1 区の遺構	27
(5) B 2 区の遺構	30
(6) B 3 区の遺構	34
(7) B 4 区の遺構	36
(8) B 5 区の遺構	40
3. 遺 物	43
(1) 遺物の概要	43
(2) 土器・陶磁器類	43
(3) その他の遺物	52
4. ま と め	59

図版目次

図版 1	遺構	1	5次調査第2面全景（北東から）
		2	5次調査第3面全景（北東から）
		3	5次調査瓦列5・6と路面112（北から）
		4	5次調査石列109と路面113（北から）
図版 2	遺構・遺物	1	5次調査石列4と路面112（北東から）
		2	5次調査石列88と路面113（北東から）
		3	5次調査出土遺物
図版 3	遺構	1	6次調査A1区北半全景（北東から）
		2	6次調査A2区第1面全景（北東から）
		3	6次調査A2区第2面全景（北東から）
		4	6次調査B1区全景（北東から）
図版 4	遺構	1	6次調査B2区第1面全景（北東から）
		2	6次調査B3区全景（北東から）
		3	6次調査B4区第2面全景（北東から）
		4	6次調査B5区北半全景（北東から）
図版 5	遺構	1	6次調査A2区石垣66（南西から）
		2	6次調査A2区建物5（北から）
		3	6次調査A2区堤状盛土断面（南西から）
図版 6	遺構	1	6次調査B2区布基礎4（北から）
		2	6次調査B4区雨落ち6・柱列11（北から）
図版 7	遺構	1	6次調査B1区石垣7（西から）
		2	6次調査B1区石垣8（南東から）
		3	6次調査B3区石垣17（北から）
図版 8	遺構	1	6次調査B4区石垣9（南西から）
		2	6次調査B5区石垣1（北東から）
図版 9	遺物		6次調査出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	淀城下町復元図と周辺調査位置図 (1 : 10,000)	2
図 3	調査区配置図 (1 : 500)	4
図 4	調査前風景 (北東から)	4
図 5	調査風景 (北東から)	4
図 6	第 2 面平面図 (1 : 100)	7
図 7	第 3 面平面図 (1 : 100)	7
図 8	調査区断面図 (1 : 50)	8
図 9	セクション 1・3 断面図 (1 : 50)	9
図 10	柱列平面図 (1 : 50)	10
図 11	第 2 面出土土器類実測図 (1 : 4)	11
図 12	第 3 面出土土器類実測図 (1 : 4)	11
図 13	軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	12
図 14	銭貨拓影 (1 : 1)	12
図 15	金属製品実測図 (1 : 4)	13
図 16	石製品拓影・実測図 (1 : 4)	13
図 17	江戸時代初頭の遺構配置図 (1 : 200)	14
図 18	調査地と周辺調査位置図 (1 : 5,000)	16
図 19	A 1 区から望む調査区遠景 (南西から)	17
図 20	B 4 区調査風景 (南西から)	17
図 21	調査区配置図 (1 : 1,500)	18
図 22	A 1 区平面図 (1 : 200)	21
図 23	A 1 区断面図 (1 : 100)	22
図 24	A 2 区第 1 面平面図 (1 : 200)	24
図 25	A 2 区第 2 面平面図 (1 : 200)	24
図 26	A 2 区断面図 (1 : 100)	25
図 27	A 2 区石垣 66 実測図 (1 : 50)	26
図 28	A 2 区柱列 4 実測図 (1 : 50)	26
図 29	A 2 区建物 5 実測図 (1 : 50)	27
図 30	B 1 区第 1 面平面図 (1 : 200)	28
図 31	B 1 区第 2 面平面図 (1 : 200)	28
図 32	B 1 区断面図 (1 : 100)	29

図 33 B 1 区石垣 7 実測図 (1 : 50)	30
図 34 B 2 区第 2 面平面図 (1 : 200)	31
図 35 B 2 区断面図 (1 : 100)	32
図 36 B 2 区布基礎 4・5、集石 3 実測図 (1 : 50)	33
図 37 B 3 区第 2 面平面図 (1 : 200)	34
図 38 B 3 区断面図 (1 : 100)	35
図 39 B 3 区石垣 17 実測図 (1 : 50)	36
図 40 B 4 区平面図 (1 : 200)	37
図 41 B 4 区断面図 (1 : 100)	38
図 42 B 4 区柱列 11・集石 5 実測図 (1 : 50)	39
図 43 B 4 区集石 5 断面図 (1 : 50)	39
図 44 B 4 区雨落ち 6 実測図 (1 : 50)	39
図 45 B 4 区石垣 9 実測図 (1 : 50)	39
図 46 B 5 区平面図 (1 : 200)	40
図 47 B 5 区断面図 (1 : 100)	41
図 48 B 5 区石垣 1 実測図 (1 : 50)	42
図 49 A 1 区出土土器類実測図 (1 : 4)	43
図 50 A 2 区出土土器類実測図 1 (1 : 4)	45
図 51 A 2 区出土土器類実測図 2 (1 : 4)	46
図 52 B 1 区出土土器類実測図 (1 : 4)	47
図 53 B 2 区出土土器類実測図 (1 : 4)	48
図 54 B 3 区出土土器類実測図 (1 : 4)	49
図 55 B 4 区出土土器類実測図 (1 : 4)	50
図 56 B 5 区出土土器類実測図 (1 : 4)	52
図 57 瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	53
図 58 銭貨拓影 (1 : 1)	54
図 59 B 4 区出土石仏実測図 (1 : 8)	54
図 60 B 3 区出土石製溝拓影・実測図 (1 : 10)	55
図 61 石垣刻印拓影	57
図 62 淀城復元図と遺構検出線 (1 : 2,000)	60

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	12
表 3	錢貨一覽表	13
表 4	遺構概要表	20
表 5	遺物概要表	44
表 6	瓦類一覽表	54
表 7	錢貨一覽表	54
表 8	石垣刻印一覽表	56

坊の復元による長岡京左京九条三坊十三町に該当する。

京都市文化財保護課の試掘調査の結果、予定地の南西側半分は遺構の残存状況が悪い事が判明した。しかし、北東半分は地表下1 m程度まで旧基礎で攪乱を受けているが、地表下1.3 m以下は遺構が良好に残存していることが明らかになった。その結果、今回の調査地は新たに道路となる部分で幅4 m、長さ16 mを調査対象地とするよう指導し、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施することとなった。

今回の調査では、東曲輪内の淀城関連の建物や施設の遺構を検出することを目的とした。さらに、淀城跡か層の淀津関連や長岡京関連の遺構を確認することを目的とした。

調査は、まず、重機により盛土部分を1.2～1.5 mまで掘削した。その後、壁面清掃作業や攪乱部分を掘削し、第1面から第3面まで順次調査した。その間、遺構検出作業、写真撮影、実測作業などを行い、部分的に断割り調査を行った。そして、施工業者の工事時に、重機による断割り調査を行い、下層の包含層を確認した。最後に、調査資材を引き上げ、現場事務所を撤去して調査を終了した。

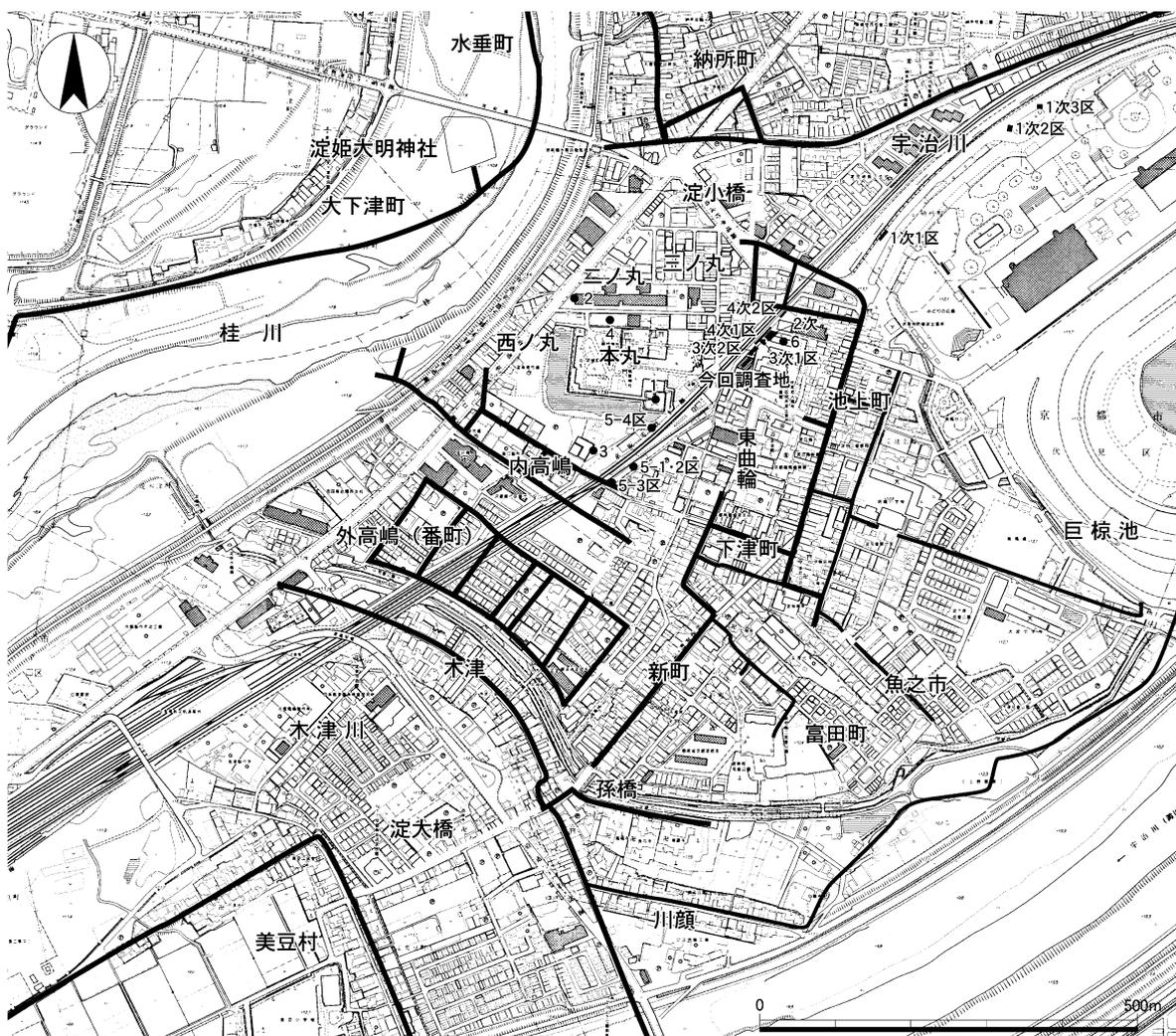


図2 淀城下町復元図と周辺調査位置図（1：10,000）

(2) 位置と環境

淀の環境は、江戸時代、明治時代以降の河川改修によって大きく変わっている。現在の桂川・宇治川・木津川の三川合流地点は、淀のはるか南西に位置しているが、古代・中世においては、淀の地が三川合流点にあたり、交通の要所であった。長岡京期には、京の南端に位置した。平安時代の『日本後紀』に、延暦23年(804)7月24日、桓武天皇が与等(淀)津に行幸するとあり、以後、平安京の外港として登場する。中世の「東寺百合文書」「北野社家日記」などに、淀魚市で魚介類、塩、米穀、木材などが取引されたとある。中世からあった淀古城は、現淀城の北方で、宇治川の対岸に位置していたようで、それを豊臣秀吉が天正16年(1588)より修築した。同時に桂川左岸堤を京都へは鳥羽街道とし、淀を経て図2の淀小橋と淀大橋を渡って、大阪へと続く淀川左岸堤を大阪街道として整備したとある。淀古城は伏見城築城のため、文禄3年(1594)廃城となった。

現在の淀城は、元和9年(1623)伏見城が廃城となったあと、二代将軍徳川秀忠の命をうけた譜代大名、松平定綱が築城したものである。徳川幕府は淀を重視し、歴代藩主は譜代大名が務めた。寛永10年(1633)には、十万石の永井尚政が城主となり、狭かった城下町の拡張と水害防止のため、寛永14年(1637)より木津川の付け替え工事を行い、木津川と淀川の合流点を下流側に移し、元の木津川河川敷を埋め立てて、中堀と内高島の武家屋敷などを造成した。以後、寛文9年(1669)には石川憲之、宝永8年(1711)に戸田光熙、享保2年(1717)に松平乗邑が城主となった。享保8年(1723)には稲葉正知が城主となり、幕末までの約130年間、稲葉家が城主を務めた。宝暦6年(1756)には落雷により天守が焼失し、以降は再建されなかった。そして、幕末の慶応4年(1868)鳥羽伏見の戦いで城下は焼失し、明治4年(1872)廃藩となった。

なお、図2の城下町復元図は、拡張後の内高島が記載されており、1637年の木津川付け替えと淀城拡張工事以降の図である。

(3) これまでの調査

淀城跡で行われた発掘調査の主なものには、以下のものがある。1987年の発掘調査¹⁾(図2-調査1)では、天守台部分を全面調査し、天守台の地下に石積の地下室があったことが明らかとなっている。また、石垣の刻印、排水用の石製U字溝などが報告されている。1976年の試掘調査²⁾(調査2)では、地表下2.5～3.0m以下にて、西ノ丸西側の内堀東側石垣を一边60cm以上の石が2段2列以上積んである事を確認した。1990年の試掘調査³⁾(調査3)では、地表下0.2～2.9mで3層の堀埋土を検出し、地表下2.2m(標高10m)で内高嶋北側の中堀北肩石垣を検出している。1996年の試掘調査⁴⁾(調査4)では、地表下0.4～1.8mで一边が40～60cmの花崗岩が東西方向に並び南面する石垣と、南北方向に並び西面する石垣がL字接続し、本丸と二ノ丸の境界の役割を果たしていたと推定する3～4段の石垣を検出している。2003年の試掘調査⁵⁾(調査5)の2区では、地表下0.4～1.4mで南曲輪の建物や塀に伴う石垣を検出している。一边40～70cmの石を上下2段、東西方向に4列、南面して検出している。3区では、地表下2.8m以下で石垣が

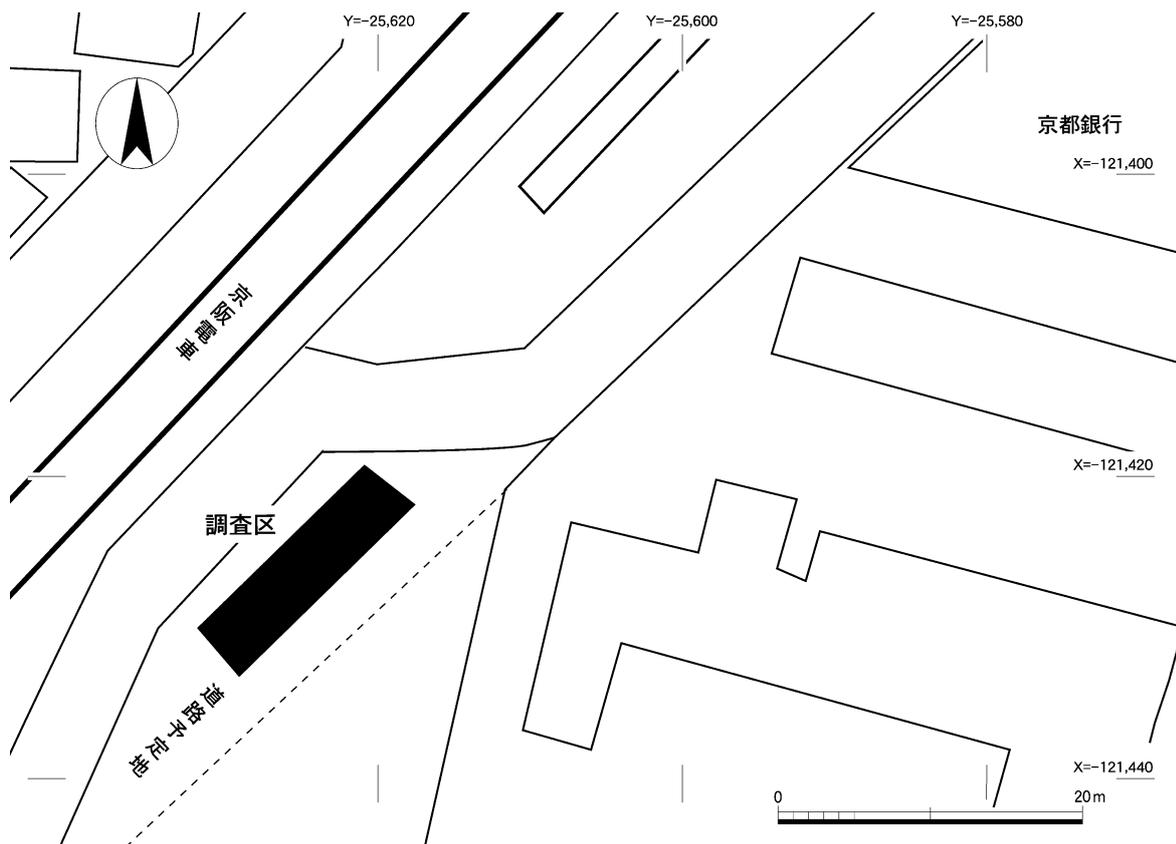


図3 調査区配置図 (1 : 500)

検出された。石垣は一辺 40 ~ 80 cmの石を 2 段以上 4 列以上並べる。内高嶋北側の中堀南肩で、北面する石垣である。軸線は西で 27 度北へ振る。4 区では、地表下 1.2 mで一辺 10 ~ 40 cmの石材が検出された。天守台南の北面する内堀南肩石垣の裏込め石と考えられる。1999 年度の 1 次調査⁶⁾では、湿地部分を確認している。2003 年度の発掘調査⁷⁾ (調査 6) や 2 次調査⁸⁾では、淀城期の米蔵跡を検出した。2004 年度の 3 次調査⁹⁾、2006 年度の 4 次調査¹⁰⁾は、今回の調査地の北東側で同じ東曲輪に位置し、屋敷地の南北境界を示す石列や井戸などを検出している。



図4 調査前風景 (北東から)



図5 調査風景 (北東から)

註

- 1) 星野猷二『淀城跡・天守台調査概報』伏見城研究会 1988年
- 2) 1976年調査
- 3) 久世康博「淀城跡(T B 29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 4) 馬瀬智光「淀城跡 No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 5) 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 6) 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 8) 内田好昭「長岡京跡・淀城跡(2次・3次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 9) 註8に同じ
- 10) 尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡(4次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年

2. 遺 構

(1) 基本層序と遺構の概要

調査区北東部の基本土層は、地表面が標高約 12.2 mで、地表下約 1.5 mのまで旧基礎撤去時に攪乱されていた。標高約 10.6 mの3層にぶい黄褐色砂泥層は焼土・炭の多い整地層で、これを第1面としたが、大部分攪乱されて、残存状況は悪かった。標高約 10.5 mの5層にぶい黄褐色砂泥の面の北端では多くの柱穴を検出し、路面と道路境界の瓦列や石列を検出した。この面を第2面とした。標高約 10.1 mの10層にぶい黄褐色砂泥(粘質)の面では、第2面と同様に路面と道路境界の石列を検出した。この面を第3面とした。

以下、セクション部分を一部深掘りして、断ち割り調査を行った。地表下約 1.7～3 m(標高約 9.2 m)まで10面の路面層を検出し、地表下約 4 mまで遺物包含層を検出した。

第1面では、大きな焼土土壌の底部を検出し、平安時代から中世の遺物と共に、江戸時代の遺

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
桃山時代	石列88・109・111、路面113、土壌92	
江戸時代初頭	石列4、瓦列5・6、路面112、柱穴9、柱列1～6	

物を出土した。

第2面では、標高 10.5 ～ 10.3 m で、調査区の西端では南北方向の石列 4、東端では南北方向の瓦列 5・6 を検出した。これらの間からは固く締まった灰色粗砂礫層の路面 112 を検出した。また、瓦列 5・6 の東側では多数の柱穴などを検出した。

第3面では、第2面の約 0.2 ～ 0.3 m 下層の標高 10.0 ～ 10.2 m で、第2面と同様に、調査区西端で南北方向の石列 88、東端で南北方向の石列 109・111 を検出した。これらの間で灰色粗砂礫層の路面 113 を検出した。

セクション1 調査区西側に設定した。路面状整地層の 38・40・42 層は標高 9.4 ～ 9.2 m で検出した。また、標高 8.5 m までの 43 ～ 46 層から平安時代・中世の遺物が出土した。

セクション3 調査区東側に設定した。路面状整地層の 29・40・43 層を標高 9.9 ～ 9.1 m で検出している。さらに、標高 8.25 m までの 44 ～ 48 層から平安時代から中世の遺物が出土している。また、路面と敷地の境界部分には瓦列や石列があり、18・25・34 層などは溝のような堆積土であった。敷地部分の整地層は、10 層が粗砂層で、他は砂泥層であった。

(2) 遺 構

第1面の遺構

大部分攪乱されて平面的な調査はできず、断面観察では、3層と似た土層の1層や18層の落込の埋土には焼土・炭が多い。火事で焼けた焼土を整地したものとする。2～4次調査で確認された標高と比較すると、江戸時代初頭の遺構面となる。

第2面の遺構 (図6、図版1)

石列4 (図版2) 調査区西端で検出した。南北方向に約 2.8 m で一部攪乱されているが、調査区外の南・北に続くものと思われる。一辺 0.2 ～ 0.4 m の自然石の長軸方向を東西方向に積んでいる。

瓦列5 (図版1) 調査区東側で検出した。北端が削平されており、ほぼ南北方向に全長 2.1 m 以上、幅 0.15 ～ 0.2 m で瓦を並べる。瓦は平瓦と丸瓦を小口方向を立てている。

瓦列6 (図版1) 瓦列5から 0.4 m 東側の北方にて、調査区東側で検出した。ほぼ南北方向に全長 2.1 m、幅 0.15 ～ 0.2 m で瓦を並べる。平瓦が多く、小口方向を立てている。少量ながら丸瓦や軒丸瓦・軒平瓦が混じる。

路面 112 (図版1・2) 石列4と瓦列5・6の間は路面となる。図8のように、わずかに南西から北東方向に低くなる固く締まった粗砂礫の多い路面である。この土層は、厚さ 3 ～ 10 cm でさらに5層ほど下層に続く。東西幅は約 8 m を測る。路面の構築土から、キセルと思われる真鍮製品が出土した。

柱穴9 直径約 0.4 m、深さ約 0.3 m を測る。埋土より江戸時代初頭の遺物が出土した。

柱列 (図10) そのほかに多数の柱穴・小穴を検出した。一辺 0.1 ～ 0.2 m の根石様の石のあるものもあるが、ほとんどが素掘りの柱と思われる。この中から、瓦列と平行な柱列を復元した。

柱列1・2・5は柱間約2.0mを測る。柱列3・4・6は柱間1.9mを測る。しかし、建物として復元できていない。

第3面の遺構（図7、図版1）

石列88（図版2）石列4の下層で検出した南北石列で、抜き取られたと思われる部分もあるが、南北2.2m、幅0.5mを検出した。一辺0.2～0.4mの自然石を敷地側（東側）に高くなるように傾斜して並べる。石列88の断面位置は、セクション1の16層に該当するが、セクション断面部分では石列は残存していない。

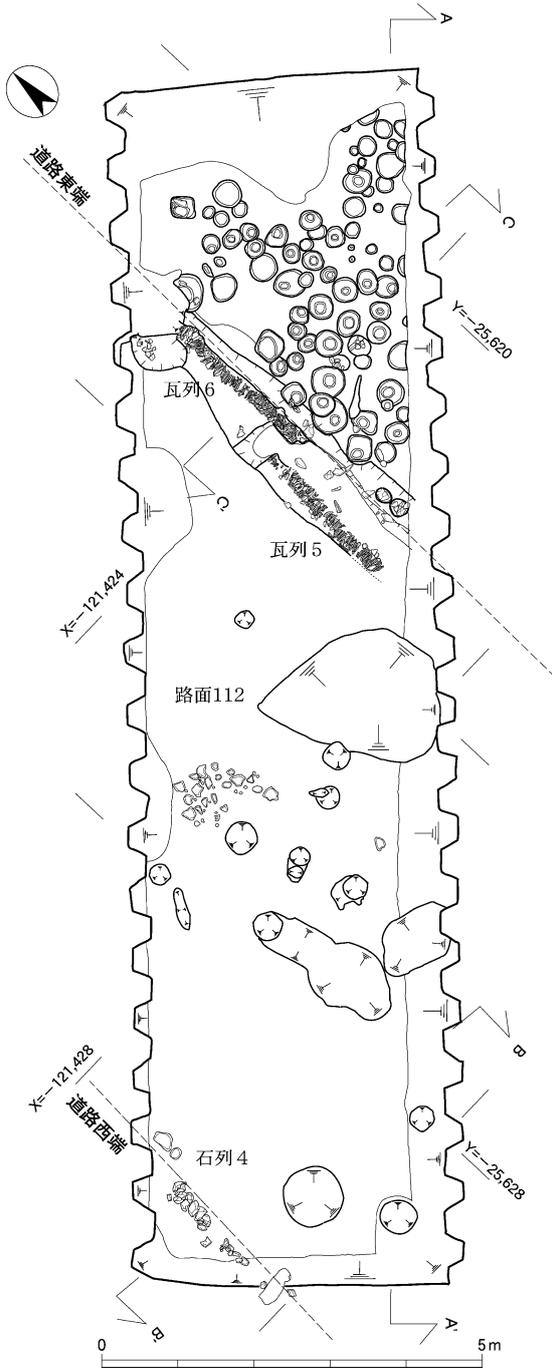


図6 第2面平面図（1：100）

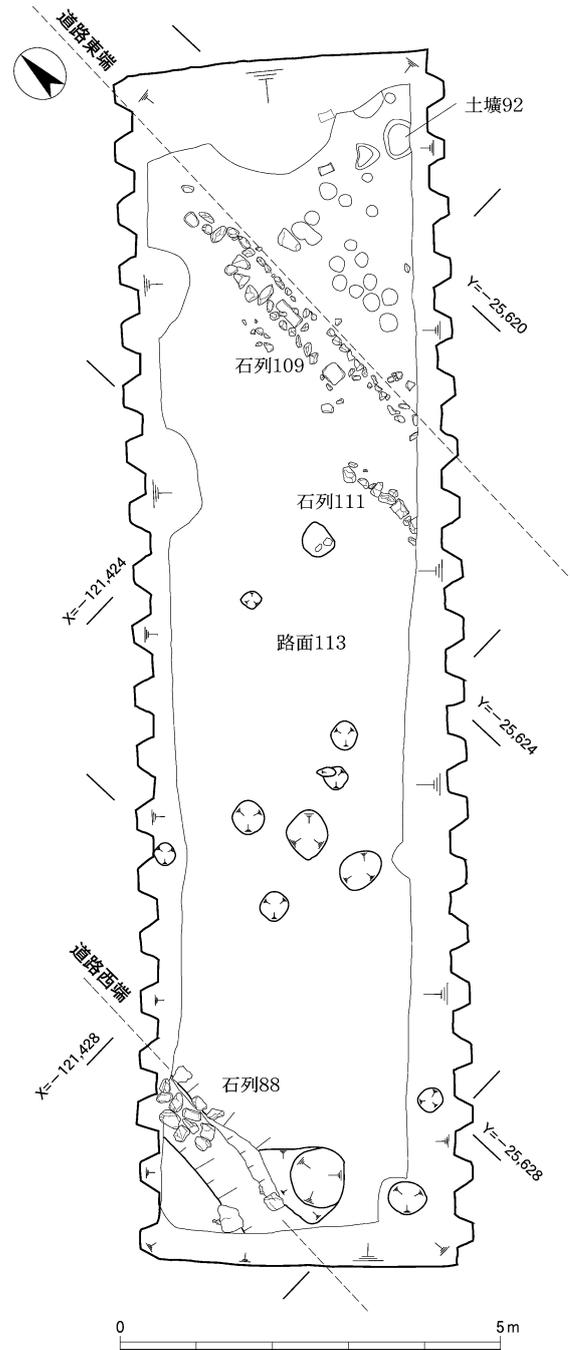


図7 第3面平面図（1：100）

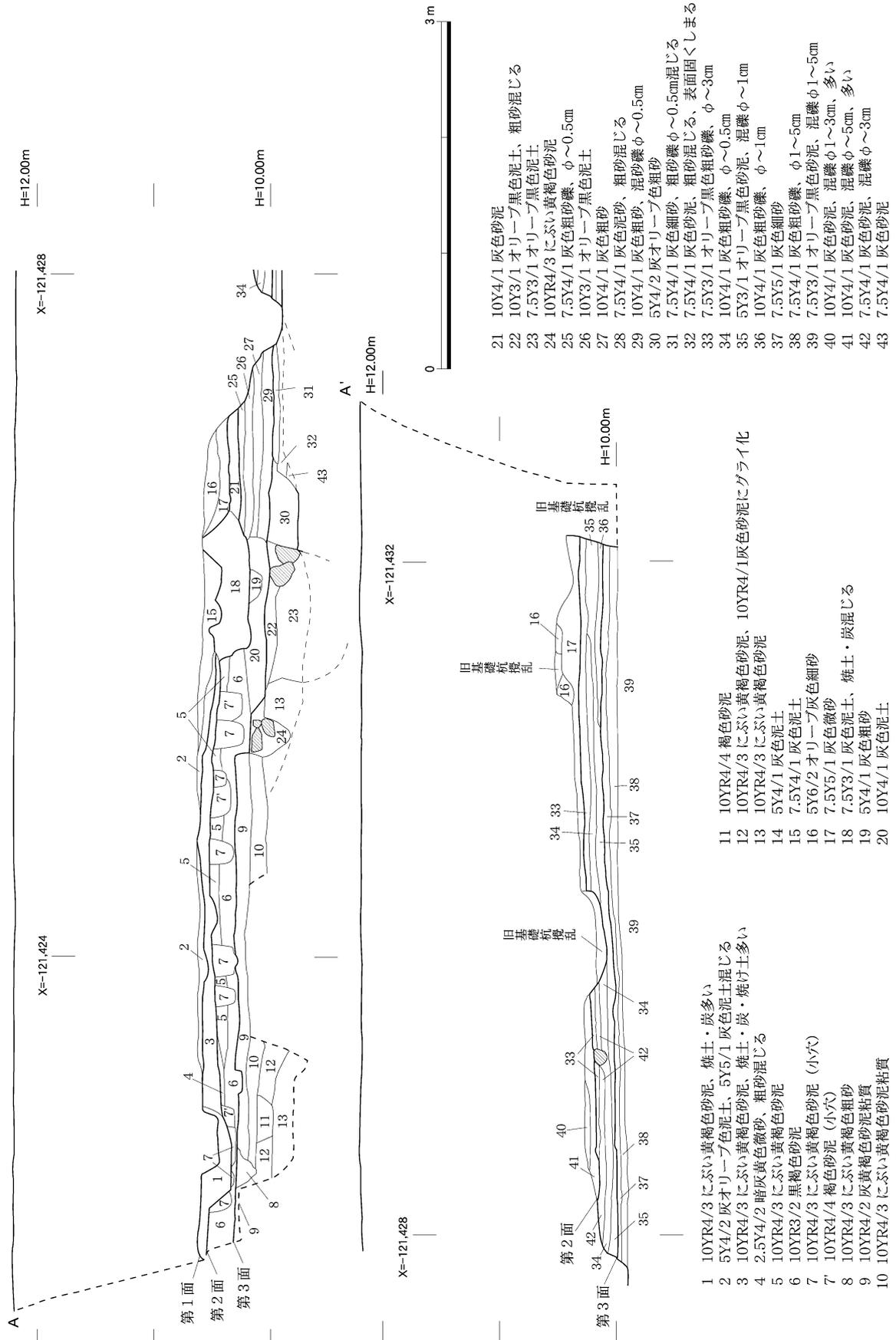
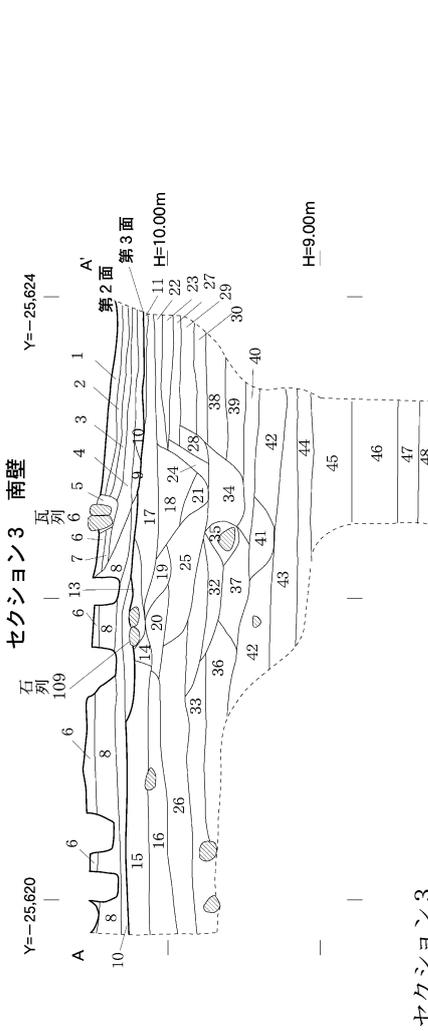
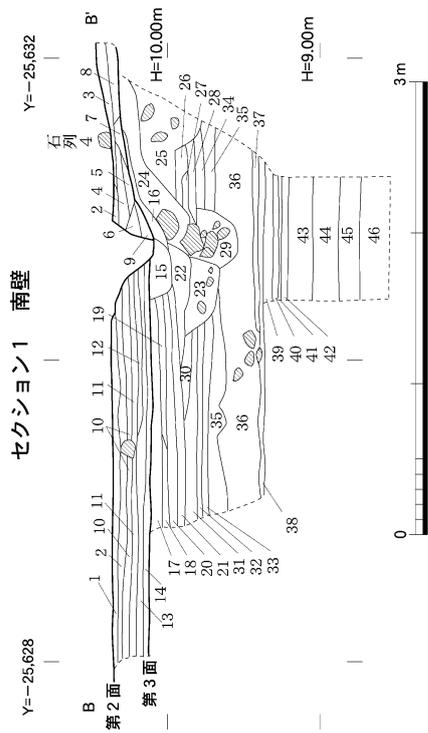


図8 調査区断面図 (1:50)



セクション1 南壁

セクション3 南壁

- 15 10Y4/1灰色細砂、混砂泥 (溝?)
- 16 10Y4/1灰色砂泥
- 17 5Y4/1灰色砂礫、混細砂・礫φ~2cm (路面)
- 18 10Y4/1灰色砂泥、混礫φ2~3cm (路面)
- 19 7.5Y4/1灰色細砂 (路面)
- 20 7.5Y4/1灰色粗砂
- 21 10Y4/1灰色細砂
- 22 10Y4/1灰色微砂、混微砂
- 23 10Y4/1灰色砂泥、混礫φ~10cm
- 24 7.5Y3/1オリーブ黒色砂泥、混礫φ10~15cm
- 25 10Y4/1灰色粘土粘質、混礫φ~20cm
- 26 10Y4/1灰色砂泥、混粗砂
- 27 10Y4/2オリーブ灰色粘土
- 28 10Y4/1灰色粘土
- 29 10Y4/1灰色砂泥
- 30 10Y5/1灰色細砂
- 31 10Y5/1灰色細砂
- 32 5GY4/1暗オリーブ灰色砂泥、混礫φ~2cm (路面)
- 33 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂泥、混細砂
- 34 10Y4/2オリーブ灰色粘土、固くしまる (整地層?)
- 35 5GY5/1オリーブ灰色微砂
- 36 5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土
- 37 7.5Y4/1灰色細砂
- 38 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂泥、混礫φ~3cm多い (路面)
- 39 7.5Y4/1灰色砂泥、固くしまる
- 40 10Y3/1オリーブ黒色砂泥、混礫φ~1cm (路面)
- 41 10Y3/1オリーブ黒色砂泥、粘質・混粗砂
- 42 7.5Y3/1オリーブ黒色砂泥、混礫φ~0.5cm (路面)
- 43 7.5Y4/1灰色砂泥、混粗砂
- 44 7.5Y3/1オリーブ黒色砂泥、混礫φ~1cm
- 45 5Y3/1オリーブ黒色粘土、混粗砂礫φ~1cm
- 46 10Y3/1オリーブ黒色粘土、混粗砂

- 33 5Y4/3暗オリーブ色砂泥、固くしまる
- 34 10Y4/1灰色粘土 (溝?)
- 35 7.5Y5/1灰色微砂、灰色粘土混
- 36 10YR4/3にぶい黄褐色粘土
- 37 7.5Y4/1灰色粘土
- 38 7.5Y5/1灰色粗砂、下層は微砂多くなる
- 39 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土
- 40 7.5Y4/1灰色砂泥、混礫φ1~3cm (路面)
- 41 7.5Y4/1灰色砂泥粘質
- 42 10Y3/1オリーブ黒色粘土
- 43 7.5Y4/1灰色粘土、上面は固くしまる (路面)
- 44 7.5Y4/1灰色粘土
- 45 10Y4/1灰色粘土
- 46 7.5Y4/1灰色粘土
- 47 5Y4/1灰色砂泥粘質、柔らかい
- 48 2.5Y4/1黄灰色砂泥粘質、混粗砂礫φ~1cm多い

- セクション1
- 1 5Y4/2灰オリーブ色砂礫、混細砂・礫φ~4cm (路面)
 - 2 5Y4/1灰色細砂、混礫φ~2cm
 - 3 2.5GY4/1暗オリーブ色砂泥
 - 4 2.5GY4/1暗オリーブ色粘質土
 - 5 10Y5/1灰色砂泥、混細砂
 - 6 5Y4/1灰色砂礫、混細砂・礫φ~3cm
 - 7 10Y4/1灰色粘質土、混炭
 - 8 2.5Y3/1黒褐色粘土、腐植土多い
 - 9 5Y4/1灰色細砂、混礫φ~1cm少量
 - 10 5Y4/1灰色細砂、混粗砂礫φ~1cm (路面)
 - 11 5Y4/2灰オリーブ色砂礫、混細砂・礫φ~3cm (路面)
 - 12 5Y4/1灰色砂礫、混細砂・礫φ~1cm
 - 13 5Y5/1灰色砂礫、混細砂・礫φ~3cm (路面)
 - 14 5Y5/2灰オリーブ細砂 (路面)
- セクション3
- 1 10YR5/1褐灰色砂泥 (路面)
 - 2 10YR5/6黄褐色細砂、混粗砂 (路面)
 - 3 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂、上面固くしまる (路面)
 - 4 2.5Y4/1黄褐色砂泥、上面固くしまる (路面)
 - 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥、混7.5YR5/6明褐色砂泥
 - 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
 - 7 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
 - 8 10YR4/4褐色砂泥
 - 9 10YR7/1灰白色砂
 - 10 2.5Y5/4黄褐色細砂
 - 11 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (路面)
 - 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
 - 13 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 (石列)
 - 14 10YR4/3にぶい黄褐色粘土
 - 15 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥粘質
 - 16 5Y4/1灰色砂泥粘質
 - 17 2.5Y5/3黄褐色粗砂
 - 18 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 (溝?)
 - 19 10YR4/3にぶい黄褐色粘土
 - 20 2.5Y4/1黄褐色粘土
 - 21 7.5Y4/1灰色細砂、混粘土
 - 22 7.5Y4/1灰色砂泥、混粗砂 (路面)
 - 23 7.5Y5/1灰色砂泥、微砂多い (路面)
 - 24 5Y4/1灰色砂泥、混粗砂
 - 25 5Y4/1灰色砂泥 (溝?)
 - 26 5Y4/2灰オリーブ色砂泥粘質
 - 27 5Y4/1灰色砂泥粘質
 - 28 7.5Y4/1灰色粘土、混微砂
 - 29 5Y4/1灰色砂泥、混礫φ~1cm (路面)
 - 30 10Y3/1オリーブ黒色砂泥、混粗砂礫φ~0.5cm多い (整地層?)
 - 31 5Y4/1灰色粘土、5Y3/2オリーブ黒色粘土ブロック混
 - 32 5Y4/1灰色砂泥

図9 セクション1・3断面図 (1:50)

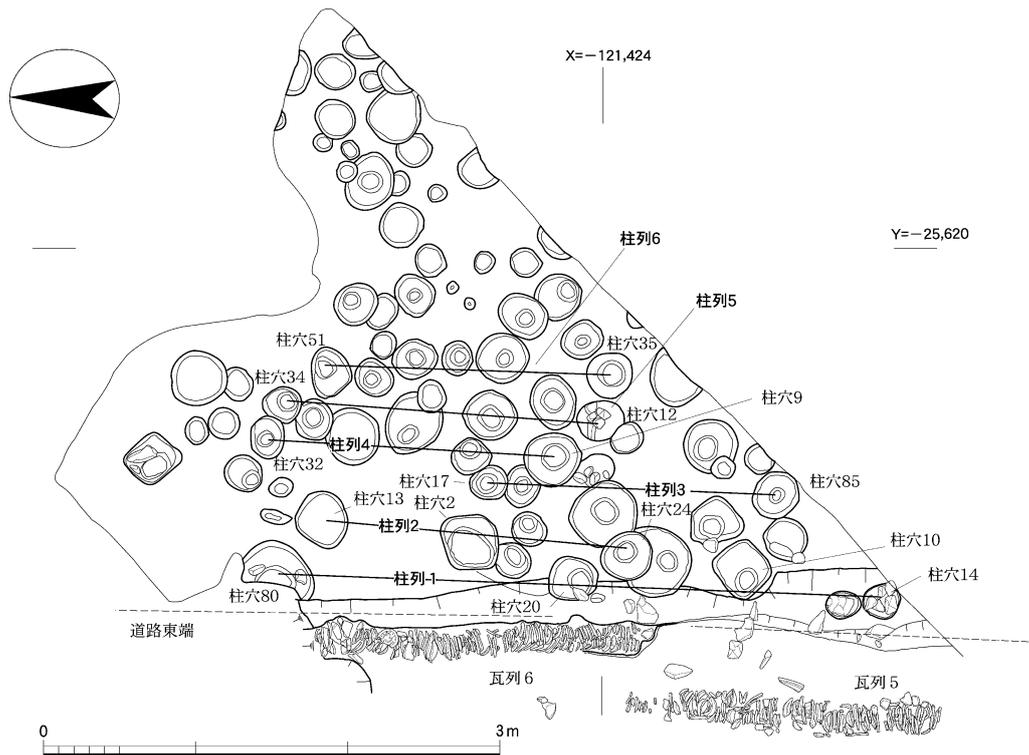


図10 柱列平面図（1：50）

石列109（図版1）瓦列6の下層で検出した。南北約4m、幅0.4～0.5mを測る石列で、南半は標高10.3m、北半は10.2mである。一辺0.1～0.2mの自然石を2列に並べる。

石列111 瓦列5の下層で検出した。南北1.3m、幅0.2mで、石列109の西1mにあたる。一辺0.1～0.2mの自然石を並べる。花崗岩製の割れた五輪塔が出土した。

路面113(図版1・2) 標高10.1mでほぼ水平な路面である。石列88と石列1109・111の間は、路面112と同様、固く締まった粗砂礫が多い。図8にあるように、路面上面は、西端で標高10.1m、東端は標高9.9mで、南西から北東に低くなる。

3 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に19箱出土した。内容は、土器類9箱、瓦類9箱、木器類1箱である。平安時代の遺物は土師器皿、須恵器椀、緑釉陶器椀などがセクションの包含層や各層の混入遺物として少量出土した。鎌倉時代から室町時代の土師器皿、瓦器椀、焼締陶器甕などもセクションの包含層や各層の混入遺物として出土した。第3面からは土師器皿、施釉陶器の瀬戸・美濃皿や天目椀、土師質釜、土人形、金属製品などの16世紀末の遺物が出土した。この路面整地層から銭貨が出土し、東端の屋敷地整地層から鉄釘が出土した。第2面の柱穴9などから江戸時代初頭の土師器皿、輸入染付皿、ミニチュア、瓦類などの遺物が出土している。瓦類は、第2面の瓦列5・6から7箱分出土した。大部分は平瓦と丸瓦で、平瓦が多く出土し、軒平瓦と軒丸瓦が1点ずつ出土した。

第1面や攪乱から土師器皿、施釉陶器、焼締陶器・磁器、瓦、土製品、木製品、漆器椀、鉄製品など江戸時代末までの遺物が混入して出土している。

(2) 土器・陶磁器類

第2面出土土器 (図11)

1は土師器皿である。口径6.8cm、器高1.6cm、小型の皿である。内面はナデ、外面はオサエ。柱穴9柱当りから出土。

2は瓦器製のミニチュア茶釜である。復元最大径5.2cm、器高2.5cm。柱穴9柱当りから出土。16世紀末。

3は中国青花皿である。口径10.4cm、器高2.3cm。見込みに水禽草花文がある。柱穴9柱当りから出土。16世紀末から17世紀初め。

第3面出土土器 (図12、図版2)

4は土師器皿である。口径9.2cm、器高1.8cm。内面から外面口縁部までナデ、外面体部はオサエ。土壙92から出土。

5は土師器皿である。口径9.8cm、残存器高2.0cm。内面から外面口縁部までナデ、外面体部はオサエ。口縁部には炭化物が付着する。構築土から出土。

6は土師器皿である。口径10.3cm、器高1.8cm。厚手で、内面ナデ、外面オサエ。土壙92から出土。江戸時代初頭。

7は灰釉皿である。口径10.1cm、器高2.3cm。淡黄色の灰釉を施す。歪みがある。削りだし高台で、見込み中央を円形に釉ハギする。底部外面に重ね焼きの跡が残る。石列111の埋土から出土。瀬戸・美濃産。16世紀末。

8は天目椀である。口径11.2cm、器高5.5cm。内面から外面体部まで褐釉を施す。石列109の東側から出土。瀬戸産。16世紀末。

9は土師質土器である。最大径17.4cm、残存高7.8cm。いわゆる大和型の羽釜である。内外面をナデ調整している。構築土から出土。底部外面に炭化物が付着。16世紀末から17世紀初頭。

10は土製品である。全長4.9cm、高さ3.8cm。手づくねの犬の人形である。土壙92から出土。16世紀末～17世紀初頭。

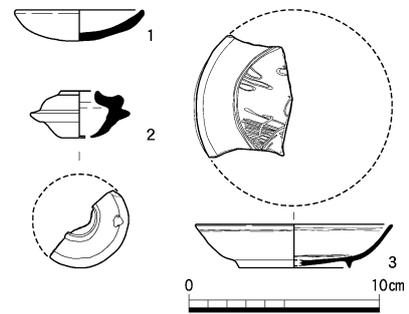


図11 第2面出土土器類実測図(1:4)

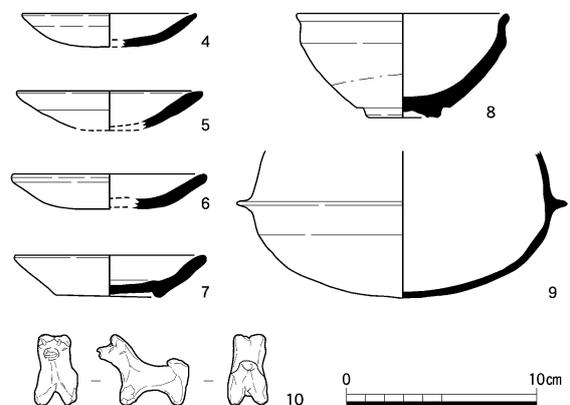


図12 第3面出土土器類実測図(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代 ～室町時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器	2箱		2箱	0箱
桃山時代	土師器、施釉陶器、瓦、金属製品	4箱	土師器3点、施釉陶器2点、土師質土器1点、土製品1点、銭貨5点、鉄釘2点、石製品1点	2箱	1箱
江戸時代初頭	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、土製品、木製品、鉄製品	12箱	土師器1点、染付1点、軒瓦2点、土製品1点、金属製品1点	6箱	5箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦、焼け壁土、土製品	3箱		1箱	2箱
合計		21箱	21点(2箱)	11箱	8箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

(3) その他の遺物

瓦類 (図13、図版2)

11は巴文軒丸瓦である。時計回りの三巴文。珠文は小さく、11個残存。瓦当面周縁は未調整、裏面はナデ。丸瓦部外面はタテケズリとナデ。第2面の瓦列6から出土。

12は均整唐草文軒平瓦である。残存幅14.2cm、高さ3.5cm。中心飾りは3弁の花文で左右に唐草が2転する。瓦当外縁上部は面取。顎部凸面と裏面は横ナデ。第2面の瓦列5から出土。

銭貨 (図14、図版2、表3)

13～17は銭貨である。今回の調査では、中国からの渡来銭などが出土した。全ての銭貨が第3面の路面形成層から出土している。13は皇宋通寶、14は元豊通寶で、共に北宋の銭貨である。淳熙元寶(15)は南宋の銭貨で、裏面に「十」「一」記号

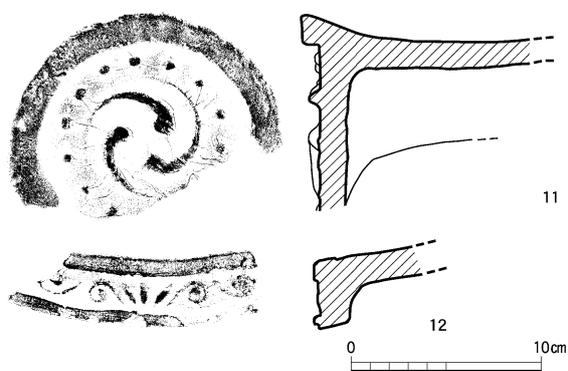


図13 軒瓦拓影・実測図(1:4)

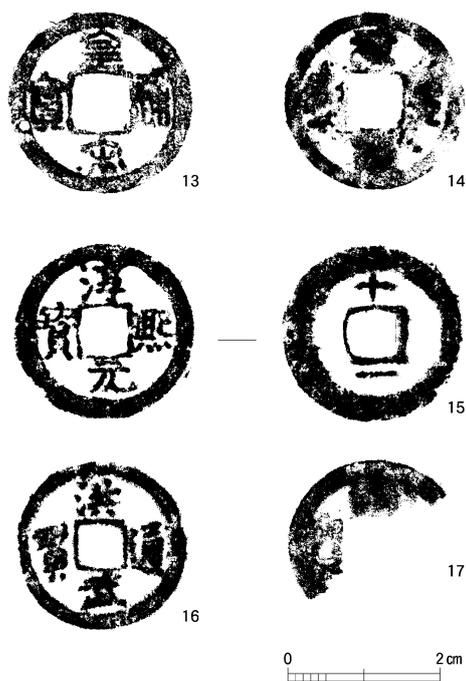


図14 銭貨拓影(1:1)

表3 銭貨一覧表

遺物番号	種類	出土遺構・層	外径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
13	皇宋通寶	セクション1 9～10層間の土層	24.6	1.0	7.3	2.98	皇宋元年(1039年)
14	元豊通寶?	第3面路面掘り下げ	23.7	0.9	7.1	2.39	元豊元年(1078年)
15	淳熙元寶	セクション3の1層	23.9	1.3	6.0	3.25	淳熙11年(1184年) 裏面に「十」「一」記号
16	洪武通寶	第3面路面掘り下げ	21.5	1.4	5.7	2.65	洪武元年(1368年)
17	不明	第3面路面掘り下げ	22.7	0.8			不明、残存重量(1.45g)

があり、淳熙11年鑄造である。洪武通寶(16)は明の銭貨である。

金属製品(図15)

18は金属製品である。残存長12.6cm、最大径6.35cmの細長い筒状の製品で、薄い真鍮の板をパイプ状に加工している。端部の口径を太く加工し、反対側の端部には細い筒を差し込んで組み合わせている。キセルの一部と思われる。第2面の路面層から出土した。

19・20は鉄釘である。19は全長16.0cm、厚さ0.5cm、最大幅1.5cmの角釘で、頭部は1cmほど折り曲げて整形する。先端は細く仕上げる。20は残存長10.0cm、厚さ0.5cm、最大幅0.8cmを測る角釘で、頭部は0.9cmほど折り曲げて整形する。先端は欠損している。どちらも第3面の整地層から出土した。

石製品(図16、図版2)

21は五輪塔である。残存高25.5cm、最大幅17.0cm、最大厚16.5cmを測る。直方体の花崗岩を削り、中間がくびれている。正面には梵字を刻む。2文字が残存しており、「ケン」「カン」と読める。第3面石列111から出土した。

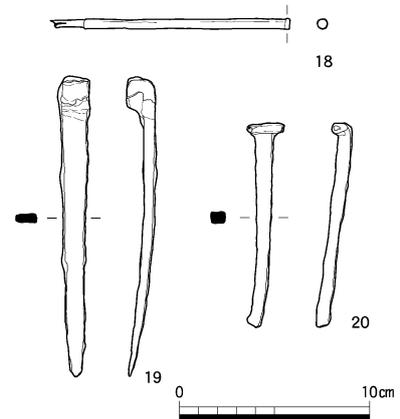


図15 金属製品実測図(1:4)

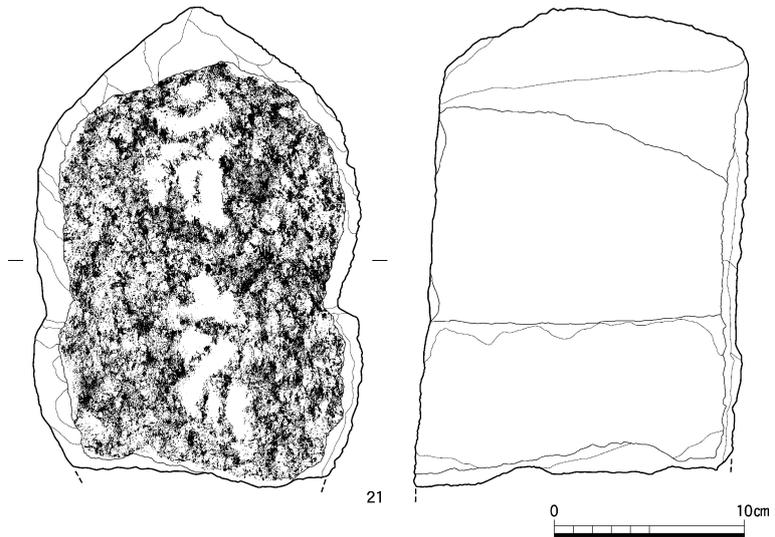


図16 石製品拓影・実測図(1:4)

4. まとめ

江戸時代の淀城は1623年から築城された。1637年以降の絵図では、調査区は東曲輪の中に位置し、大手門の東側に面する空閑地となっている。しかし、図17のように調査地北隣の3次調査¹⁾では、標高10.3mの8面で江戸時代初頭の礎石列やカマド跡を検出し、町家を復元している。

今回の調査地では、標高10.5m以下の第2面で江戸時代初頭の石列4、瓦列5・6、路面112や多数の柱穴や柱列を検出した。これらの調査成果を総合すると、道路沿いには縁石があり、一段高まって建物が並んでいたことになる。淀小橋から淀大橋に至る街道にあたり、両側には道に面して家々が立ち並んでいたと考えられる。淀城築城に際し、これらの民家を立ち退かせ、東曲輪を造成した結果、大手門東側の空閑地となったと考えられる。よって、第2面は、江戸時代初期の淀城築城前の遺構の可能性が高いと考える。

第2面の下層の標高10.2mの第3面では、3～4層の路面層が重なり、宅地内の土壌から16

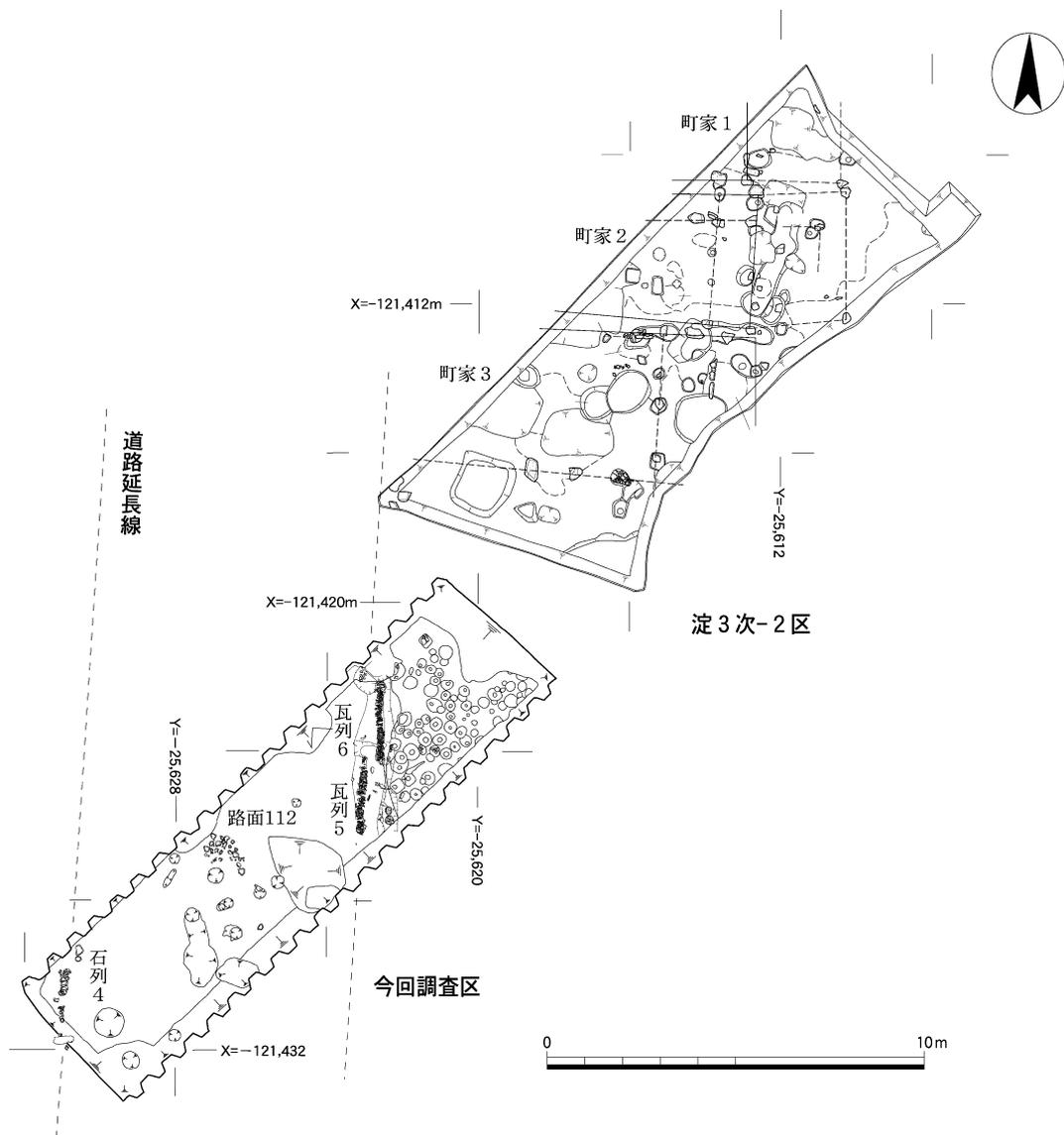


図17 江戸時代初頭の遺構配置図(1:200)

世紀末頃の遺物が出土している。第2面との時期差がどれくらいあるか不明確であるが、『淀の歴史と文化²⁾』によると、豊臣秀吉によって京都から大阪に至る街道として整備されたとされる。第3面の出土遺物は16世紀末頃なので、路面も16世紀末頃まで遡るもので、京都と大阪を結ぶ大坂街道と考えられる。

さらに下層にセクション断面で見られた路面状の整地層があり、平安時代から中世の遺物が出土していることから、桃山時代以前から淀の地は街道筋として整備され、利用されてきたことが推定される。

現地表から2 m以下の標高約10 mで中世から江戸時代初頭の路面を検出したが、今後、この街道沿いの発掘調査が進めば、全容が明らかとなるであろう。

註

- 1) 内田好昭「長岡京跡・淀城跡（2次・3次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006- 3 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- 2) 西川幸治『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994 年

Ⅱ 淀城跡（6次調査）

1. 調査経過

(1) 調査の経緯

この調査は、京阪電気鉄道株式会社の京都線淀駅高架に伴う発掘調査である。線路南東沿いに大阪行き路線の高架橋を建設することになり、高架工事関連では、2006年度の4次・5次調査に引き続く第6次調査である。京阪線淀駅前の踏切南側から線路沿いに大阪方向に全長約290mの間に、全長約33～39m、幅約5～7.5mで7基の橋脚が建設されることになった。調査区は鴻池JVの第1工区と銭高JVの第2工区にわたり、それぞれの工区が、調査区に相当するため、名称は工区名と同一にした。第1工区が大阪側からA1・2区、B1～3区に分かれ、第2工区がB4・5区に分かれている。各調査区の面積は、A1区169㎡、A2区193㎡、B1区213㎡、

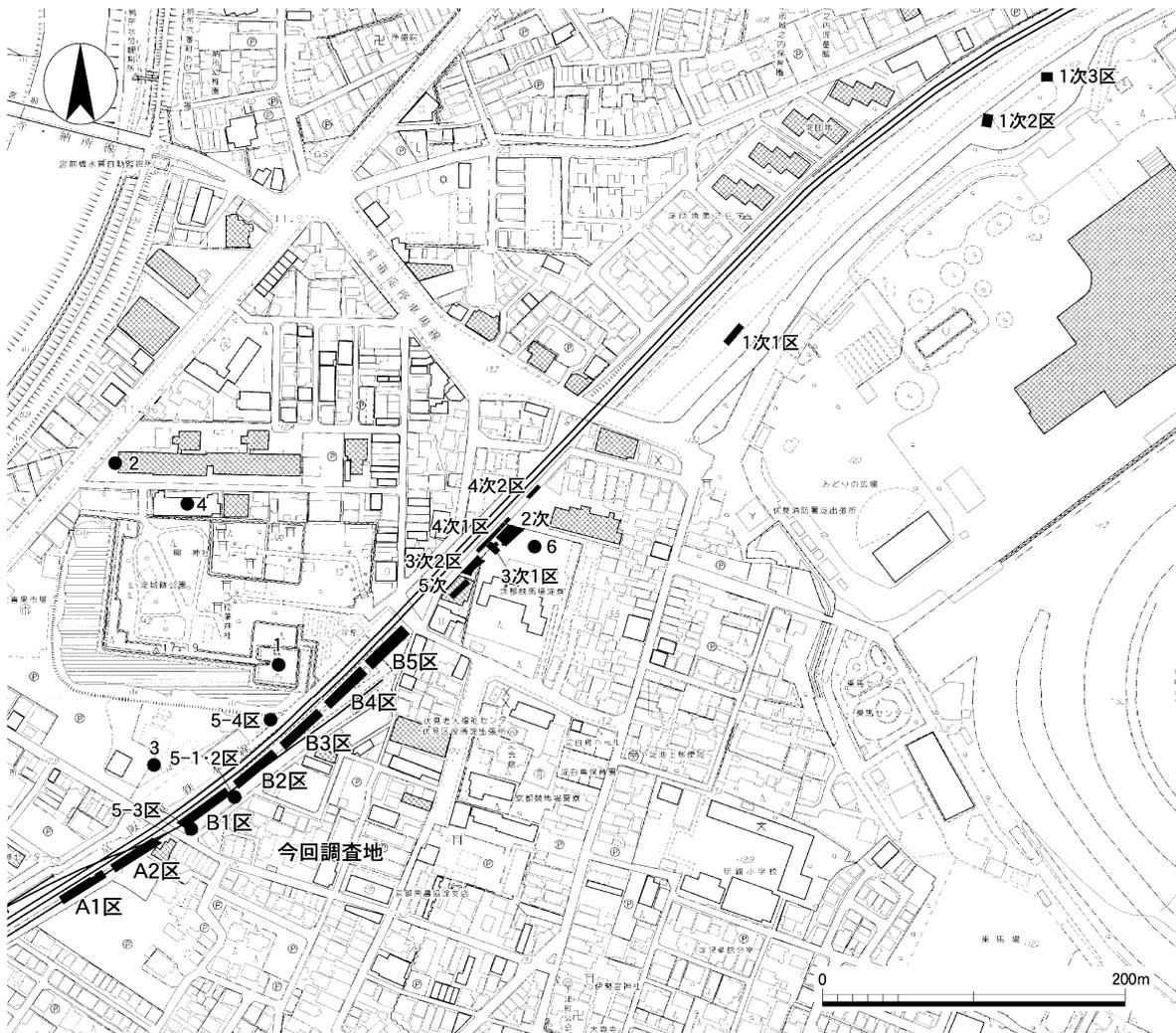


図18 調査地と周辺調査位置図（1：5,000）

B 2区 183 m²、B 3区 183 m²、B 4区 204 m²、B 5区 205 m²の計 1,350 m²である。

当地は、周知の遺跡の淀城跡にあたり、近くの調査で淀城石垣などを検出していることから、江戸時代の淀城の遺構を調査することと、淀城期以前の中世などの土層状態を確認することを目的とした。

調査に先立ち、それぞれの J V が鋼矢板や H 型鋼材を打ち込み、土留め工事の準備を行い、さらに、各区内に 10 m 間隔で 4 本×2 列で 8 本の橋脚用基礎杭を敷設した。さらに、線路に近接しているため、調査中に地表面から 1 m までの掘削深度で、「切張り・腹起こし」を設置することとなった。これらの工事に伴い淀城の石垣の石材が出土した場合は、研究所側で記録をとった後、残存状態の良好な石は京阪電気鉄道株式会社側で保管してもらうこととなった。現場事務所設置等の付帯工事を行った後、上記工事が終了した各工区をそれぞれ約 1 ヶ月の予定で順次調査することとした。

現場事務所設営など開始し、準備工の終わったところから重機による表土掘削を始め、調査を開始した。A 2 区から調査を開始し、A 1 区、B 3 区、B 2 区、B 1 区、B 4 区、B 5 区と調査を進めた。必要に応じて、J V が切張り・腹起こしを設置した。また、各区の調査中、準備工の中で撤去された石材の刻印の有無などを点検し、残存状況の良好な石材に番号を付けていった。調査は、基本的に遺構検出・掘削、写真撮影、実測作業などを行い、断割り調査を行って終了した。さらに、調査後、各調査区の工事中に 1～3 箇所の新掘り調査を行い、下層の土層を確認した。現場事務所や周辺設備を撤去し、すべて終了した。

(2) 位置と環境

I 章の(2)「位置と環境」で述べたように、古代・中世と、淀の地は桂川、宇治川、木津川の三川合流地点に位置し、海運交通の要所であり、淀魚市で淀川を利用して運ばれた魚介類、塩、米穀、木材などが取引されたとある。中世からあった淀古城は、豊臣秀吉によって修築されたが、その折に京都から淀、淀小橋から淀大橋を渡って大阪に至る街道が整備され、京都大阪間の陸上交通の要所となった。現在の淀城は、元和 9 年(1623)徳川幕府の命を受けた松平定綱が築城したものである。寛永 10 年(1633)永井尚政が城主となり、狭かった城下町の拡張と水害防止のため、



図 19 A 1 区から望む調査地遠景 (南西から)



図 20 B 4 区調査風景 (南西から)

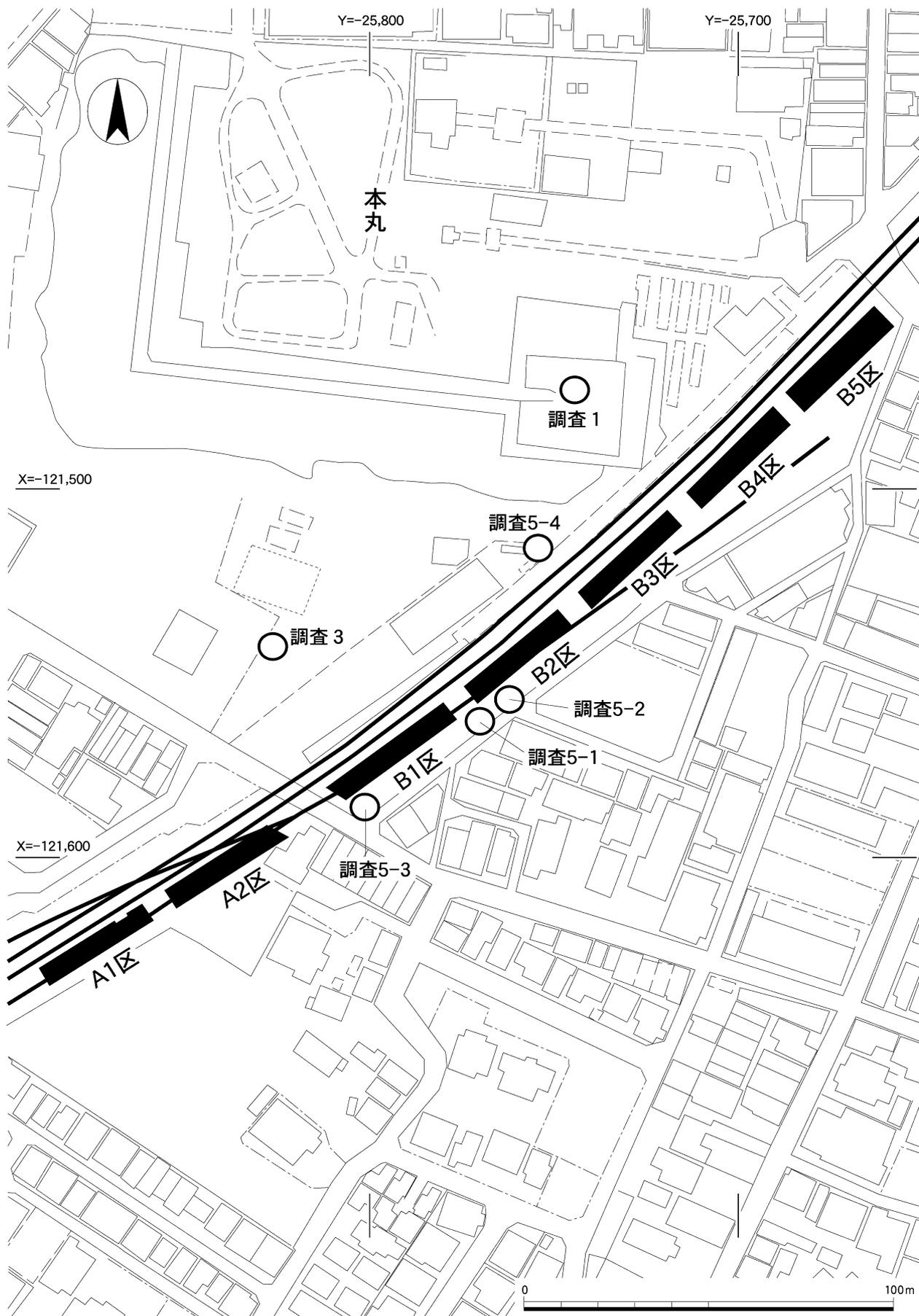


図 21 調査区配置図 (1 : 1,500)

寛永14年(1637)から木津川の付け替えと、中堀と内高島の武家屋敷などを造成した。幕末の慶応4年(1868)鳥羽伏見の戦いで城下は焼失し、明治4年(1872)廃藩となった。

調査地は淀城本丸東側から南側の地域に該当する。『淀の歴史と文化』¹⁾や『京の城—洛中洛外の城郭』²⁾の淀城復元図を参考にすると、調査地のA1区は拡張後の内高嶋に南面する外堀北肩に推定され、A2区は本丸南方の内高嶋の武家屋敷、B1区は中堀の南・北肩と本丸南側の曲輪、B2区は本丸南側の曲輪、B3区は本丸南側の曲輪と内堀北肩、B4区は本丸東側の曲輪と東曲輪との中堀西肩、B5区は中堀東肩と東曲輪と推定された。東曲輪や南の曲輪・内高嶋部分には、淀藩の蔵や高位な家臣の屋敷が所在し、東曲輪東側の街道沿いは町人の町家地域となっていた。その東側と南側は下級武士の居住地域になる。

(3) これまでの調査

淀城跡で行われた発掘調査の主なものには、I章の(3)「これまでの調査」で記しているように、調査1～6、1次～5次調査がある(図18)。この中で、今回の調査地近くの2003年の試掘調査³⁾(調査5)、1990年の試掘調査⁴⁾(調査3)を参考に調査を進めることとなった。調査5の2区では地表下0.4～1.4mで、3区では地表下2.8m以下で石垣石を検出した。また、4区では地表下1.2mで石垣の裏込め部分を検出した。調査3では、地表下0.2～2.9mで堀埋土を、地表下2.2mで中堀北肩の石垣を検出している。

註

- 1) 西川幸治『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年
- 2) 『京の城—洛中洛外の城郭—京都市文化財ボックス第20集』京都市文化市民局文化部文化財保護課
2006年
- 3) 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 4) 久世康博「淀城跡(TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局
1991年

2. 遺 構

(1) 基本層序と遺構の概要

A 1区～B 5区の地表面は、ほぼ標高約 12.0 mである。旧地表面は京阪電車の線路敷設時に削平された部分があるが、標高約 11.5 mで江戸時代後期の遺構面となり第 1面とし、標高約 11.0 mの江戸時代前期の遺構面を第 2面とした。遺構総数 149 基のうち 97 基が A 2区で検出され、その他の地区では石垣・堀・堀肩部・礎石・土壇・集石・雨落ち・柱列などを検出した。各調査区の断面断割り調査で淀城造成時の堤状盛土を確認した。以下、各調査区の基本土層と遺構の概要を記す。

A 1区 盛土を除去して、北東側の地表下 0.7 m、標高 11.3 mで堀の北肩とみられる 39 層褐色泥土層が南方に低くなり、北から 2～3 mで堀内部の堆積層の 38 層灰黄褐色泥砂層が南方に低くなることを確認した。堀肩部の土層は版築状に標高 8.01 mまで確認した。肩部より南側は明治期以降の埋立土層となる。

A 2区 盛土を除去して、地表下 0.5 m、標高約 11.5 mの 21～28 層の泥砂層・粗砂層の面を第 1面とした。Y=-25,840 m付近から北側の 22～28 層は微砂・粗砂層で軟弱な地盤である。標高 11.1 mで中央部では、造成時の堤状盛土（58～80 層）と粗砂層盛土（50～57 層）の面を検出し、第 2面とした。断ち割り調査で、核と成る堤状盛土を標高 9.7～10.3 mで 2箇所確認し、3箇所の深掘り調査で、造成時の粗砂層盛土が標高 8.0 mまで続くことを確認した。また、第 1面では江戸時代後期の土壇 20・27・28・38 や柱穴を多数検出した。第 2面の江戸時代前期の遺構としては、建物基礎の石垣 66 や柱列、建物 5などを検出した。

B 1区 京阪電車敷設時の攪乱が多く、地表下 0.7 m、標高 11.3 mの 38 層黄褐色砂泥層で集石、土壇、礎石や堀北肩部を検出し、第 1面とした。標高約 11.0 mの第 2面では、集石や南面する石垣を検出した。石垣を断ち割り調査で、標高 8.8 mまで造成時の盛土層を確認した。また、肩部南側では石垣 9を検出し、18 世紀中頃に石垣位置を移動した跡を確認した。堀は明治期以降に埋め立てた埋土となる。

B 2区 京阪電車駅ホームの基礎栗石が多くあり、地表下 0.7 m、標高 11.3 mの 20 層にぶい

表 4 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代前半	A 2区 石垣66、柱穴72、柱列 2・3、建物 5 B 1区 石垣 7・8 B 2区 布基礎 4・5、集石 2・3、石列 6、礎石 8・11 B 3区 石垣17 B 4区 集石 5、瓦溜 4・8、雨落ち 6、集石 7、柱列11、石垣 9 B 5区 石垣 1	
江戸時代後半	A 2区 土壇20・27・28・38、柱列 1 B 1区 石垣 9 B 4区 土壇 1・2	

黄橙色粗砂層まで掘り下げた。この面を第2面として、蔵と考えられる建物の布基礎4・5や外壁基礎の石列6などを検出した。遺物はほとんど出土しなかった。最後に、断ち割り調査で堤状盛土と造成状況を標高8.7 mまで確認した。

B 3区 京阪電車ホームの基礎攪乱が深く、標高11.1 mの18層にぶい黄橙色粗砂層を第2面とした。この面から北側に落ち込む10～16層を検出した。14・15層は内堀南側の石垣で、調査区北半は本丸に面する内堀となる。断ち割り調査で、標高8.9 mまで、大部分が、黄橙色粗砂層で造成していることを確認した。

B 4区 標高10.9 mでの38層褐色シルト層を第1面としてとして遺構検出を行い、土壌を検出した。第1面の約0.1 m下層では、整地層の45層褐色砂泥層を検出した。これを第2面として、集石、柱列などとともに、石垣と堀を検出した。断ち割り調査では、大手門南側の敷地部分の造成時の堤状盛土の断面を標高9.0 mまで確認した。

B 5区 標高10.8 mまで攪乱され、標高10.3 mの22～24層は石垣の裏込め部分の泥砂・シルト層である。調査区南端の標高9.8 mで石垣と堀を検出した。

(2) A 1区の遺構 (図22・23、図版3)

調査区は、内高嶋の南端の外堀肩部にあたる。北東側の地表下0.7 mの標高11.3 mで、堀の北肩とみられる39層褐色泥土層を検出した。北から2～3 mで38層礫の多い灰黄褐色泥砂層が下がり、堀内部の堆積と判明した。堀の肩は北西から南東方向を示し、調査区では斜め方向である。復元図における周辺の地割りと一致し、推定線の位置とも合致した。39層より南の部分は、京阪電車の路盤造成時の盛土と考える。

部分的な「深堀り」を実施し、標高8.5～8.1 mまでの層序の状態を3箇所を確認した。断面図は作図位置に若干の異同があり、層序は部分的に不連続だが層序の大枠を理解するため提示した。

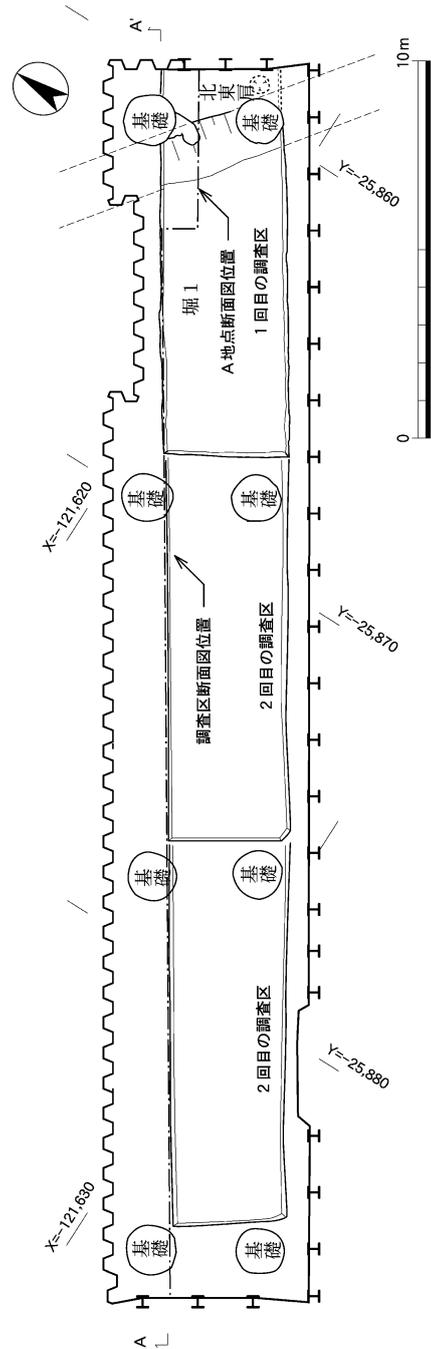


図22 A 1区平面図 (1 : 200)

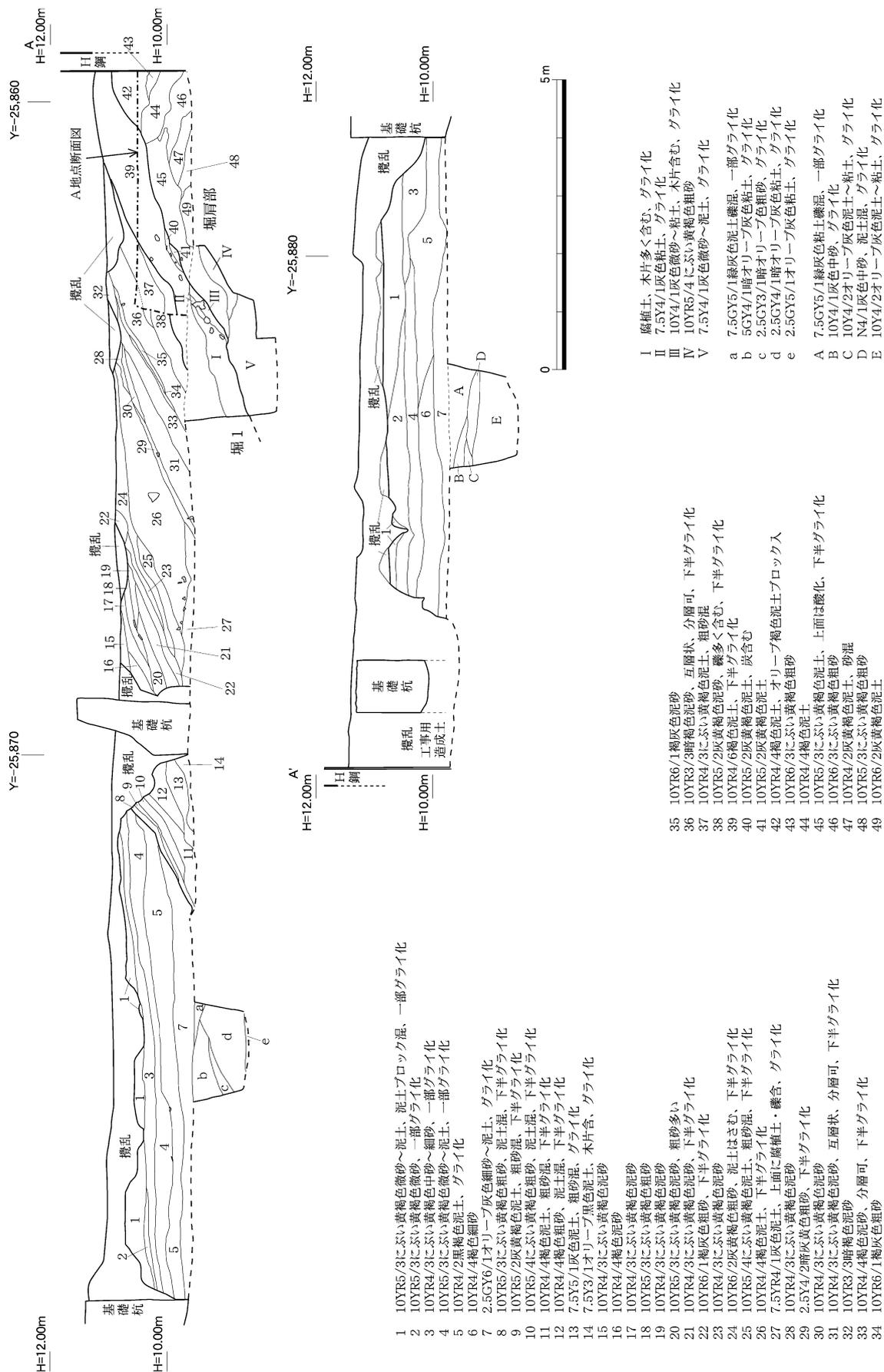


図 23 A 1 区断面図 (1 : 100)

- 1 10YR5/3にぶい黄褐色微砂～粘土、泥土ブロック混、一部グライイ化
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色微砂、一部グライイ化
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色中砂～細砂、一部グライイ化
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色微砂～粘土、一部グライイ化
- 5 10YR4/2黒褐色粘土、グライイ化
- 6 10YR4/4褐色細砂
- 7 2.5GY6/1オリーブ灰色細砂～粘土、グライイ化
- 8 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂、泥土混、下半グライイ化
- 9 10YR5/2灰黄褐色粘土、粗砂混、下半グライイ化
- 10 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂、泥土混、下半グライイ化
- 11 10YR4/4褐色粘土、粗砂混、下半グライイ化
- 12 10YR4/4褐色粗砂、泥土混、下半グライイ化
- 13 7.5Y5/1灰色粘土、粗砂混、グライイ化
- 14 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土、木片含、グライイ化
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 16 10YR4/4褐色微砂
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
- 18 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 20 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂、粗砂多い
- 21 10YR6/1褐色微砂、下半グライイ化
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、下半グライイ化
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 24 10YR6/2灰黄褐色粗砂、泥土はまむ、下半グライイ化
- 25 10YR6/4にぶい黄褐色粘土、粗砂混、下半グライイ化
- 26 7.5YR4/1灰色粘土、上面に腐植土・礫含、グライイ化
- 27 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 28 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂、下半グライイ化
- 29 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 30 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
- 31 10YR4/3にぶい黄褐色微砂、互層状、分層可、下半グライイ化
- 32 10YR3/3暗褐色微砂
- 33 10YR4/4褐色微砂、分層可、下半グライイ化
- 34 10YR6/1褐色粗砂

- I 腐植土、木片多く含む、グライイ化
 - II 7.5Y4/1灰色粘土、グライイ化
 - III 10Y4/1灰色微砂～粘土、木片含む、グライイ化
 - IV 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂
 - V 7.5Y4/1灰色微砂～粘土、グライイ化
- a 7.5GY5/1褐色灰黄色粘土・礫混、一部グライイ化
 - b 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土、グライイ化
 - c 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粗砂、グライイ化
 - d 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土、グライイ化
 - e 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土、グライイ化
- A 7.5GY5/1褐色灰黄色粘土・礫混、一部グライイ化
 - B 10Y4/1灰色中砂、グライイ化
 - C 10Y4/2オリーブ灰色粘土～粘土、グライイ化
 - D N4/1灰色中砂、泥土混、グライイ化
 - E 10Y4/2オリーブ灰色粘土～粘土、グライイ化

- 35 10YR6/1褐色微砂
- 36 10YR3/3暗褐色微砂、互層状、分層可、下半グライイ化
- 37 10YR4/3にぶい黄褐色粘土、粗砂混
- 38 10YR5/2灰黄褐色微砂、礫多く含む、下半グライイ化
- 39 10YR4/6褐色粘土、下半グライイ化
- 40 10YR5/2灰黄褐色粘土、炭含む
- 41 10YR5/2灰黄褐色微砂
- 42 10YR4/4褐色粘土、オリーブ褐色粘土ブロック入
- 43 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂
- 44 10YR4/4褐色粘土
- 45 10YR5/3にぶい黄褐色粘土、上面は酸化、下半グライイ化
- 46 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂
- 47 10YR4/2オリーブ灰色粘土、砂混
- 48 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
- 49 10YR6/2灰黄褐色粘土

堀の北東肩は主に 39 層が盛られている。肩の上面には石垣はみられない。39 層の遺物は江戸時代の 19 世紀に属する。39 層の下には、土盛りの核となった部分の 42 層褐色泥土層がある。42 層からは中世の瓦器などが出土している。この下は粗砂と泥土が雑であるが互層状となる。層位は北側（城の内側）に下がる。堀際に小山を築いて内側を整地したと考えられる。39 層上面には 38 層があり、板ガラスや銅線を含み、明治以後の堆積とみられる。

(3) A 2 区の遺構 (図 24 ~ 26、図版 3)

調査区は、A 1 区で検出された外堀北側の曲輪の内高嶋にあたり、武家の建物跡が推定された。標高約 11.5 m で遺構面を検出した。この面を第 1 面としたが、調査区长軸方向の中央部以外の残存状況は良くなかった。北半では 28 層灰黄褐色粗砂層（小礫混）、南半では 14 層褐色砂泥層（にぶい黄橙色粗砂混）を成立面とし、土壇 20・25・27・28・38・39・42 や柱列 1 などの柱穴を検出した。柱穴は調査区南半に検出したが、北半からは検出しなかった。出土遺物は江戸時代後期に属する遺物が多く出土した。第 1 面北半は、28 層を成立面とするが、さらさらした砂地なので、この上にもう一層、14 層のような整地層があったと考えられ、第 1 面の成立面は、11.5 m より若干高かったものと推定する。

第 1 面を 0.2 ~ 0.3 m 掘り下げ、標高約 11.2 m で遺構面を検出した。この面を第 2 面とした。この面では、石垣 66、柱列 2 ~ 4、建物 5、集石遺構などを検出した。出土遺物は少なかったが、江戸時代前期に属する。

第 1 面の遺構 (図 24)

土壇 20・25・27・28・38・39・42 それぞれが一辺 0.5 ~ 0.8m の円形や楕円形で、深いものは 0.6m を測る。17 世紀末 ~ 18 世紀後半の遺物が出土した。

柱列 1 柱列 1 (柱穴 37・53・56・11) は、南北方向に並び、南北軸線は北で約 39 度東に傾く。柱穴 11・56 の中間の柱穴が削平されたものと考え、柱間は約 1.4 m で 4 間分となる。その他に柱穴 52・54 などの柱穴を検出したが、遺構面が攪乱で削平され、調査区の幅が狭いため、建物として復元できなかった。なお、柱列 1 は後述する第 2 面の石垣や柱列と同様の方位軸に並ぶと考えて復元したものである。

第 2 面の遺構 (図 25)

石垣 66 (図 27、図版 5) 標高 11.1 m を成立面とする、南西方向に面した石垣 66 を検出した。一部欠損しているが、北西から南東に全長 2.9 m、幅約 0.7 m、高さ約 0.3 m を測り、一辺 50 cm までの自然石が 5 個残っている。北西から南東方向の調査区外に続くと思われる。上面は削平されていたが、高いところもあるので、1 面の造成盛土時に削平された考えられる。元は、最低でも 2 段は組んでいたと考えられる。石垣の東西軸線は東で約 54 度南に傾く。下記の柱列で構成された内高島の武家屋敷の基礎部分と思われる。石垣上面の埋土から 17 世紀中頃の遺物が出土した。

柱列 2 石垣 66 と直交するものと考え、柱穴 97・88・89 で 2 間の柱列を復元した。柱間は

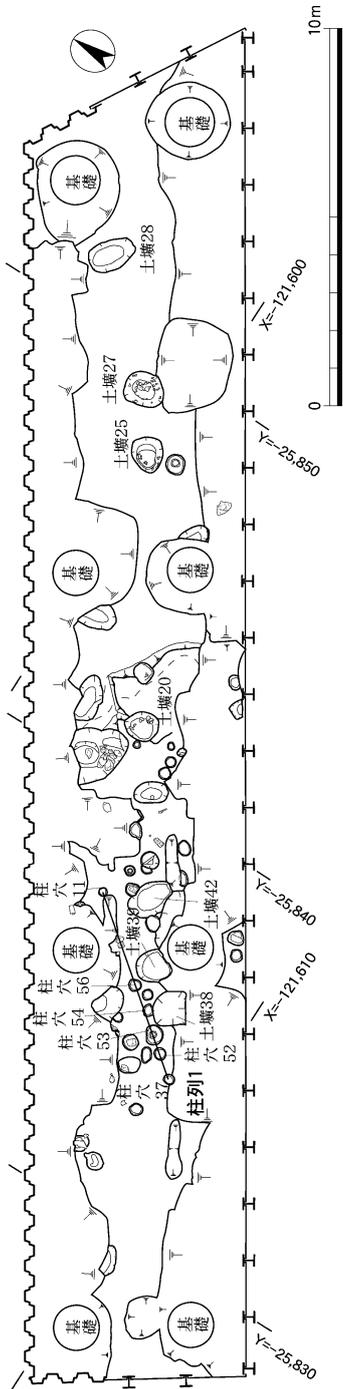


图 24 A 2 区第 1 面平面图 (1 : 200)

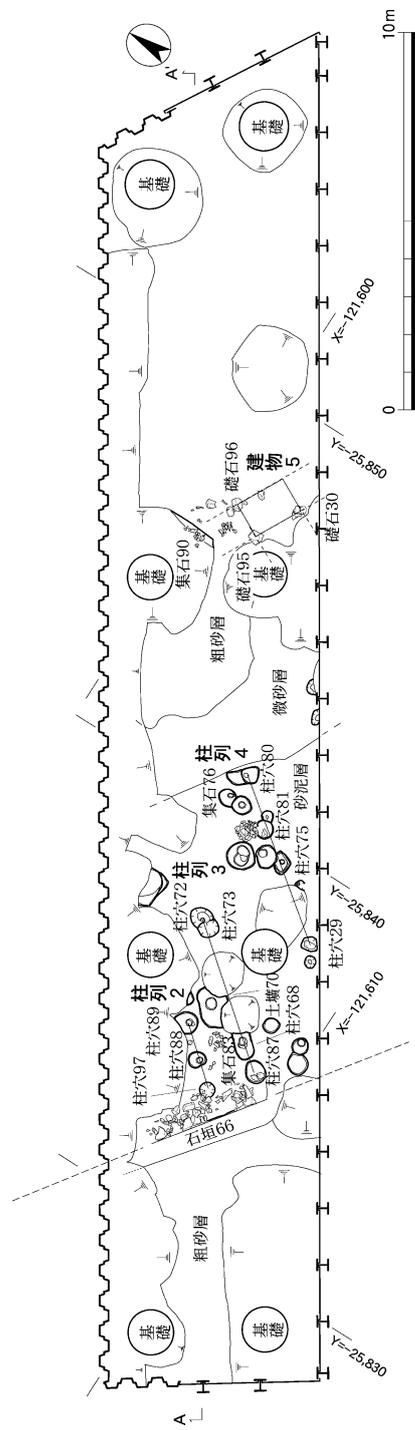


图 25 A 2 区第 2 面平面图 (1 : 200)

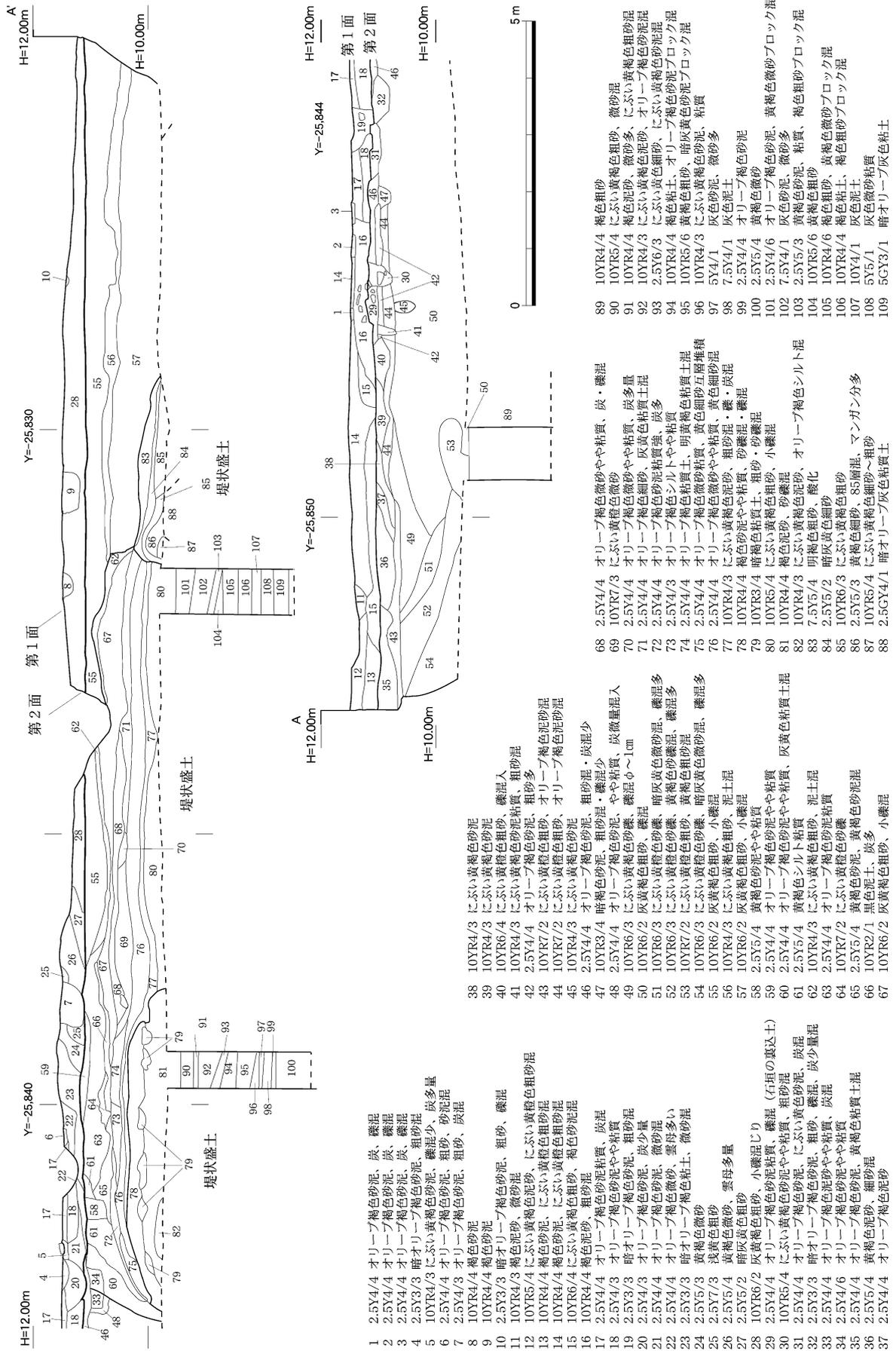


図 26 A 2 区断面図 (1 : 100)

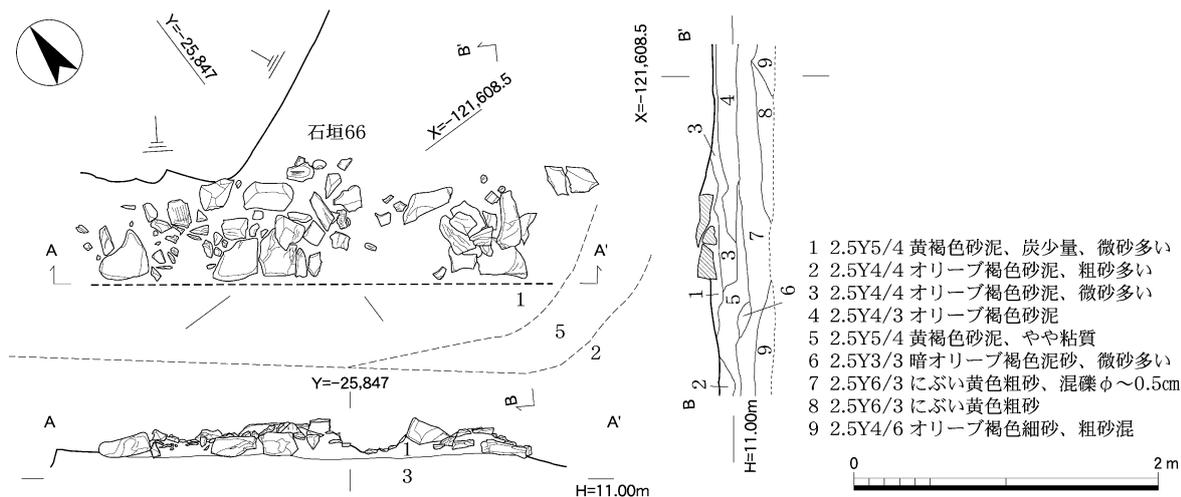


図 27 A 2区石垣 66 実測図 (1 : 50)

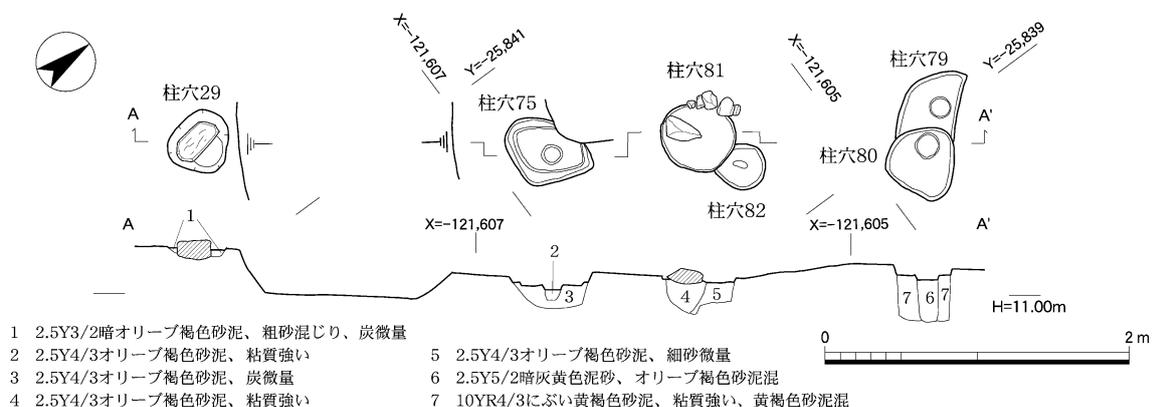


図 28 A 2区柱列 4 実測図 (1 : 50)

約 0.9m で南北方向に並ぶ。東隣の柱列 3 と約 1.3m の間隔で並ぶ。南北軸線は北で約 40 度東に傾く。

柱列 3 柱列 2 と同様に石垣 66 と直交するとして、柱穴 87・68・72 の 4 間分を復元した。柱穴 87 と柱穴 68 の間隔は約 0.9m を測り、柱穴 68 と柱穴 72 は約 3.5m で、中間の柱穴が削平されたものとする。南北軸線は北で約 39 度東に傾く。柱穴 72 より 17 世紀中頃から後半の遺物が出土した。

柱列 4 (図 28) 柱列 3 と同様に、柱穴 29・75・81・80 を復元した。柱穴 29 と 81 には礎石が残る。柱列 3 から約 2.4m 東に位置する。柱穴 29・75・80 は約 2.4m 間隔で南北方向に並ぶ。南北軸線は北で約 37 度東に傾く。柱穴は重複しているものがあり、建て替えがあったと考えられるが、建物としてはまとめられなかった。

建物 5 (図 29、図版 5) 礎石 30・95・96 は一辺約 0.4m の礎石が 3 石の残るもので南北 1 m × 東西 1.4 m を測る。北方には続いているが、西・東・南方に続く可能性がある。軸線は北で約 27 ~ 29 度東に傾く。

最後の断割り調査で、淀城拡張時の敷地造成方法を確認した(図 26、図版 5)。淀城は 1637 年から木津川の流路変更と城下町の拡張工事が行われ、旧木津川河川敷であった部分が埋め立てられて、A 2 区の内高嶋が造成された。その工法は、粘質土や微砂・粗砂を下層から互層堆積で堤状に盛土し(83～88 層・59～81 層)、その両側は粗砂で盛土し(49～57 層)、最後に整地して(31～48 層) A 2 区第 2 面を構築している。これは、2003 年度調査や 2006 年度調査でも確認された造成方法である。下層の深掘り調査では、89 層の粗砂層が標高 8.0 m 以下まで確認されていることから、90～109 層の砂泥層なども堤状構築土の可能性が高い。

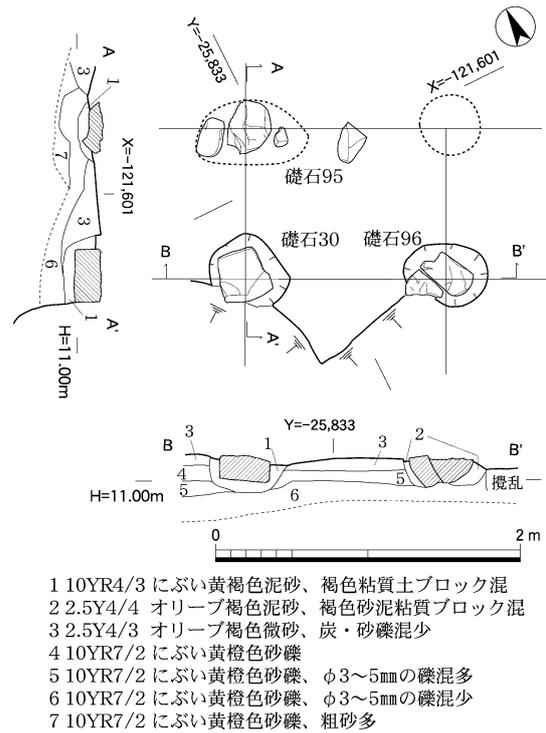


図 29 A 2 区建物 5 実測図 (1 : 50)

(4) B 1 区の遺構 (図 30～32、図版 3)

第 1 面の遺構 (図 30)

調査区は、内堀を隔てた本丸南側の曲輪とその南の中堀にあたる。標高 11.3 m で第 1 面となる遺構面を検出した。42 層黄褐色砂泥を遺構面として、集石 1、土壇 2・3、礎石 4 などを検出した。

礎石 4 一辺約 1.0 m を測るもので、建物の礎石の一部と考えられる。調査区南の大部分は中堀で、その範囲を約 1 m 掘り下げて堀 5 の肩部を検出したが、石垣は残っておらず、裏込め石が残存していた。

第 2 面の遺構 (図 31)

石垣 7 (図 33、図版 7) 第 1 面を掘り下げて、石垣 7A・7B を検出した。南北方向の石垣 7A は標高 10.1 m で検出し、延長 2 m、一辺 0.4～0.6 m の石が 3 石、上下 2 段残存し、西面する。さらに南方調査区外に続く。当地は中堀の北肩と堀を渡る橋と門の近くに推定されるので、狭くなる部分と考えられる。東西方向の石垣 7B は標高 9.8 m で検出したもので、延長 2.5 m 残存し、一辺 0.4 m の小振りな石が 8 石分、上下 3 段並ぶ。北面し、東側は石垣 7A に突き当たる。西側は基礎杭で攪乱されている。この石垣 7B の性格は不明である。

石垣 8 (図版 7) 石垣 7B より南約 2.5 m 地点の標高 9.5 m にて検出した。東西方向に 4.5 m 残存し、一辺 0.4～1.0 m の石が 8 石並び、南面する。東側は南北方向の石垣 7A に突き当たり、西側は調査区外に続く。標高 9.0 m で石垣の底面を確認した。よく締まった灰色粗砂礫層が石垣 8 の成立面である。石垣 8 からは 18 世紀中頃の遺物が出土した。

調査終了後、工事の支障となる石垣 7A の一部は番号を付けて掘り上げた。石垣 8 は埋め戻し、

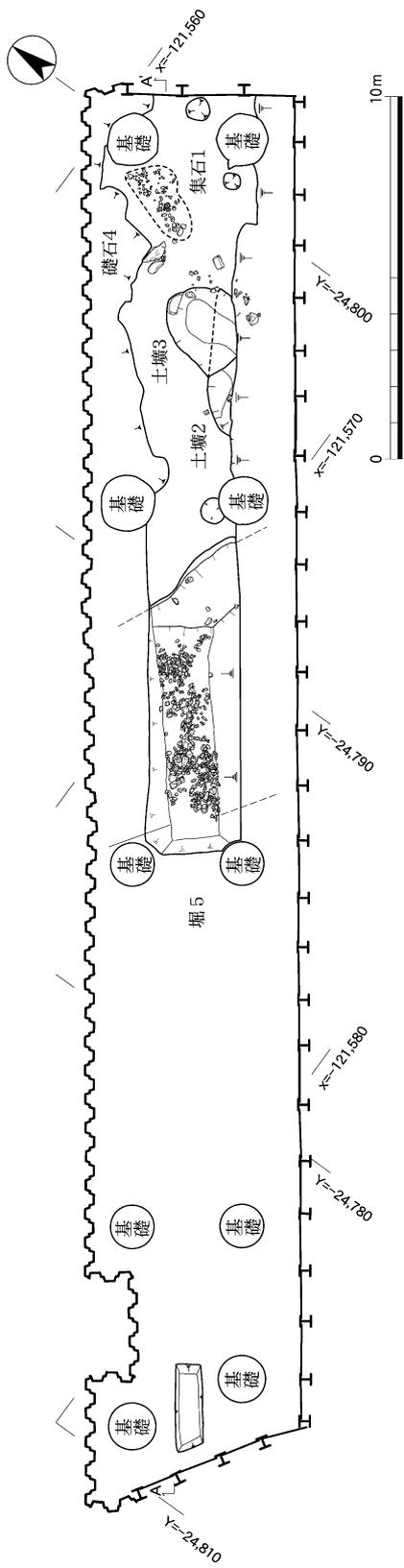


图 30 B 1 区第 1 面平面图 (1 : 200)

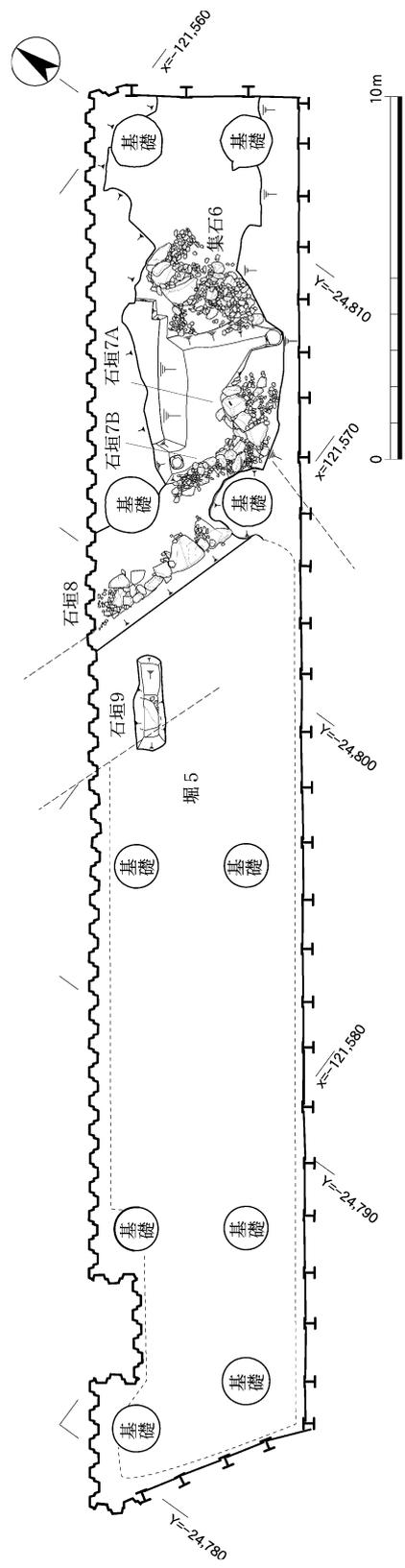


图 31 B 1 区第 2 面平面图 (1 : 200)

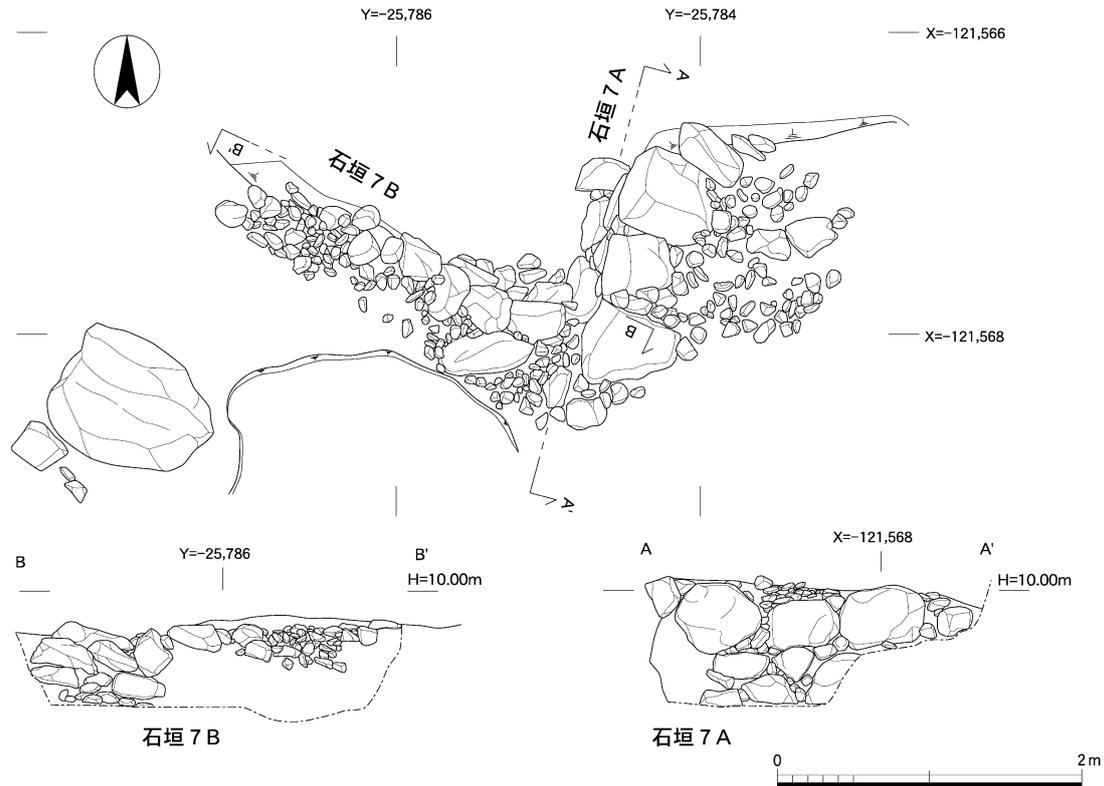


図33 B1区石垣7実測図(1:50)

現地保存された。

石垣9 調査終了後、深掘り調査で北東から17.5m地点の標高8.2mで一辺0.7m以上の石を検出した。この石は、27～29・37・a～d層の下に位置する。ボーリング調査では東西方向に連続する石の存在が確認され、西側延長上にも、石垣が連続して残っていることが推定される。18世紀中頃以降に南の曲輪を拡幅するために、石垣8を廃棄して、石垣9と造り替えられたものとする。

堀5 調査区北端から約20m南の、標高約10mで検出した。堀5は、明治期の石垣撤去時の埋土で埋め立てられたものと考えられる。

B1区最南端は、A2区と同様の内高嶋に推定され、中堀北肩石垣の検出が推定された。0.7m×1.4mの調査区を設定し、標高9.5mまで調査した。内高嶋の敷地部分は検出されず、標高9.6mまで京阪電鉄敷設時の盛土層で、9.6～9.5m以下は中堀の埋土であり、石垣9から調査区南端まで中堀の中と確認した。

(5) B2区の遺構(図34・35、図版4)

第1面の遺構

調査区は、本丸の南に位置し、内堀を隔てた南側の曲輪にあたり、絵図などから蔵跡などが推定された。地表下0.6m、標高約11.3mで第1面を検出した。第1面の基本土層は、全面、黄灰色粗砂の整地層であった。多くの部分が京阪電車のホーム基礎などで攪乱され、残存状況は良く

なかった。この粗砂層に掘り込む礎石状の石・石列・こぶし大の栗石の密集する部分などを検出したのち、線路側から3m地点の長軸方向で断面図を作成した。

第2面の遺構（図34）

第1面を全体に約0.2m掘り下げた標高約11.1mの第2面で、布基礎4・5、集石2・3、石列6、礎石8・11や固く締まった路面状の整地面などを検出した。

布基礎4（図36、図版6）標高11.1～10.9mで検出した。溝の内部にこぶし大の石を密集して入れる遺構で、L字型に曲がり、東西方向は幅1m・長さ3.7m、南北方向は幅0.6m・長さ3mが残存して検出した。東西軸線は東で約13度南に振れる。

布基礎5（図36）標高11.2～10.8mで検出した。溝の内部に0.3m大からこぶし大の石を密集して入れる遺構で、南北方向で幅1.2m・長さ5.5m残存して検出した。南北軸線は北で約13度東に振れる。

集石2（図36）標高11.0～10.8mで検出した。直径0.8mでこぶし大の石が密集する。建物内の柱の根石と考えられる。

集石3 標高11.1～10.9mで検出した。直径1.2mでこぶし大の石が密集する。建物外に位置するが、根石と考えられる。

石列6 標高11.2～10.7mで検出した。南北方向に、一辺0.4～0.8mの自然石が6石残存して検出した。北で約11度東に振れる。その東側は、標高約11.0mで数層の堅く締まった36層にぶい黄褐色泥砂層、38層にぶい黄褐色泥砂層の整地層があり、整地層の上面はφ3～5cmの小礫が多く、路面状となる。建物東側の空間地となっていたと考えられる。

礎石8 標高11.3m以下で検出した。石の上面は傾いているが、断面観察から、場所は移動していないことを確認した。

以上の遺構は、絵図にある建物に関連する基礎を構成するものと考えられる。2003年度調査¹⁾の米蔵跡を参考に、布基礎4と布基礎5からなる長方形の建物を復元した。東西幅8.0m、

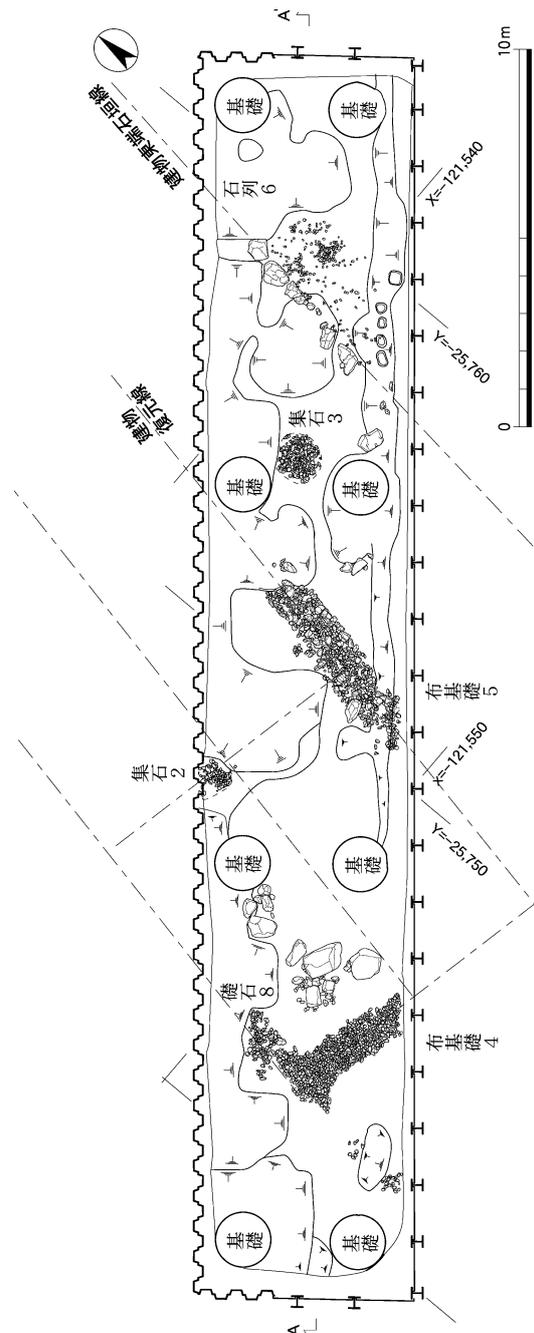


図34 B2区第2面平面図（1：200）

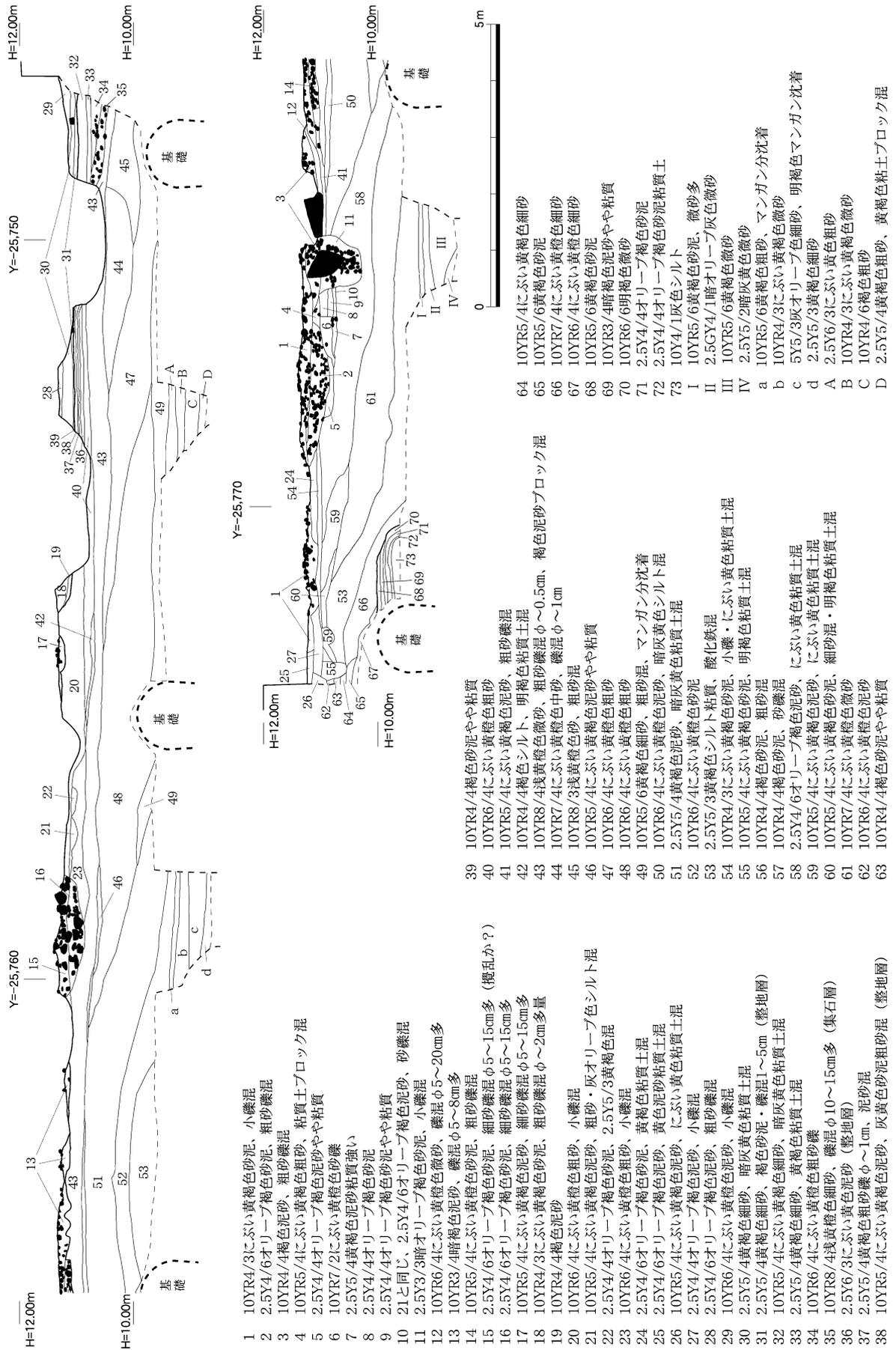


図 35 B2 断面図 (1:100)

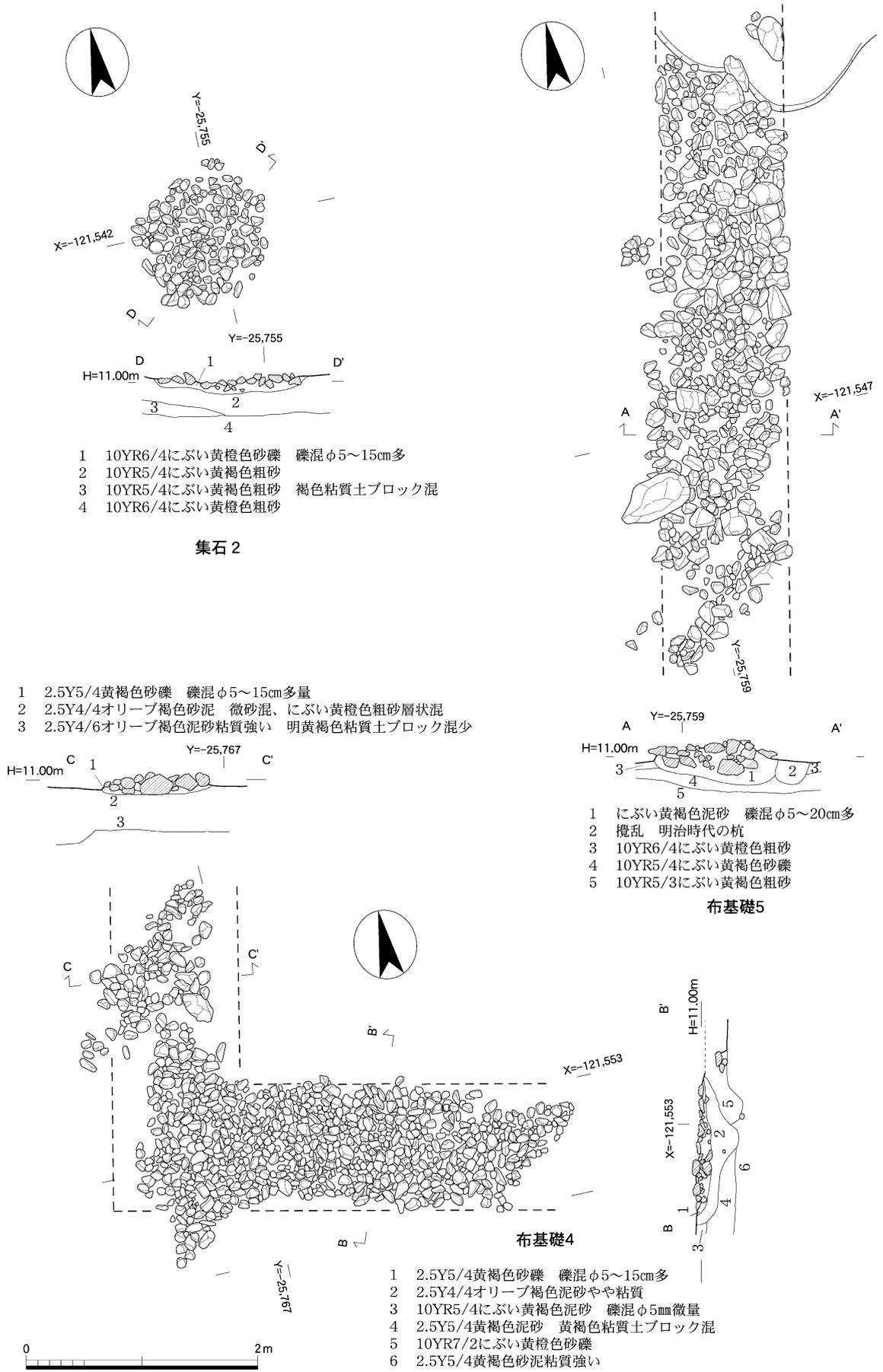


図36 B2区布基礎4・5、集石3実測図(1:50)

南北 12 m以上の規模の建物基礎部分が復元でき、絵図の蔵跡とほぼ一致する。集石 2 は建物の棟持柱の根石と考えられ、集石 3 は建物の雨落ち部分となる可能性がある。石列 6 は建物の基礎区画周りの石垣と考えられる。布基礎から 17 世紀中頃の遺物が出土した。

その後、中心線で断割り、断面調査を行い、A 2 区と同様の城郭地盤造成方法を確認した（図 35）。南端の 68 ～ 73 層を下層から互層堆積で堤状に盛土し、その上に北側では 43 ～ 67 層を互層に盛土し、最後に上面に整地層を作るという方法で、南の曲輪を造成していったことが明らかとなった。

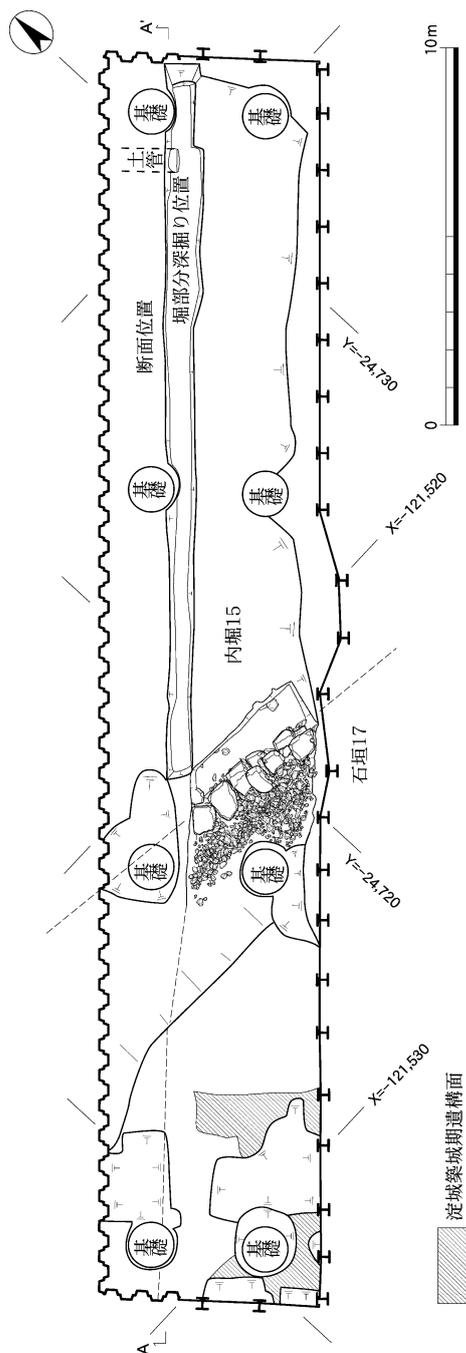


図 37 B 3 区第 2 面平面図（1 : 200）

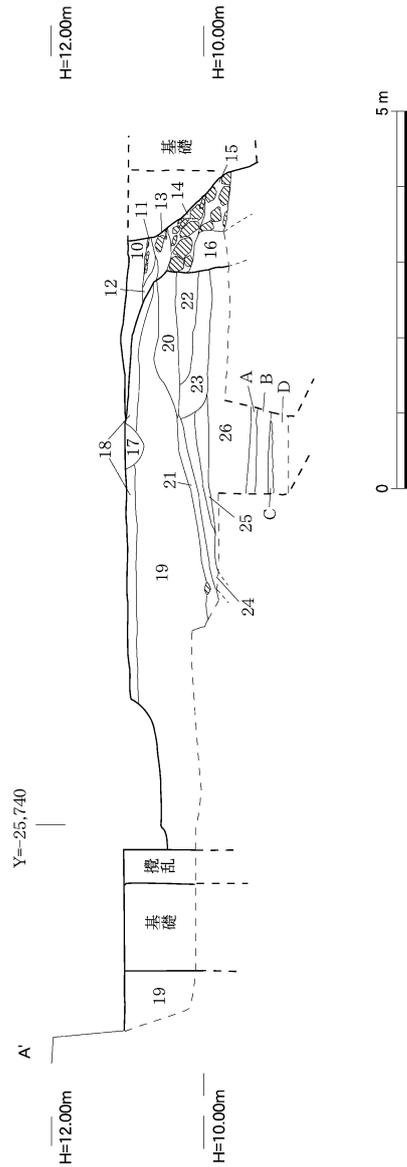
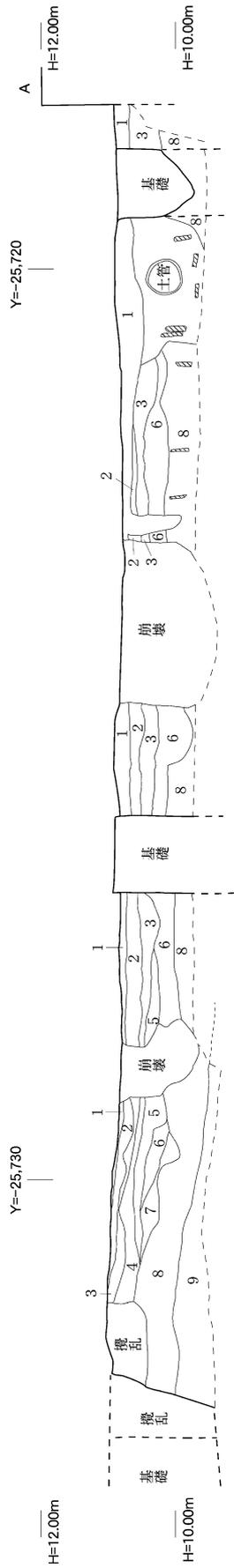
（6）B 3 区の遺構（図 37・38、図版 4）

調査区は本丸の南に位置し、内堀と南側の曲輪部分にあたる。表土下約 1.0 m まで京阪電車の淀駅ホームの攪乱を受け、第 1 面は残存していなかった。調査区北東端から約 20 m までは、標高 11.0 m で内堀の埋土を検出し、19 世紀末までの遺物が出土した。北東端から約 20 ～ 30 m 地点では、南隣の B 2 区北端で検出した整地層は削平されて残っていないことが明らかとなった。標高約 11.0 m の 18 層にぶい黄橙色粗砂層は調査区南側の約 10 m 地点まで残存し、北側に落ち込む肩部分から石垣 17 と堀 15 を検出した。この面を、第 2 面とした。

第 2 面の遺構

石垣 17（図 39、図版 7）北東端から約 20 m 地点の標高 11.0 以下で堀南肩部の落ち込みを検出した。落ち込み部分にはこぶし大から ϕ 30 cm 大の栗石が大量に見られた。全体に掘り下げて、標高 9.9 ～ 9.0 m にて東西方向で北面する石垣 17 を検出した。一辺 0.5 ～ 1.0 m の石が上下 2 段、7 石で延長約 4 m、高さ約 1.0 m を測る。ほとんどが花崗岩である。石垣の底面は締まった砂礫層となるが、石垣底面で胴木は確認できなかった。調査区外の東方と西方に続く。工事支障となる 2 石を掘り下げ、残りの石垣は現地に保存された。

最後に断ち割りをを行い、陸地部分の造成方法



- 1 7.5YR4/6 褐色泥砂 (京阪線理土)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂 (京阪線理土)
- 3 10YR5/6 黄褐色砂と灰黄褐色砂泥の互層 (京阪線理土)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂
- 5 5Y5/2 灰オリーブ色砂 (京阪線理土)
- 6 2.5Y6/2 灰黄色砂と灰青色泥土の互層 (京阪線理土)
- 7 2.5Y6/2 灰黄色砂 (京阪線理土)
- 8 5Y5/1 灰色砂 (京阪線理土)
- 9 2.5Y4/1 黄灰色砂、腐植土砂混 (京阪線理土)
- 10 10YR6/8 明黄褐色泥砂
- 11 10YR5/8 黄褐色泥砂 小礫混
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂
- 13 2.5Y5/3 黄褐色泥砂
- 14 2.5Y5/3 黄褐色泥砂、大量の真込め石混
- 15 2.5Y5/2 暗赤褐色砂、川原石混φ10~20cm多量
- 16 5YR3/4 暗赤褐色砂、φ10cmの礫少量混
- 17 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂褐色粘質土ブロック混
- 18 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂、小礫混
- 19 10YR6/3 にぶい黄褐色粗砂、小礫混
- 20 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂
- 21 10YR5/6 黄褐色泥砂、褐色泥砂混
- 22 10YR6/8 黄褐色砂
- 23 10YR7/8 黄褐色砂
- 24 10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂
- 25 7.5YR7/8 黄褐色砂
- 26 10YR6/6 明褐色砂
- A 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂、オリープ褐色砂泥ブロック混
- B 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂、粗砂多
- C 5Y6/2灰 オリープ色粗砂、細砂混
- D 5Y6/2灰 オリープ色粗砂、水分多い

図 38 B 3区断面図 (1 : 100)

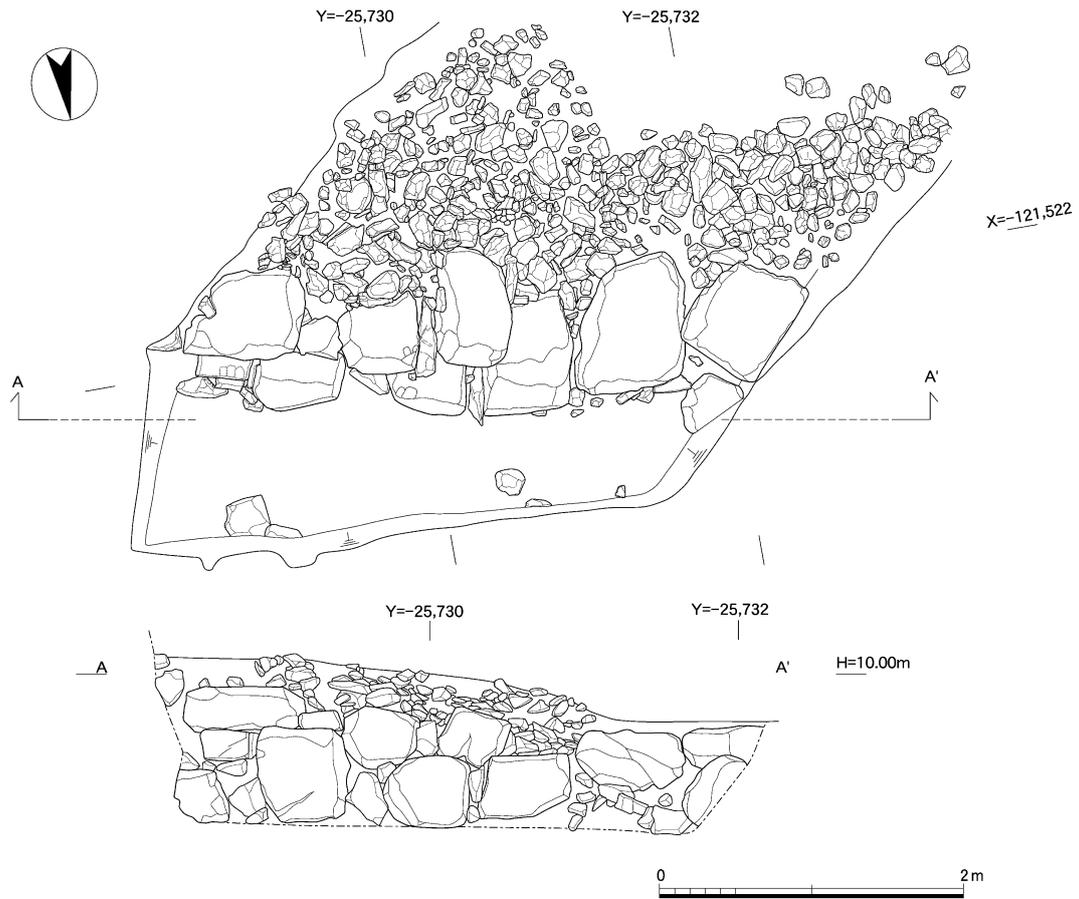


図 39 B 3区石垣 17 実測図 (1 : 50)

を確認した。石垣 15 の南側で 22 ~ 26 層、A ~ D 層で堤状構築土を盛り、北側に石垣 15、南側は 17 ~ 19 層のにぶい黄橙色粗砂層などで曲輪の敷地を造成したことがわかる。

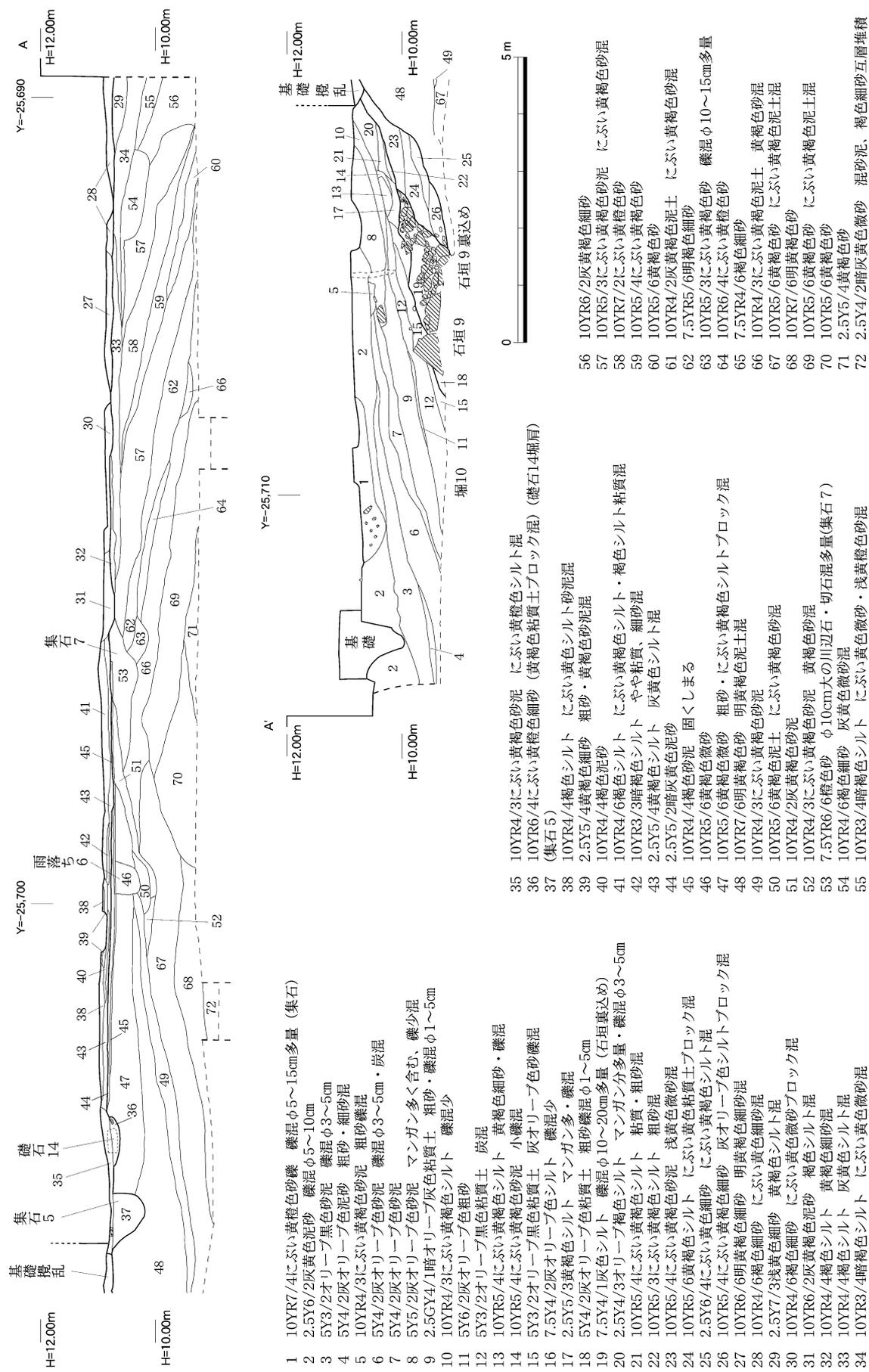


図 41 B 4 区断面図 (1 : 100)

- 1 10YR7/4にぶい黄褐色砂礫 礫混φ5~15cm多量(集石)
- 2 2.5Y6/2灰黄色泥砂 礫混φ5~10cm
- 3 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 礫混φ3~5cm
- 4 5Y4/2灰オリーブ黄色泥砂 粗砂・細砂混
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粗砂礫混
- 6 5Y4/2灰オリーブ色砂泥 礫混φ3~5cm・炭混
- 7 5Y4/2灰オリーブ色砂泥 マンガン多く含む、礫少混
- 8 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土 粗砂・礫混φ1~5cm
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 礫混少
- 10 5Y6/2灰オリーブ色粗砂
- 11 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 炭混
- 12 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 黄褐色細砂・礫混
- 13 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 小礫混
- 14 5Y3/2オリーブ黒色粘質土 灰オリーブ色砂礫混
- 15 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト 礫混少
- 16 2.5Y5/3黄褐色シルト マンガン多・礫混
- 17 5Y4/2灰オリーブ色粘質土 粗砂礫混φ1~5cm
- 18 7.5Y4/1灰色シルト 礫混φ10~20cm多量(石垣裏込め)
- 19 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト マンガン分多量・礫混φ3~5cm
- 20 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘質・粗砂混
- 21 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 浅黄色微砂混
- 22 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂混
- 23 10YR5/6黄褐色シルト にぶい黄色粘質土ブロック混
- 24 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 灰オリーブ色シルト混
- 25 10YR6/4にぶい黄褐色細砂 明黄褐色細砂混
- 26 10YR6/6明黄褐色細砂 明黄褐色細砂混
- 27 10YR4/6褐色細砂 にぶい黄色シルト混
- 28 2.5Y7/3浅黄色細砂 黄褐色シルト混
- 29 10YR4/6褐色細砂 にぶい黄色微砂ブロック混
- 30 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 褐色シルト混
- 31 10YR6/2灰黄褐色泥砂 褐色シルト混
- 32 10YR4/4褐色シルト 黄褐色細砂混
- 33 10YR4/4褐色シルト 灰黄色シルト混
- 34 10YR3/4暗褐色シルト にぶい黄色微砂混

- 35 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 にぶい黄褐色シルト混
- 36 10YR6/4にぶい黄褐色細砂 (黄褐色粘質土ブロック混)(礎石14堀肩)
- 37 (集石5)
- 38 10YR4/4褐色シルト にぶい黄色シルト砂泥混
- 39 2.5Y5/4黄褐色細砂 粗砂・黄褐色砂泥混
- 40 10YR4/4褐色シルト にぶい黄褐色シルト・褐色シルト粘質混
- 41 10YR3/3暗褐色シルト やや粘質、細砂混
- 42 2.5Y5/4黄褐色シルト 灰黄色シルト混
- 43 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂 固くしまる
- 44 10YR5/6黄褐色微砂 粗砂・にぶい黄褐色シルトブロック混
- 45 10YR7/6明黄褐色砂 明黄褐色泥土混
- 46 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 にぶい黄褐色シルト混
- 47 10YR5/6黄褐色砂泥 黄褐色砂混
- 48 10YR4/2灰黄褐色砂泥 灰黄色微砂混
- 49 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 灰黄色微砂混
- 50 10YR4/6褐色細砂 φ10cm大の川辺石・切石混多量(集石7)
- 51 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 灰黄色微砂混
- 52 7.5YR6/6褐色細砂 φ10cm大の川辺石・切石混多量(集石7)
- 53 10YR4/6褐色細砂 灰黄色微砂混
- 54 10YR3/4暗褐色シルト にぶい黄色微砂・浅黄褐色砂混
- 55 10YR3/4暗褐色シルト にぶい黄色微砂・浅黄褐色砂混

- 56 10YR6/2灰黄褐色細砂 にぶい黄褐色砂混
- 57 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 にぶい黄褐色砂混
- 58 10YR7/2にぶい黄褐色砂
- 59 10YR5/4にぶい黄褐色砂
- 60 10YR5/6黄褐色砂
- 61 10YR4/2灰黄褐色泥土 にぶい黄褐色砂混
- 62 7.5YR5/6明褐色細砂 礫混φ10~15cm多量
- 63 10YR5/3にぶい黄褐色砂
- 64 10YR6/4にぶい黄褐色砂
- 65 7.5YR4/6褐色細砂 黄褐色砂混
- 66 10YR4/3にぶい黄褐色泥土 黄褐色砂混
- 67 10YR5/6黄褐色砂 にぶい黄褐色泥土混
- 68 10YR7/6明黄褐色砂 にぶい黄褐色泥土混
- 69 10YR5/6黄褐色砂 にぶい黄褐色泥土混
- 70 10YR5/6黄褐色砂
- 71 2.5Y5/4黄褐色砂
- 72 2.5Y4/2暗灰黄色微砂 混砂泥、褐色細砂五層堆積

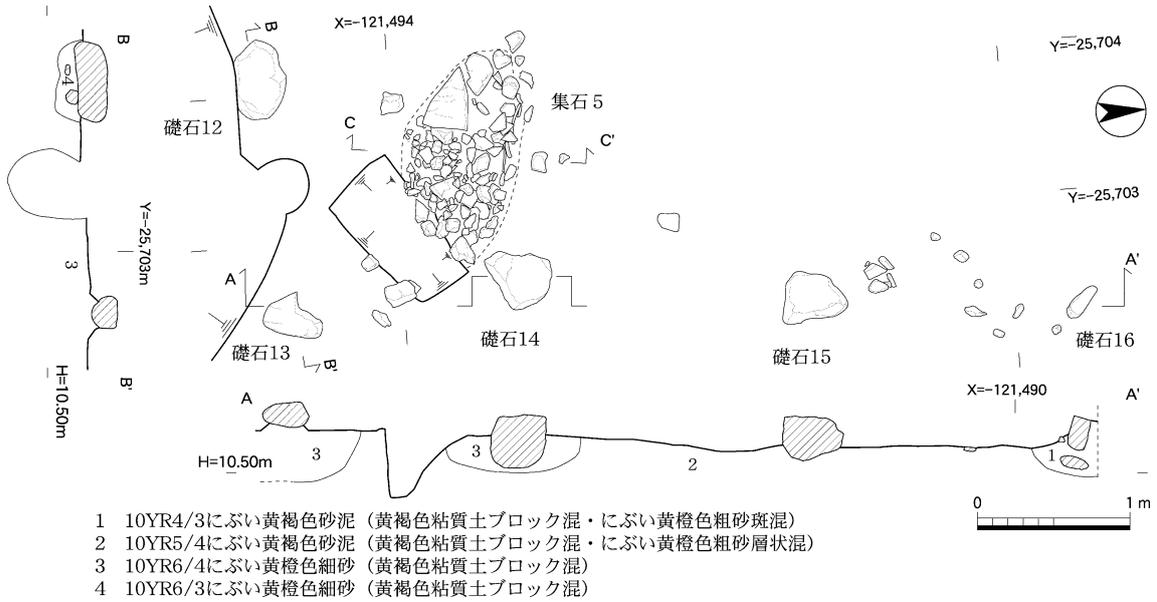


図 42 B 4 区柱列 11・集石 5 実測図 (1 : 50)

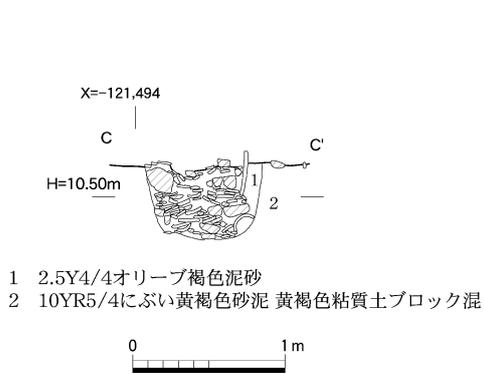


図 43 B 4 区集石 5 断面図 (1 : 50)

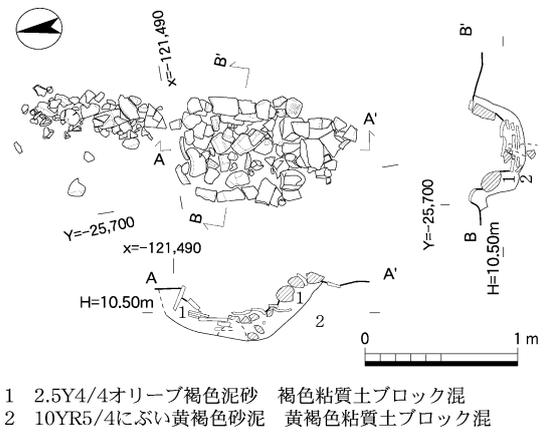


図 44 B 4 区雨落ち 6 実測図 (1 : 50)

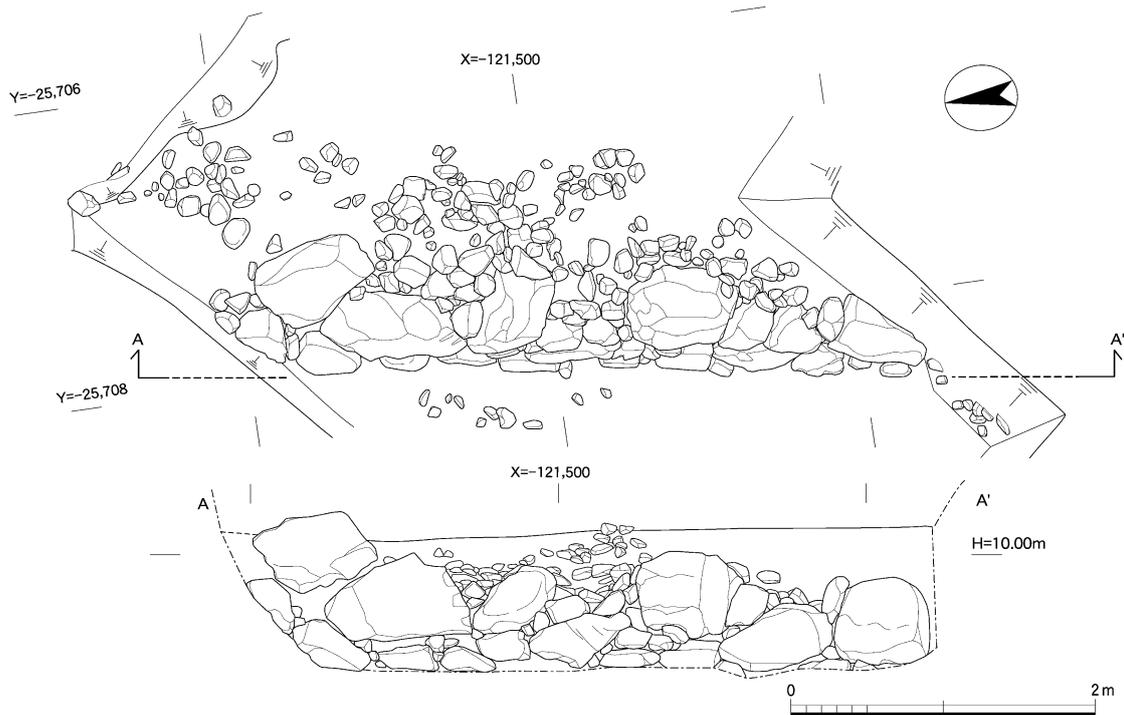


図 45 B 4 区石垣 9 実測図 (1 : 50)

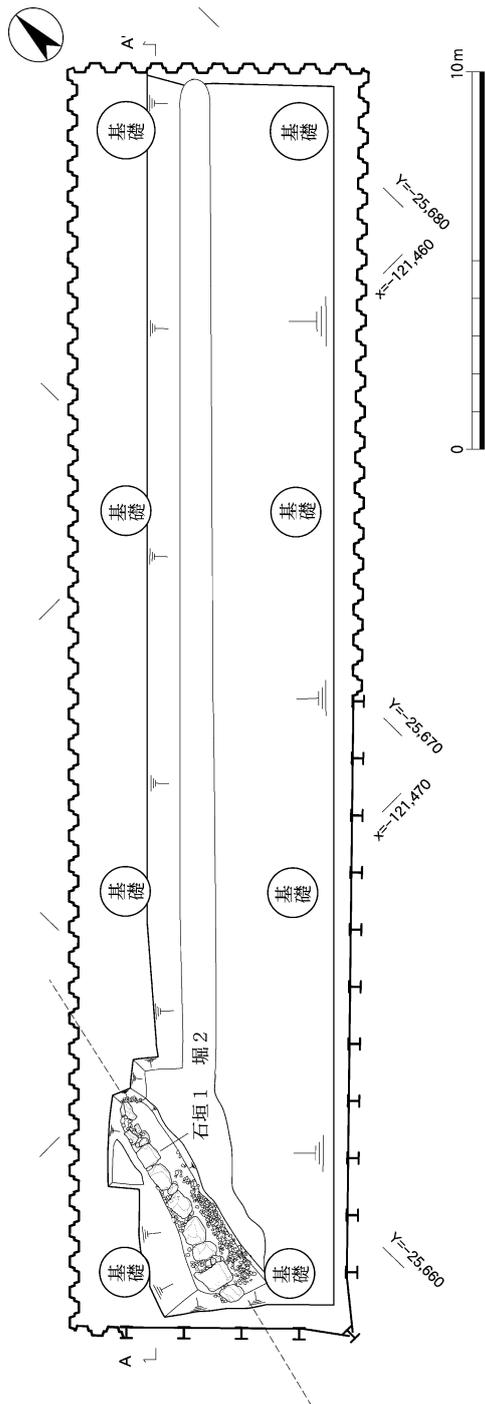


図46 B5区平面図(1:200)

阪電車敷設時の盛土で、切り張り・腹起こし工事後、線路側から2mの中心線に沿って断割り調査を行った。標高約11.0mまで掘り下げて、遺構検出を行った。北半では陸地部分は検出されず、すべて中堀の中であることを確認した。また、調査区南端で中堀西肩の石垣1を検出し、石垣から東側を堀2とした。最後に、深掘り調査で標高8.8m以下まで堀の埋土を確認した。工事に支障となる石は番号を付けて取り上げた。

石垣1(図48、図版8) 調査区の北から約29m地点における、標高9.8mで南北方向の石垣

える。その上の土層は、明治時代の石垣撤去時や、京阪電車敷設時の土層と考える。

柱列11(図42、図版6) 礎石12~16で構成され、各礎石は一边0.3~0.5m、厚さ約0.3mを測る。上面は平らな自然石で、にぶい黄褐色砂泥の地盤に置かれ、約1.8m間隔で並ぶ。南北軸線は北で東に約5度傾く。南北3間、東西1間残る。建物の復元はできないが、絵図にある大手門南側の建物に比定される。

雨落ち6(図44、図版6) 標高10.7mで検出した廃棄瓦で構築された内法で南北0.7m、東西0.5m、深さ0.3mを測る。南北方向に細長く、その軸線は柱列11と同じである。柱列11に関連する建物の雨落ちと思われる。

集石5(図42・43) 標高10.7mで検出した石と瓦が多く混じる遺構で、東西1.4m、南北0.8m、深さ0.5mを測る。柱列11や雨落ち6との関係を考えて、建物の根石の可能性も考えられる。

集石7 南北3m、東西2m、深さ0.1~0.2mを測るこぶし大の石が密集する遺構である。断面図のように堤状の盛土の上面に位置する。性格は不明だが、堤の上面を固めるためのものと考えられる。

(8) B5区の遺構(図46・47、図版4)

調査区は、復元図では本丸の東側で、大手門の南側に位置する。調査区の南半は中堀が推定され、北半は東曲輪が推定された。ほとんど京



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 粗砂礫混
- 2 10YR7/3にぶい黄褐色砂礫 礫混φ5~15cm多
- 3 7.5YR6/4にぶい褐色砂泥 砂礫混
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 砂礫混
- 5 7.5Y4/1灰色粘質土 木片混
- 6 7.5Y4/1灰色砂泥 砂礫混
- 7 5Y4/1灰色砂礫
- 8 7.5Y4/1灰色砂泥 粗砂混・礫混φ~2cm
- 9 5Y4/1灰色シルト 粗砂混・礫混φ~3cm
- 10 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 砂礫混φ1~3cm
- 11 5Y4/1灰色砂泥 砂礫混、礫混φ~3cm多・炭やや多
- 12 5Y5/2灰オリーブ色砂泥 礫混φ1~15cm少
- 13 10YR4/4褐色砂泥 砂礫混φ1~3cm多量・混炭
- 14 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 粗砂礫混
- 15 5Y4/1灰色砂礫 礫多量、にぶい黄褐色粘質土混・炭混
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 黄褐色粘質土混・礫混φ1~3cm多
- 17 2.5Y4/2暗灰色砂泥 砂礫混・にぶい黄褐色粘質土混・礫混φ1~3cm多
- 18 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 粗砂混・暗灰黄色粘質土混・礫混φ1~3cm多
- 19 7.5Y4/1灰色砂礫 やや粘質
- 20 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト 礫混φ5~15cm多
- 21 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト 粗砂礫混φ~5cm多
- 22 7.5Y5/1灰色砂泥 粗砂混・礫混φ1~15cm多
- 23 7.5Y4/1灰色シルト 粗砂礫混
- 24 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト 礫混φ1~15cm少

図 47 B 5 区断面図 (1 : 100)

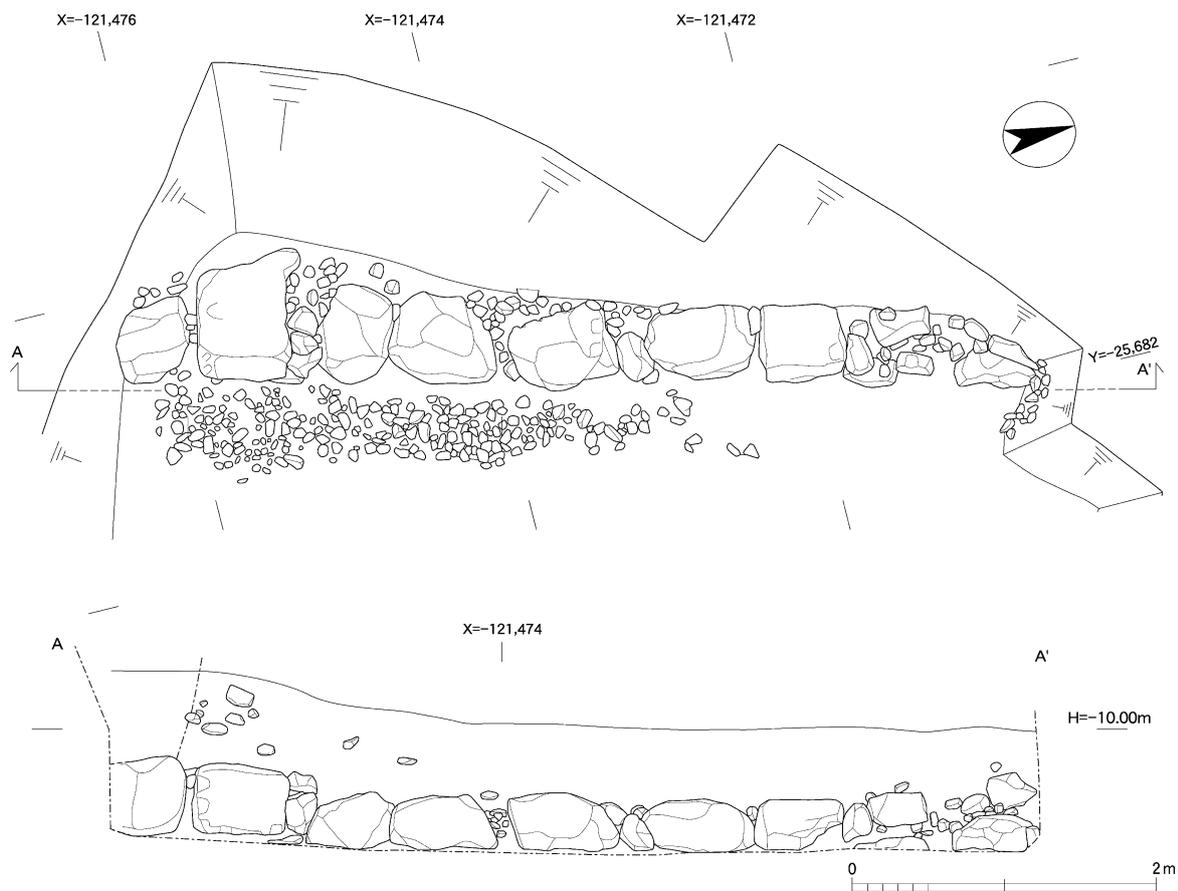


図 48 B 5区石垣1実測図(1:50)

1を検出した。石垣は東面し、9石の石材で1段、全長6.2m、標高9.2mまで検出した。石材は一辺0.6～0.8mの花崗岩が多い。石垣下の土層はB4区と同様の灰オリーブ色シルトで柔らかい土層で、石垣は下方に続くことを確認した。また、南・北方の調査区外に続く。石垣1の北端で断ち割りして断面を観察した。京阪電車の盛土は標高10.7mまであり、石垣撤去時の埋土が標高10.7～9.4mまで続く。裏込め石は標高10.0～9.3mまで残存していた。

堀2 明治期以降、京阪線布設時の埋土が続く。堀を北側の19層から順に埋め戻している状況を確認した。

註

- 1) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年

3. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は整理箱に 85 箱出土した。内訳は土器・陶磁器類が 52 箱、瓦類 31 箱、木器類が 1 箱、金属類が 1 箱である。出土遺物の大半は江戸時代の土器・陶磁器類、瓦類などで占められている。また、堀の埋土や京阪電鉄敷設時の造成盛土から、明治期の陶磁器類や金属製品が出土した。平安時代から中世の遺物は、主に淀城造成に使用された客土に含まれていた。土師器皿、須恵器、瓦類、瓦器椀、輸入陶磁器などがあるが、いずれも小片で特筆すべきものはない。以下に各調査区ごとに概説する。

(2) 土器・陶磁器類

A 1 区出土土器類 (図 49)

京阪電鉄造成盛土および堀内より、江戸時代から明治時代の遺物が出土した。また淀城造成に関連する堤状盛土から、中世の土師器皿や瓦器椀の小片が出土している。

1～5 は、堀内埋土出土遺物である。1 は肥前系磁器の染付で筒形椀である。内面に四方櫛と手描五弁花文、外面は窓絵で菊花文などが描かれる。高台内には「筒江」銘の変化したものが描かれる。筒江は佐賀県山内町にある窯場の名前で、18 世紀中頃の製品である。2 は瀬戸・美濃系磁器の染付端反椀で、19 世紀中頃以降のものである。3 は信楽産の播鉢で、体部から直線的に立ち上がる縁部の特徴などから、18 世紀前半頃の製品である。4 は木製の杓子である。柄の部分が欠損している。図示した遺物は 18 世紀前半から 19 世紀後半頃の幕末期までであるが、この他にガラスビンや京阪電鉄の設備に関連するとおもわれる、犬釘・陶製ガイシなどが含まれている。

A 2 区出土土器類 (図 50・51、図版 9)



図 49 A 1 区出土土器類実測図 (1 : 4)

表5 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代 ～室町時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、銭貨	3箱	土師器1点、中国磁器1点、灰釉陶器1点、瓦器1点、焼締陶器1点、銭貨2点	2箱	0箱
桃山時代 ～江戸時代	土師器、土師質土器、軟質施釉陶器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、瓦類、石製品、銭貨、金属製品、木製品	77箱	土師器16点、土師質土器17点、国産陶磁器82点、軟質施釉陶器3点、土製品4点、瓦類14点、銭貨4点、石製品2点	16箱	55箱
明治時代	国産陶磁器、土師質土器、土製品、瓦、ガラス製品、金属製品	13箱	国産陶磁器4点、土師質土器1点	2箱	10箱
合計		93箱	154点（8箱）	20箱	65箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より8箱多くなっている。

出土遺物の大部分は、第1面の江戸時代後半の遺構面から出土した。淀城造成時の堤状盛土からは、平安時代から中世の須恵器、土師器皿、瓦器、瓦などの小片が出土した。また、京阪電鉄造成の盛土からは、19世紀後半から20世紀初頭のガラス・ガイシなどが出土している。

5～12は、土壌38出土遺物である。5は肥前系磁器の色絵丸椀小片である。残存する部分には、黒の縁取りに赤、緑、青彩の上絵があり、染付はみられない。17世紀後半から末頃のいわゆる延宝様式の製品である。6は京焼の平椀である。内面に錆絵染付の笹文があり、目痕が残る。やや失透した灰釉が高台周辺を除いて掛けられている。高台内右側に「清」印があるが、これまでに知られていない刻印である。17世紀末から18世紀初頭頃のものである。7はロクロ成形の軟質施釉陶器の灯明皿で、全面に透明な鉛釉が掛けられているが、ほとんどが剥落している。口縁端部に使用による煤が数箇所付着している。17世紀後半から18世紀前半代である。8～10は土師器皿で、8・9は皿Sb、10は皿Saである。Ⅻ期である。11・12は堺系の焼塩壺の蓋と身である。輪積み成形で小形の製品であることから、17世紀中頃から後半の製品である。

13～18は、土壌20出土遺物である。13は土師器皿で、皿Sbである。14は肥前系染付磁器で、薄手の半球椀である。15・16は肥前系の京焼風陶器椀で、15は内面、16は外面に錆絵染付の山水楼閣文がわずかに残っている。15の高台内に「木下弥」の刻印がある。17・18は土師質土器の炮烙である。18はやや深めの体部で、口縁外面の端部直下に2箇所の耳が付く。耳には2箇所の穿孔がある。出土遺物は、18世紀前半代が主体である。

19～39は、土壌27出土遺物である。19～27は肥前系磁器である。19・20は染付筒形椀で草花文と菊花文である。どちらも口縁内面に四方禪文が巡る。21は梅花文、22は草花に丸文の椀で、どちらも口縁端部に口紅と呼ばれる鉄釉が塗られている。23は高台内無釉の仏飯器で、残存部に染付はみられない。24は花唐草文の小丸椀で、口縁内面は四方禪文、見込には「壽」字が描かれる。25～27は鉢類で、25は筒形で蓋付とおもわれる。26は蛇ノ目凹形高台で、高台高が低く口縁は玉縁状である。外面は唐草文、内面は四方禪と松竹梅文である。27は青磁染付で、

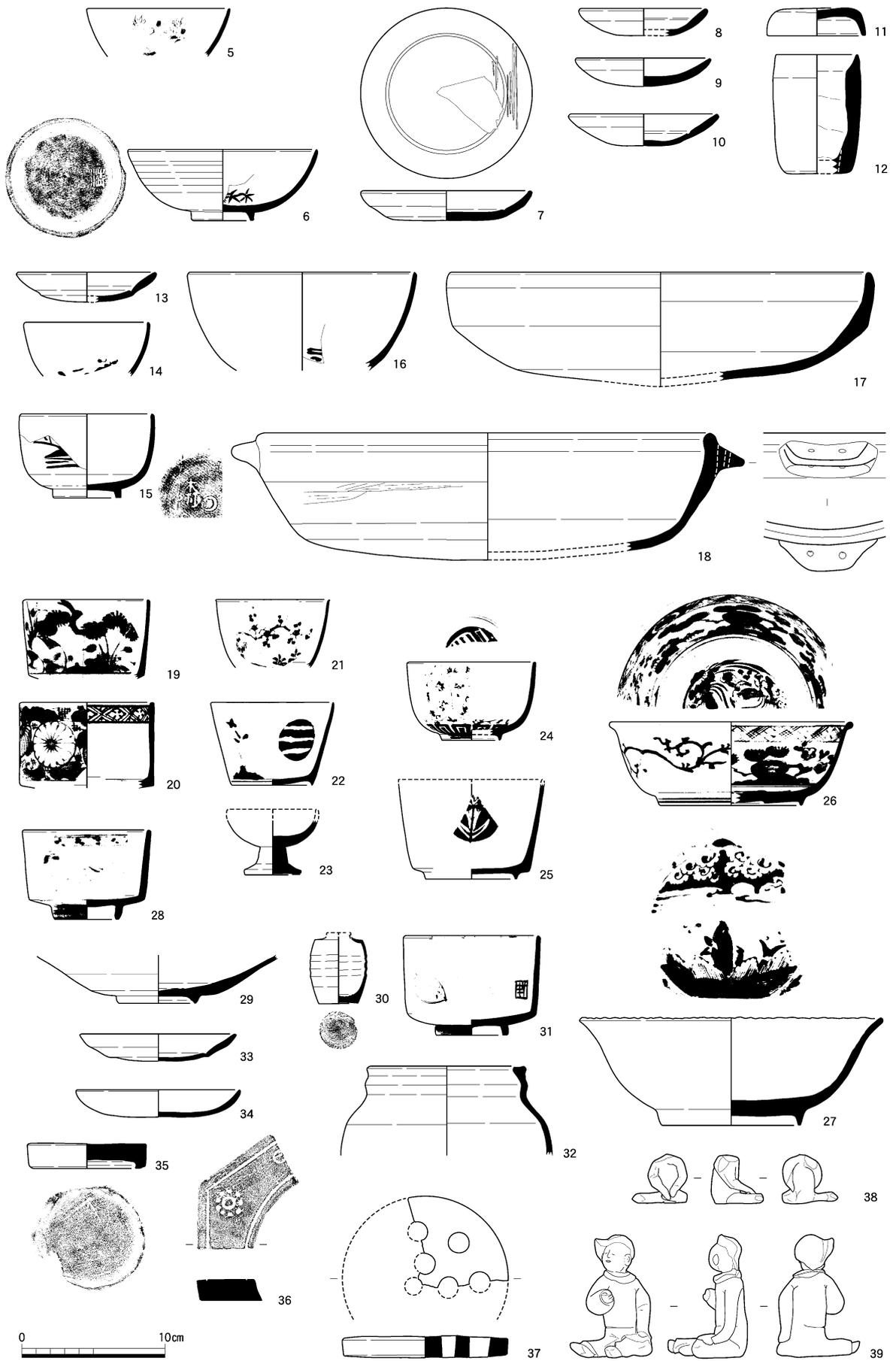


图 50 A 2 区出土土器類实测图 1 (1 : 4)

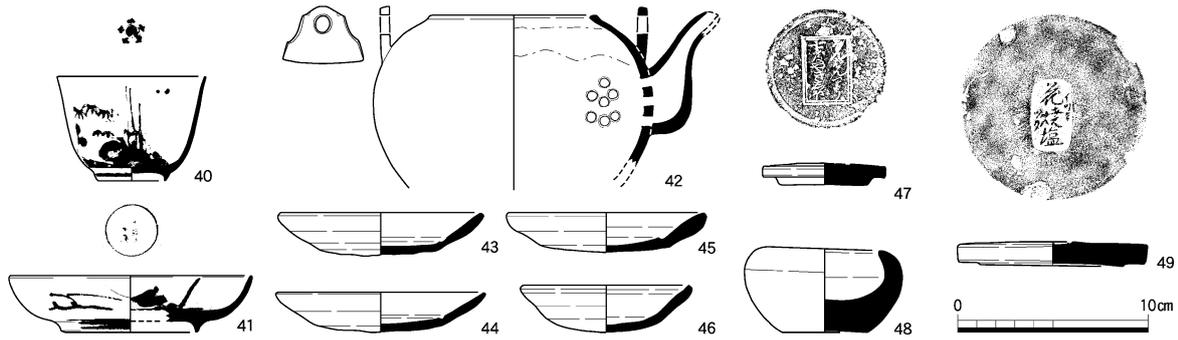


図 51 A 2区出土土器類実測図 2 (1 : 4)

口縁部は細かい輪花に作る。内面は草花と鯉の文様で、高台内は「大明年製」銘である。肥前系磁器類は、いずれも 18 世紀中頃の様相である。28 は肥前系陶胎染付の筒形碗で、山水文である。29 は見込を蛇ノ目釉剥する鉄釉の皿である。見込に白濁した灰釉が 2 箇所流利し掛けられている。この 2 点は 17 世紀後半から 18 世紀前半頃の製品である。30 は瀬戸・美濃系の鉄釉茶入である。31 は京焼の筒形碗で、内外面を白化粧し透明釉を掛けた後、外面に上絵付けする。32 は信楽鉄釉甕の口縁部片である。この 3 点は 18 世紀中頃から後半代の製品である。33 は土師器皿で、期の皿 Sa である。34 は土師質土器の皿で、ロクロ成形である。灰白色の胎土であるが、内外面の底部付近は黒色を呈している。口縁端部に数箇所煤が付着しており、灯明皿として使用されたものとおもわれる。35 は内側に布目圧痕のある堺系の焼塩壺蓋である。36 は断面平行四辺形の瓦質土器片で外周は多角形、内周は円形を呈する。上面に線刻とスタンプ文の装飾がある。釜敷のような用途が想像できるが、具体的には不明である。37 は土師質土器の「目皿」、もしくは「さな」と呼ばれる焜炉類の部品である。火を受けたとおもわれる上面が赤色を呈する。38・39 は手づくねの人形類で、39 は頭を白色、胴部以下を橙色の粘土で作分け接合している。主たる遺物の年代は 18 世紀中頃から後半代である。

40～49 は、A 2区のその他の遺構・層位出土遺物である。40～42 は土壌 28 出土遺物である。40・41 は肥前系染付磁器、42 は京焼系の鉄釉土瓶である。いずれも 18 世紀前半から中頃の製品である。43・44 は柱穴 72 出土の土師器皿 Sa で、内面の圈線が意図的になる XI 期新段階以降のものである。45 は柱穴 79 出土の土師器皿 Sa で XII 期である。46 は寛永 14 年 (1637) の淀城拡張時と推定される堤状盛土内から出土した土師器皿 Sb である。47・48 は柱穴 70 出土の花塩壺の蓋と身で、蓋の上面に「なんばん里う / 七度やき志本」の銘がある。伏見・深草系の製品で、17 世紀後半代に出現する器形と銘である。49 は「イツミ / 花焼塩 / ツタ」銘の花塩壺の蓋で、第 1 層掘下げ中の出土である。既存の研究では最も詳細に分類されている蓋で、17 世紀後半代の製品とされる。

B 1 区出土土器類 (図 52、図版 9)

B 1 区では北端の堤状盛土内から、平安時代から中世の土師器皿、須恵器、黒色土器、瓦器碗などの小片が出土した。石垣 7・8 の埋土からは江戸時代後半の遺物として、信楽甕、京焼、肥

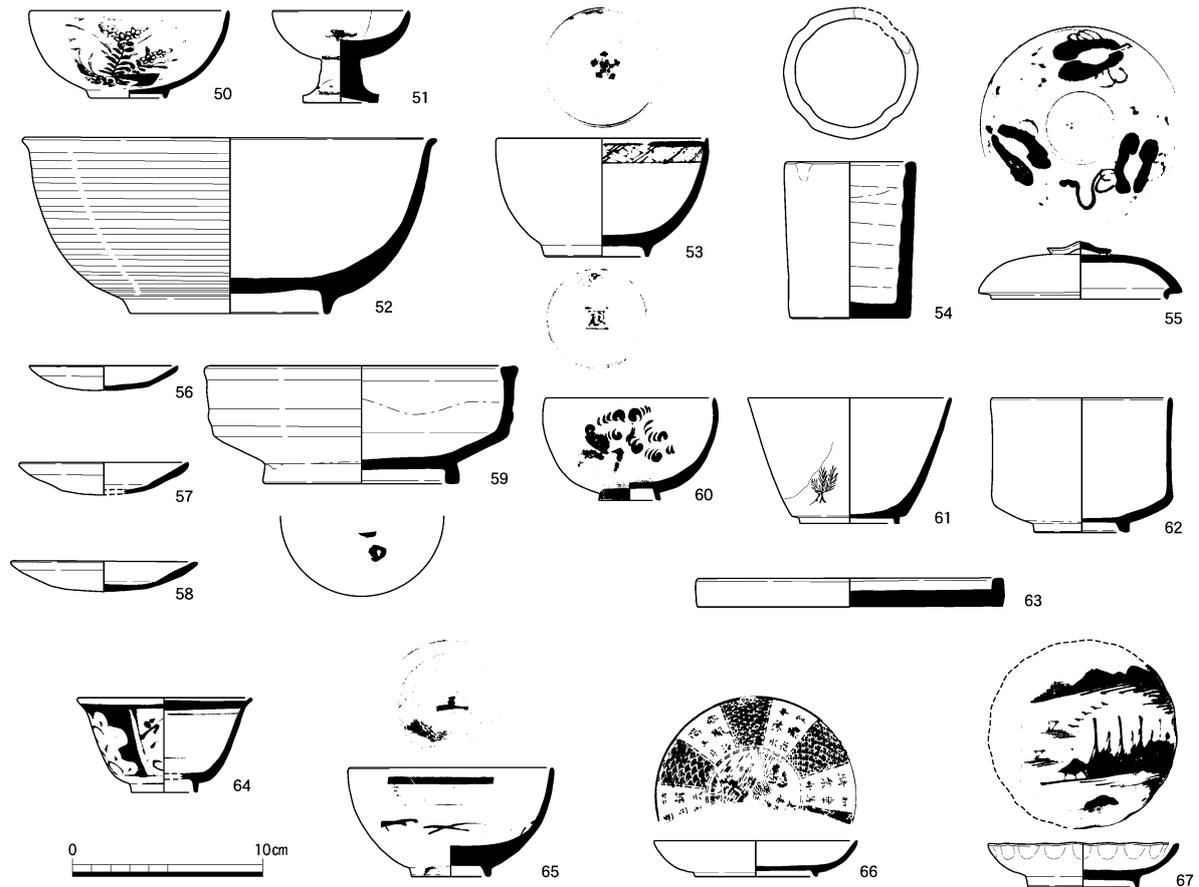


図 52 B 1 区出土土器類実測図 (1 : 4)

前系染付碗などが出土し、その他に、第 1 面の土壌からは瓦や、明治時代の陶磁器類、土師質土器、タイルなどが出土した。

50～63 は、調査区中央北寄りで検出した、下層の石垣 8 に伴う堀内の出土遺物である。50～55 は肥前系磁器である。50 は花鳥文の染付碗で、いわゆる薄手半球碗である。51 は高台無釉の染付仏飯器である。いずれも 18 世紀代のものである。52 は瑠璃釉の大型鉢で、外面には陰刻の多重圈線が巡る。漆継ぎの痕跡が残り、17 世紀後半頃の製品である。53 は青磁染付碗で、内面には口縁端部に四方擗文、見込中央部に手描五弁花が描かれ、高台内には崩れた「福」字文が描かれる。18 世紀中頃である。54 は青磁の筒形容器で、口縁端部を 4 箇所、外側から押圧して花弁状にする。平底の底部は無釉である。55 は軍配文の染付蓋で、中央に細板状の紐を付ける。18 世紀中頃の製品である。56～58 は土師器皿で、いずれも小破片からの復元実測である。56 は皿 Sa、57・58 は皿 Sb である。59 は瀬戸・美濃系の白釉の鉢で、高台内と内面体部下半は無釉である。高台内に「一口」と読める墨書がある。17 世紀代の製品と思われる。60～62 は京焼で、60 は上絵の丸碗、61 は小杉碗で、残存部には錆絵しかないが、本来は錆絵と染付で若松文が描かれる。62 は灰釉の筒形碗で、上絵や錆絵などは残存しない。いずれも 18 世紀中頃の製品である。63 は軟質施釉陶器の皿で、内外面赤色顔料の上に透明の鉛釉が掛かる。鉛釉は風化が進み、剥落や銀化が目立つ。出土遺物の時期は 52・59 を除いて、18 世紀中頃で比較的まとまっている。

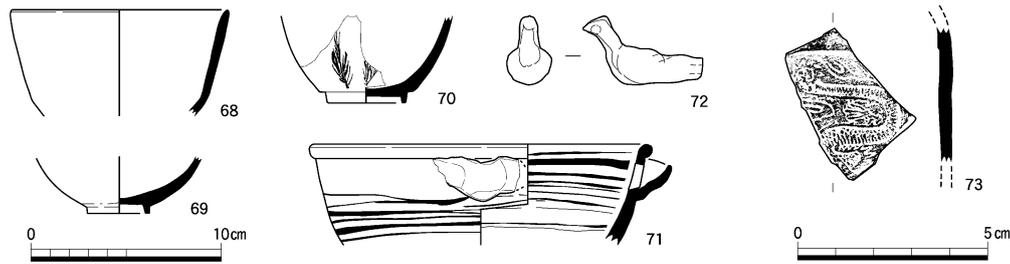


図 53 B 2 区出土土器類実測図 (1 : 4、73 のみ 1 : 2)

64～67 は、淀城廃絶期までの堀内から出土した染付磁器で、64 は瀬戸・美濃系の染付端反碗である。小片で文様構成はよくわからないが、残存部外には梅花文、内は口縁部に二重、中央部に一条の圈線が引かれる。65 は産地不明の染付碗で、外面には多重圈線と笹文が描かれ、内面は蛇ノ目状に釉ハギし、中央に「三」の字、口縁直下と中程に染付の圈線が巡る。灰白色の胎土や外面の多重圈線は肥前系磁器にはほとんどみられず、四国の砥部焼の可能性が高い。上原窯採集資料に極めて近い類品がある²⁾。66 は輪花、口紅の染付皿で、肥前系のものである。東屋・網干・帆掛舟などが描かれおり、その文様構成から 19 世紀前半代の製品である。67 は瀬戸・美濃系の銅版転写皿で、19 世紀末以降の製品である。

B 2 区出土土器類 (図 53)

B 2 区は、本丸南側の曲輪に該当し建物跡が検出されたが、出土遺物は少なく、遺構や遺構成立面からはほとんど出土していない。わずかに布基礎 5 から、江戸時代前半の瀬戸・美濃系施釉陶器碗が出土し、他の大部分は京阪線のホームによる攪乱埋土から出土したものである。江戸時代前半から明治時代までの幅広い遺物が含まれていた。

68 は、建物 1 に伴う布基礎 5 から出土した瀬戸・美濃系の長石釉碗片である。17 世紀前半頃のものである。

69～73 は、京阪電鉄建設時以前の淀城廃絶期までの遺物である。69 は京・信楽系の灰釉丸碗で、残存部に上絵は見られない。高台径が小さいことから 18 世紀後半代のものである。70 は京・信楽系陶器の小杉碗で、簡略化された若松文の錆絵は 18 世紀末から 19 世紀初頭のものである。71 は肥前系陶器の片口で、内外面に白土による粗い刷毛目装飾が施される。18 世紀中頃以降の製品である。72 は土製品の鳩笛で、頭部から背中にかけて緑彩が残る。黄灰色の胎土から伏見・深草系と推定され、18 世紀後半から 19 世紀の製品である。73 は内外面緑釉の陶器片である。内面に型押された龍文が残り、兵庫県淡路島で焼かれた珉平焼の小判形龍文皿である。19 世紀後半代のものである。

B 3 区出土土器類 (図 54、図版 9)

B 3 区は京阪電鉄淀駅ホームの攪乱が大きく、大部分の出土遺物は重機掘削時や遺構面の検出中などから出土した。第 1 面の土壌からは江戸時代後半から末にかけての陶磁器類、棧瓦などが出土した。また、堀 15 の埋土からは、堀の廃絶期である明治時代の瀬戸・美濃産磁器碗や各種の陶器類、ガラスビンなどが出土した。

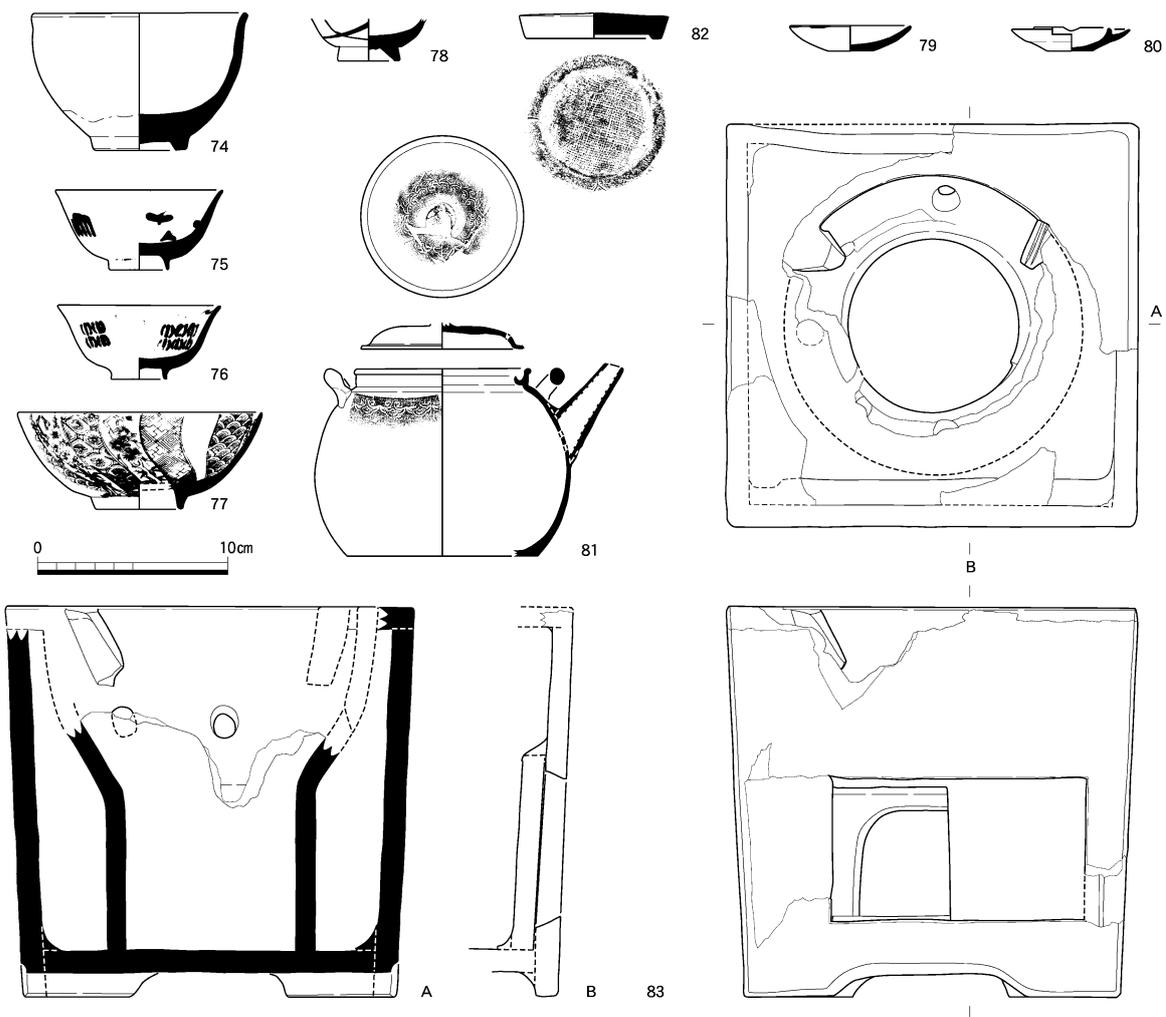


図54 B3区出土土器類実測図(1:4)

74は、調査区南端付近の淀城造成に関連する整地層から出土した肥前陶器碗である。高台から口縁部にかけて丸く彎曲した胴部を持ち、口縁端部が外反する。外部高台周辺を除いて、酸化焼成気味の灰釉が掛けられている。17世紀初頭頃のものである。

75～83は、堀15内の出土遺物で、京阪電鉄建設時までの製品が含まれている。75～77は瀬戸・美濃系磁器碗で、75・76の端反碗は19世紀後半、77の銅版転写染付碗は19世紀末以降のものである。78は萩焼のピラ掛けの碗で19世紀中頃の製品である。79・80は京・信楽系の小型の灯明皿と灯明受皿で、どちらも内面に灰釉が掛かる。19世紀代である。81はいわゆる朱泥急須で、蓋と本体の肩部にスタンプ文が巡る。底部に使用による煤が付着する。朱泥急須は19世紀代の煎茶の流行に伴い、京都や東海地方の諸窯で盛んに造られており、産地を特定できない。82は堺系の焼塩壺の蓋で、18世紀後半のものである。83は土師質土器の角形焜炉である。二重構造で漏斗状の内部施設を持つ。関西での報告例はほとんどないが、江戸遺跡をはじめ四国城下町遺跡など多くの出土報告例がある。特に江戸遺跡では比較的早くから注目され、形態分類と編年が進んでいる³⁾。焜炉類は在地生産で流通範囲も比較的狭いと考えられ、今回出土した資料は伏見・深草産の明治期の製品と推定しておく。

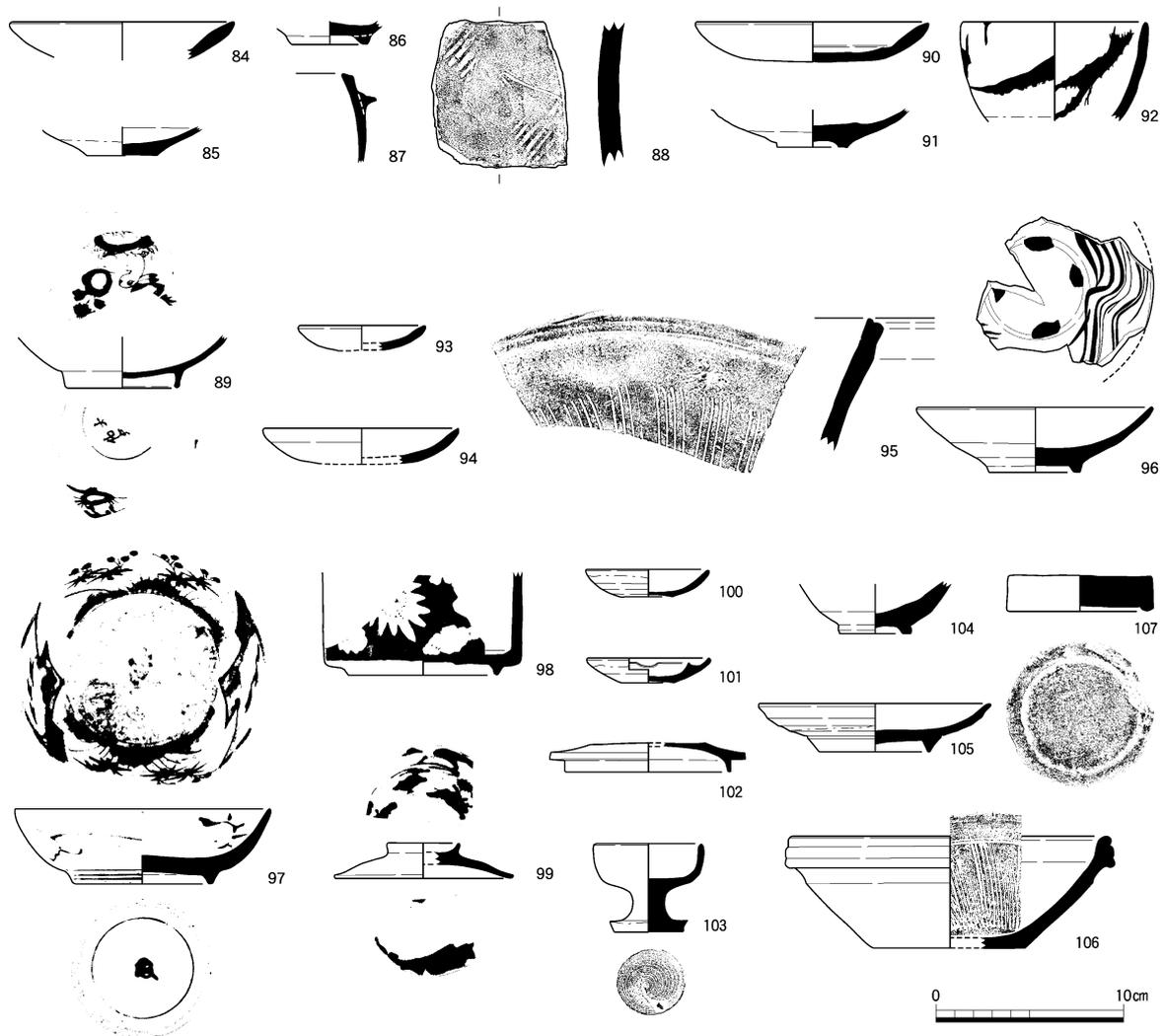


図 55 B 4 区出土土器類実測図（1：4）

B 4 区出土土器類（図 55）

B 4 区の出土遺物も京阪電鉄のホーム基礎による攪乱が多く、明治時代の陶磁器、ガイシ、ガラス、釘類などと共に、中世の土師器、瓦器、焼締陶器、江戸時代の土師質土器、陶磁器、瓦類が出土した。瓦は、ほとんどが第 1 面の土壌や第 2 面の集石遺構・雨落ちから出土した。また、第 2 面の遺構からは、淀城造成期に近い江戸時代前半までの土師器皿、陶磁器、瓦質土器、輸入磁器などが出土した。

84～88 は、淀城造成に伴う客土に含まれていたもので遺物ある。出土遺物が極端に少なく、図示したものも小片である。84 は土師器皿。85 は平底の中国白磁皿。86 は断面三角形の貼付け高台を持つ東海系灰釉陶器碗底部である。87 は瓦器釜の口縁部片。88 は常滑甕の体部である。12 世紀末から 14 世紀代にわたる遺物である。

89 は、淀城造成時（第 2 面）の整地面に含まれていた、中国景德鎮系の青花碗である。17 世紀前半代のものである。

90～92 は、雨落ち 6 出土遺物である。90 は土師器皿 Sa で、XI 期中頃のものである。91 は肥

前系陶器の灰釉皿で、内面に胎土目が4箇所残る。92は瀬戸・美濃系の褐釉丸椀片である。いずれも17世紀前半代のものである。

93～96は、淀城期の整地面（第1面）掘り下げ時の出土遺物である。93（Nr）・94（Sb）は圈線を持たない土師器皿である。95は口縁の端部と内面に1条の凹線がある丹波焼の播鉢で、摺目は4本の櫛目である。96は肥前系陶器の刷毛目皿で、内面に4箇所砂目痕がある。17世紀前半から中頃の製品である。

97～107は、淀城廃絶期から京阪電鉄建設時の造成埋土に含まれた遺物である。17世紀前半から19世紀後半まで幅広い年代のものがある。97は肥前系磁器の染付皿で、内面に手描の草花文とコンニャク印判の五弁花、外面に簡略な唐草文、高台内には崩れた「福」字文がある。17世紀末から18世紀前半頃のものである。98は蛇ノ目凹形高台の段重で、貝尽し文である。18世紀後半代である。99は瀬戸・美濃系磁器の染付蓋で、通例端反椀に伴う。19世紀前半代である。100～103は京・信楽系陶器である。100・101は灰釉の灯明皿と灯明受皿、102は灰釉の蓋物の蓋、103は鉄釉の仏飯器である。いずれも19世紀中頃以降のものである。104は肥前系陶器の灰釉丸椀の底部で、17世紀前半のものである。105は瀬戸・美濃系の灰釉皿で、内面に輪ドチ痕がある、19世紀代である。106は堺・明石系の小型播鉢、107は堺系焼塩壺の蓋である。どちらも18世紀中頃から後半代の製品である。

B5区出土土器類（図56、図版9）

B5区は調査区南端部の石垣を除いて、ほぼ堀内に該当する。堀埋土は上層が京阪電鉄建設時の造成土、下層は湧水を伴う泥土である。図示した遺物は下層の泥土層出土の製品で、淀城の堀が京阪電鉄造成により廃絶する明治41年以前のものである。

108・109は土師器皿で、108は皿Sbで、灯明皿として使用されており口縁端部に6箇所、煤の痕跡が残る。110～114は肥前系磁器類である。110・111は染付の小杯で、111は赤絵で「京都 四条・・・」の文字が描かれる。銘文はこれまでの出土例から「小町紅 京都四条 べに平」と思われ、紅を入れて販売された容器（紅皿）である。京都をはじめ江戸遺跡などでも出土が確認されている。「べに平」は『都商職街風聞⁴⁾』にみえる紅屋平兵衛と推定される。112は望料椀、113は広東椀、114は筒形椀で、いずれも18世紀後半から19世紀初頭のものである。115～117は瀬戸・美濃系の染付磁器椀で、115・116は19世紀中頃、117は酸化コバルトの銅版転写染付で19世紀末以降のものである。118は京焼の半筒形椀で、白化粧錆絵で芦舟文を描く。18世紀前半である。119は錆絵かたばみ文の蓋で、18世紀中頃の京焼である。120～123は京・信楽系陶器である。120は灰釉の灯明皿で18世紀後半。121は灰釉の灯明受皿で18世紀末から19世紀前半。122は灰釉の面取椀で19世紀中頃。123は銅緑釉の小瓶で19世紀中頃である。124は肥前系の陶器で、いわゆる呉器手椀の底部である。17世紀後半頃の製品である。125は瀬戸・美濃系の鉄釉蓋である。内面は無釉で、底部に糸切痕が残る。126は内外面鉄釉の播鉢片で、外面口縁部下に重ね圧痕が巡る。丹波焼の製品で19世紀代である。127は軟質施釉陶器の緑釉鉢片である。内型成形で、魚々子風の地文に唐草文を施す。産地を特定できないが、四国の源内焼

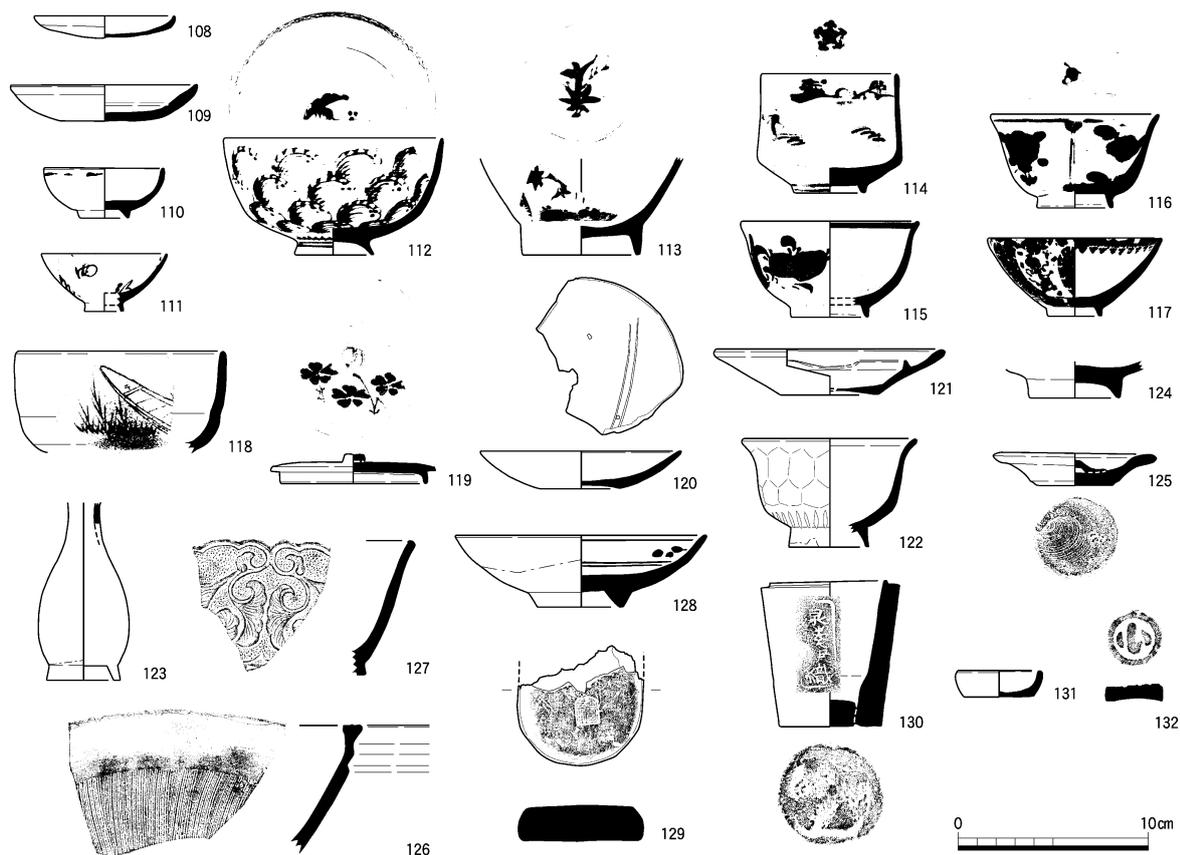


図 56 B 5 区出土土器類実測図（1：4）

に近い製品である。128 は陶胎染付皿である。断面三角形の高台が付き、内面は蛇ノ目状に釉剥される。主文様が欠損しており不明であるが、内面の口縁部直下に 1 条、中程に 2 条の圈線が巡る。肥前系の製品には類例がなく、産地を特定できない。129 は楕円形の平面を持ち、厚味のある板状の土製品で、残存長 6.3 cm、幅 6.6 cm、厚さ 1.9 cm を測る。将棋の駒形の枠内に篆書体の刻印が押されている。関西での出土報告例はないが、江戸遺跡では「有印土製円盤」と呼ばれ温石として使用されたものとされる⁵⁾。130 は「泉湊伊織」の銘がある焼塩壺で、18 世紀中頃のものである。131 はロクロ成形の土師質製品で、いわゆる「でんぼ」と呼ばれる小鉢である。132 は「小」の逆字がモチーフの泥面子である。出土遺物のなかでは 124 が最も古く 17 世紀後半代であり、117 が最も新しく 19 世紀末である。

（3）その他の遺物

その他の遺物としては、瓦類、銭貨、石製品などがある。

瓦類（図 57、図版 9、表 6）

図 57 は今回の調査で出土した軒瓦・棟丸瓦⁶⁾・刻印を有する瓦である。瓦類は B 1 区南の曲輪と、B 4 区東の曲輪に該当する地点から出土したものがほとんどで、全体形状のわかる瓦はない。軒丸瓦は、すべて外区に珠文のある左三巴文である。軒平瓦は瓦当面は中心飾りと唐草文からなる。軒丸・軒平瓦は周縁部の幅や形状も含めて同規格の製品は見当たらなかった。また、明治時代の

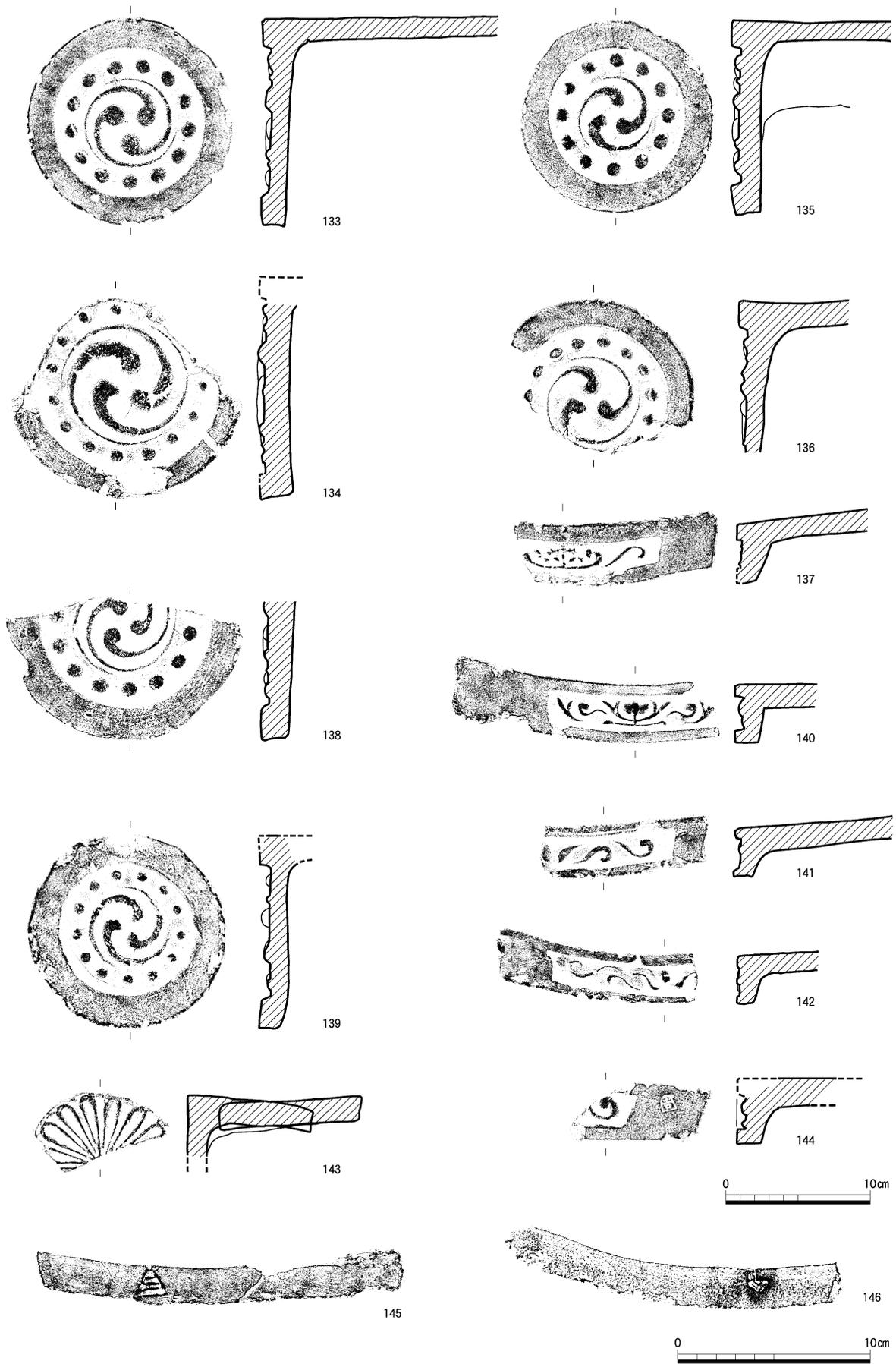


图 57 瓦類拓影・実測図 (1 : 4)

表6 瓦類一覧表

番号	種類	遺構	色調・胎土	特徴	備考
133	軒丸瓦	B1区石垣8	灰色、焼成普通。	時計回り三巴文、珠文13。瓦当面キラ粉。瓦当面周縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面は縦ケズリとナデ。	遺構年代 18世紀中頃以降
134	軒丸瓦	B1区土塙1	灰色、焼成堅緻。	時計回り三巴文、珠文15。瓦当面周縁はナデ、瓦当裏面はナデ。	遺構年代 19世紀中頃以降
135	軒丸瓦	B1区深堀り	灰白色、焼成堅緻。	時計回り三巴文、珠文12。瓦当面キラ粉。瓦当面未調整、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面は縦ケズリとナデ。	
136	軒丸瓦	B1区深堀り	灰白色、焼成堅緻。	時計回り三巴文。丸瓦部外面は縦ケズリ、ナデ。裏面接合部横ナデ。	
137	軒平瓦	B1区深堀り	灰色、焼成堅緻、白色角砂粒混入。	中心部丁字文+唐草文。顎部裏面は横ナデ。	
138	軒丸瓦	B4区土塙1	灰白色、焼成やや不良。	時計回り三巴文。瓦当面キラ粉。瓦当面周縁はナデ、瓦当裏面はナデ。	遺構年代 18世紀中頃以降
139	軒丸瓦	B4区土塙3	灰白色、焼成普通。	時計回り三巴文、珠文13。瓦当面は未調整、瓦当裏面はナデ。	遺構年代 18世紀中頃以降
140	軒平瓦	B4区土塙3	灰白色、焼成堅緻。	中心部橋文+唐草文。瓦当面キラ粉。瓦当上面面下り。顎部裏面は横ナデ。	遺構年代 18世紀中頃以降
141	軒平瓦	B4区土塙3	淡黄色、焼成やや不良。砂粒目立つ。	唐草文。顎部裏面と接合部、平瓦凹面は横ナデ。	遺構年代 18世紀中頃以降
142	軒平瓦	B4区1層掘下げ	灰白色、焼成やや不良。	中心部三葉文+唐草文。顎部裏面と接合部、平瓦凹面は横ナデ。	17世紀代
143	棟丸瓦	B4区1層掘下げ	淡黄色、焼成普通。	菊花の凹弁文、無周縁。さし部は三角形、外面は縦ケズリ、裏面は未調整。	17世紀代
144	軒瓦(刻印瓦)	A1区堀内掘下げ	灰色、焼成普通。白色の砂粒目立つ。	瓦当周縁部右側に将棋の駒状の枠内に「吉」の文字印。	19世紀代
145	平瓦(刻印瓦)	B4区集石5	灰白色、焼成普通。	凹面は主に横ナデ、凸面は端部周辺のみナデ。木口に三角枠内に「三」の字状の凸印。	17世紀代
146	平瓦(刻印瓦)	B4区集石5	灰白色、焼成堅緻。白色の角砂粒目立つ。	凹面は主に横ナデ、凸面はラフな縦ケズリと端部周辺部のみナデ。隅丸三角枠に二重山形凸印。	17世紀代

表7 銭貨一覧表

遺物番号	種類	出土遺構・層	外径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
147	寛永通寶	A2区土塙28	24.9	1.1	5.7	2.40	古寛永
148	寛永通寶	A2区土塙28	24.7	1.3	5.8	2.31	新寛永
149	寛永通寶	A2区土塙38	24.2	1.1	5.4	1.95	古寛永
150	寛永通寶	B1区攪乱	24.5	1.1	6.9	1.91	新寛永
151	元豊通寶	B4区1面検出中	24.1	1.4	6.7	3.13	元豊元年(1078)
152	熙寧元寶	B4区1面検出中	23.8	1.4	6.9	2.60	熙寧元年(1068)

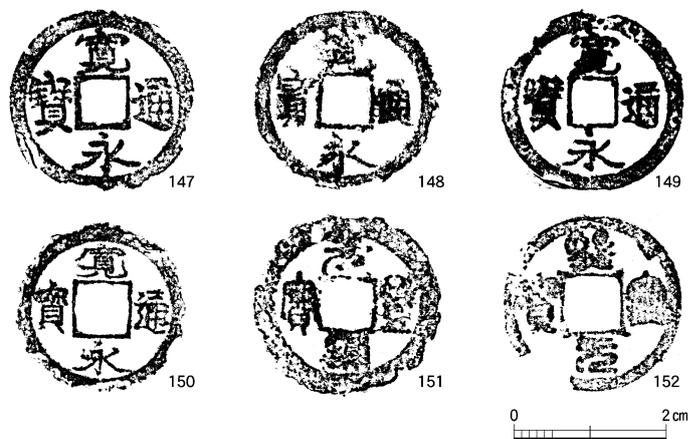


図58 銭貨拓影(1:1)

京阪電鉄建設に伴う造成土を中心に
に棧瓦類も出土しているが、図示
した軒平瓦には明確な軒棧瓦はない。
143は棟丸瓦であるが、無周
縁で花卉が凹む単弁であり、17世
紀代の様相とおもわれる。144～
146は刻印を押した瓦類である。
144は周縁の右に将棋の駒の形状
をした枠内に「吉」が押された軒
平瓦である。145・146は平瓦の
木口に押された記号印で、三角枠
内にそれぞれ「三」と「二重山形」
がある。

銭貨(図58、表7)

今回の調査では、寛永通寶をは
じめ渡来銭などが出土した。その
うち、比較的残存状態の良い6枚

を報告する。

147・148はA2区土壙28出土の寛永通寶である。147はいわゆる「古寛永」、148は「新寛永」である。土壙28は、18世紀前半から中頃の遺構である。149は同じくA2区の土壙38出土の寛永通寶で、「古寛永」である。土壙38は17世紀中頃から後半の遺構である。150はB1区の京阪電鉄建設に伴う土壙から出土した寛永通寶で、「新寛永」である。151・152は、B4区の東曲輪内の第1面から出土した。2枚とも磨滅と風化により判然としないが、151は元豊通寶、152は熙寧元寶とおもわれる。第1面の成立期は、17世紀前半から中頃である。

石製品 (図59・60)

153はB4区の集石7から出土した石仏である。残存長約41cm、幅約23cm、最大の厚さ約11.5cmを測る。厨子を模したとおもわれる庇と兩柱で画されたなかに、

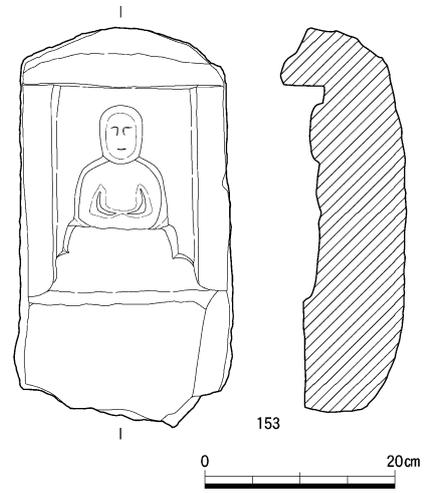


図59 B4区出土石仏実測図(1:8)

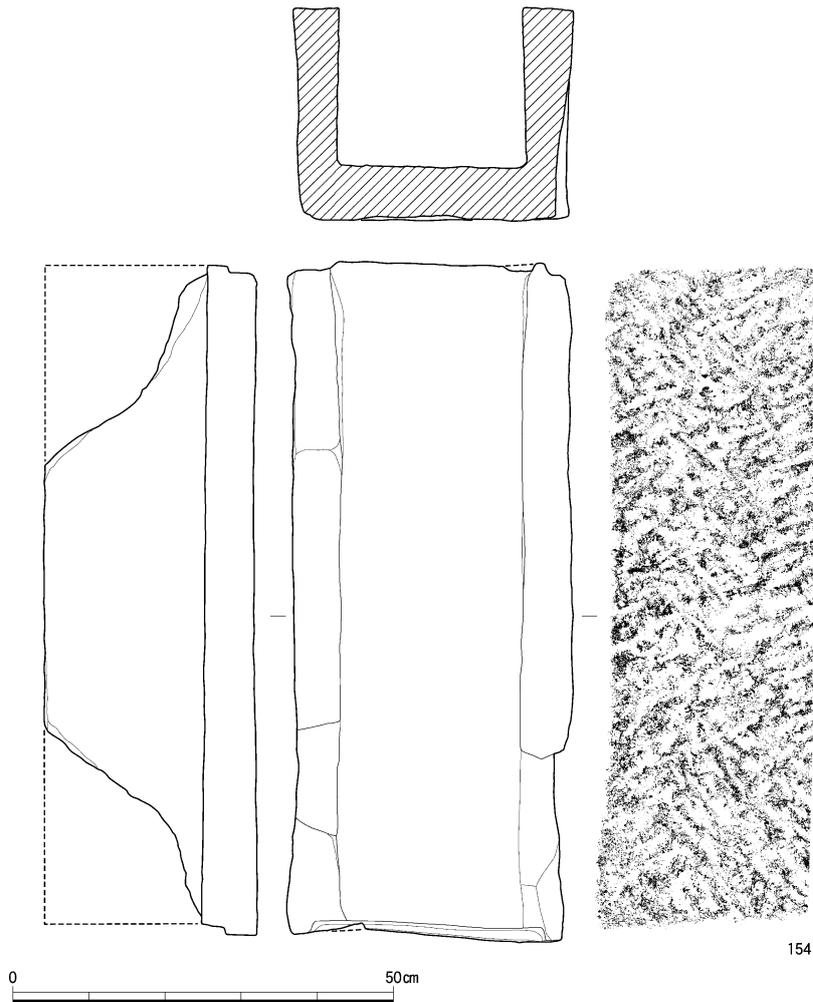


図60 B3区出土石製溝拓影・実測図(1:10)

座像を彫刻する。石材はやや暗い灰色の花崗岩である。背面は舟底形を呈し、基底部を欠く。膝上で印を結んでいる様に見えるが不明である。

154 は B 3 区の石垣 17 撤去後の埋土から出土した、礫岩製の「U」字状構造物である。全長約 89 cm、幅約 36 cm、外高約 28 cm（内法幅約 24 cm、内法高約 20 cm）で、南の曲輪から内堀への排水溝として使用されたと思われる。鑿状の工具で削り出されており、図 60 の拓影は最も鮮明に痕跡が残る底部裏面のものである。綾杉様の工具痕が全面に観察される。同様の石材は淀城本丸⁷⁾調査でも出土しているが、今回出土の製品は外高が高く、小口の接合部に約 1 cm の段差を設けるなど構造に違いがみられる。

石垣刻印（図 61・表 8）

準備工や調査中に B 1～5 区から出土した石材のうち、残存状態の良好なものや刻印のあるものは、黄色ペンキで通し番号を付けて整理した。総計 111 個で、工事終了後、整備計画に使用するため京阪電気鉄道が保管することとなった。刻印のあるものは拓本を採って報告する。

『淀の歴史と文化』⁸⁾によると淀城の石材は、伏見城の石材と共通の刻印を持つことから、廃城となった伏見城の石材を再利用しているという。その石材は花崗岩などの深成岩、変成岩、チャート・頁岩・砂岩などの堆積岩がある。その産地は明確ではないが、「加茂」・「山科」・「白川」方面産が多量に使用されているとある。しかし、中には、中国地方特有のピンク色をした長石を含む花崗岩もあることがわかった。

調査前の準備工事など掘り上げられた石は 55 個あり、発掘調査で掘り上げた石垣石は、B 1 区 6 個、B 2 区 13 個、B 3 区 5 個、B 4 区 20 個、B 5 区 12 個の計 56 個ある。矢痕や刻印のあるものがあり、17 個の石材に 19 個の刻印が見られた。刻印 1～5 は B 1 区から、刻印 6～9 は B 3 区から、刻印 10～14 は B 4 区から、刻印 15 は B 5 区から出土した。いずれも花崗岩製で石

表 8 石垣刻印一覧表

番号	出土位置	刻印面の石材 (cm)			刻印 (cm)		材質
		長辺	短辺	長さ	長辺	短辺	
刻印 1	B 1 区工事中	68	40	90	15	15	花崗岩
刻印 2	B 1 区工事中	82	40	70	15	15	花崗岩
刻印 3	B 1 区工事中	80	30	残存36	18	9	花崗岩
刻印 4	B 1 区石垣 7	60	57	45	18	18	花崗岩
刻印 5A	B 1 区石垣 7	60	50	60	12	12	花崗岩
刻印 5B	B 1 区石垣 7	60	50	60	12	12	花崗岩
刻印 6	B 3 区石垣 17	60	60	30	14	13	花崗岩
刻印 7	B 3 区工事中	80	45	70	10	8.5	花崗岩
刻印 8	B 3 区工事中	80	55	40	15	10	花崗岩
刻印 9	B 3 区石垣 17	75	50	45	16	16	花崗岩
刻印 10	B 4 区石垣 9	70	60	60	16	11	花崗岩
刻印 11	B 4 区石垣 9	55	50	55	11	10	花崗岩
刻印 12	B 4 区石垣 9	60	60	65	12	11	花崗岩
刻印 13	B 4 区石垣 9	65	30	70	12	11	花崗岩
刻印 14	B 4 区石垣 9	75	50	95	15	14	花崗岩
刻印 15	B 5 区工事中	65	残存45	残存50	24		花崗岩

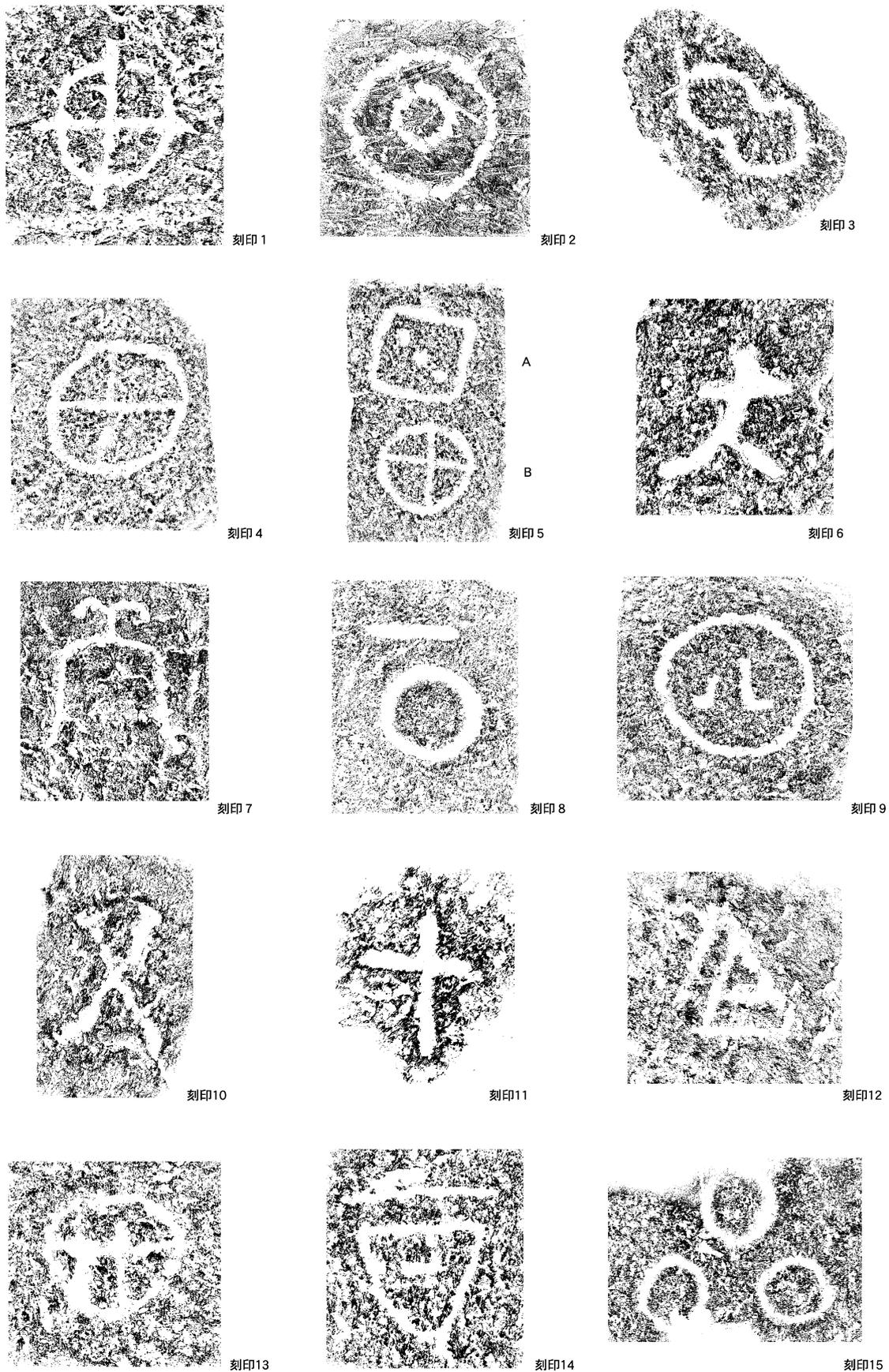


图 61 石垣刻印拓影

材表面に刻印がある。一つの面に2個あるもの（刻印5）や一つの石材の別々の面に1個ずつあるもの（刻印11・12）もある。

これらと同様の刻印は、淀城本丸の石垣調査でも報告されている。『淀の歴史と文化』によると、刻印は大名・家臣の名前・家紋、日付、符号などを表わしており、家紋とすると、刻印1は美濃の加藤貞泰か加賀の前田家、刻印2は肥後の加藤清正、刻印3～5・7は加賀の前田家、刻印6・8は安芸の毛利輝元か前田家のもの、刻印15は安芸の毛利家とされる。

註

- 1) 「a+オ類①-2」で、17世紀第三～四四半期頃とされている。
小川 望「焼塩壺の蓋－江戸遺跡出土資料を中心に－」『江戸在地系土器の研究VI』江戸在地系土器研究会 2006年
- 2) 日下正剛「江戸後期における農村部出土の陶磁器と地方窯－徳島・香川・愛媛編－」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 中国・四国・関西編』九州近世陶磁学会 2007年
- 3) VII類で、19世紀後半の明治期とされる。
小林謙一「近世瓦質土師質火鉢・焜炉類の生産と使用－東日本を中心に－」『四国と周辺の土器II－火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態－』四国城下町研究会 2003年
- 4) 四条麩屋町西に「紅屋平兵衛」の名前が猪口紅司として記載されている。
『都商職街風聞』P43 文久四年（1864）『新撰京都叢書』臨川書店 1986年
- 5) 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001年
- 6) いわゆる菊丸瓦、小丸瓦と呼ばれる道具瓦である。
呼称は『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年に依る。
- 7) 星野猷二『淀城跡・天守台調査概報』伏見城研究会 1988年
- 8) 西川幸治『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年

4. ま と め

調査の目的は、江戸時代の淀城の遺構を調査することと、淀城期以前の中世などの土層状態を確認することであったが、平安時代から中世の遺物は、淀城造成時の盛土などから出土したが、遺構は検出できなかった。

淀城は元和9年（1623）から造営にとりかかったが、淀城築城前の地形を考えると、今回の各調査区は、三川合流地点の中州近くの川の中に位置していたと考えられる。これまでの淀駅近くの調査事例からは、標高約10 mから11 mまでで江戸時代の淀城期以前の遺構を検出している。I章の5次調査では標高約10 mで、合計10層ほどの両側に縁石のある幅8 mの南北路面を検出している。この道路は、京都から大阪を結ぶ街道¹⁾で、淀小橋から淀大橋へ抜けて大阪に続く街道筋であったと考えられる。しかし、今回の各調査区は標高約11 m付近まで淀城造成時の盛土層で、断面観察からも自然堤防近くの川中であつたことが判明した。

そして、断面調査から、淀城築城時の城域の造成方法が明らかとなった。これまでも、2003年度調査²⁾や2006年度4次調査³⁾で見られたが、今回のA2区・B3区・B4区の断面観察でより明らかとなった。図26のA2区のように、最初に土や砂を互層にして堤状の土手を築いた後、両側に粗砂や砂を互層に盛り土して造成したことが明らかとなった。その深さは、標高9 m位までは確認したが、それ以下は未確認である。

淀城の遺構面の標高を考えると、江戸時代前半の標高は、A2区第2面では約11.1 m、B2区路面状整地面は標高11.0 m、B4区2面の整地層は10.7 mで検出した。江戸時代後半の標高は、A2区の第1面は標高約11.5 mで検出した。2006年度調査8の2区では、外堀北側の路面状整地層を標高12.3～11.6 mで検出し、1区では、標高11.7 mの第1面で敷地境界と考えられる石列を検出している。このことから、淀城築城時の江戸時代前半の標高は約11 mで、その後、江戸時代後半には標高約11.5 m以上と高くかさ上げされたものと考えられる。

堀の石垣の底面の標高は、B1区の石垣9は標高7.8 m以下へと続き、石垣8は標高約9 mで終わる。石垣7は9.2 m以下に続く。B3区の石垣17は標高8.9 mで終わる。B4区の石垣9とB5区の石垣1の底面は、標高9.2 m以下まで続く。これらの標高の違いは造成時の中州の深さや、地盤の違いによるものと考えられる。

また、淀城復元図（図62）と発掘調査による堀の石垣や建物などの検出状況を比較すると、A1区外堀はほぼ復元図通り、B1区の東西石垣8は復元図通りであったが、18世紀中頃に最初の位置から約2.5 m南に移設している。B3区の東西石垣は復元図から約9 m南で検出し、B4区の南北石垣は約7 m東で検出した。B5区の南北石垣は復元図から約9 m東で検出した。天守台南側の内堀の南北幅は約25 mで、東側の内堀の東西幅は約20 mとなる。こうした違いは中州の悪い地盤に築城したために頻りに石垣補強のため、後で追加工事されたためとも考えられる。地盤の悪さは1990年の石垣改修工事⁴⁾で石垣のハラミが多く見られ、明らかとなった。

A2区では建物跡や生活遺物が多く出土したことから城内での暮らしの状況が窺える。しかし、B2区では建物跡は見られるが、遺物がほとんど出土していない。これは、蔵などがあつたため、

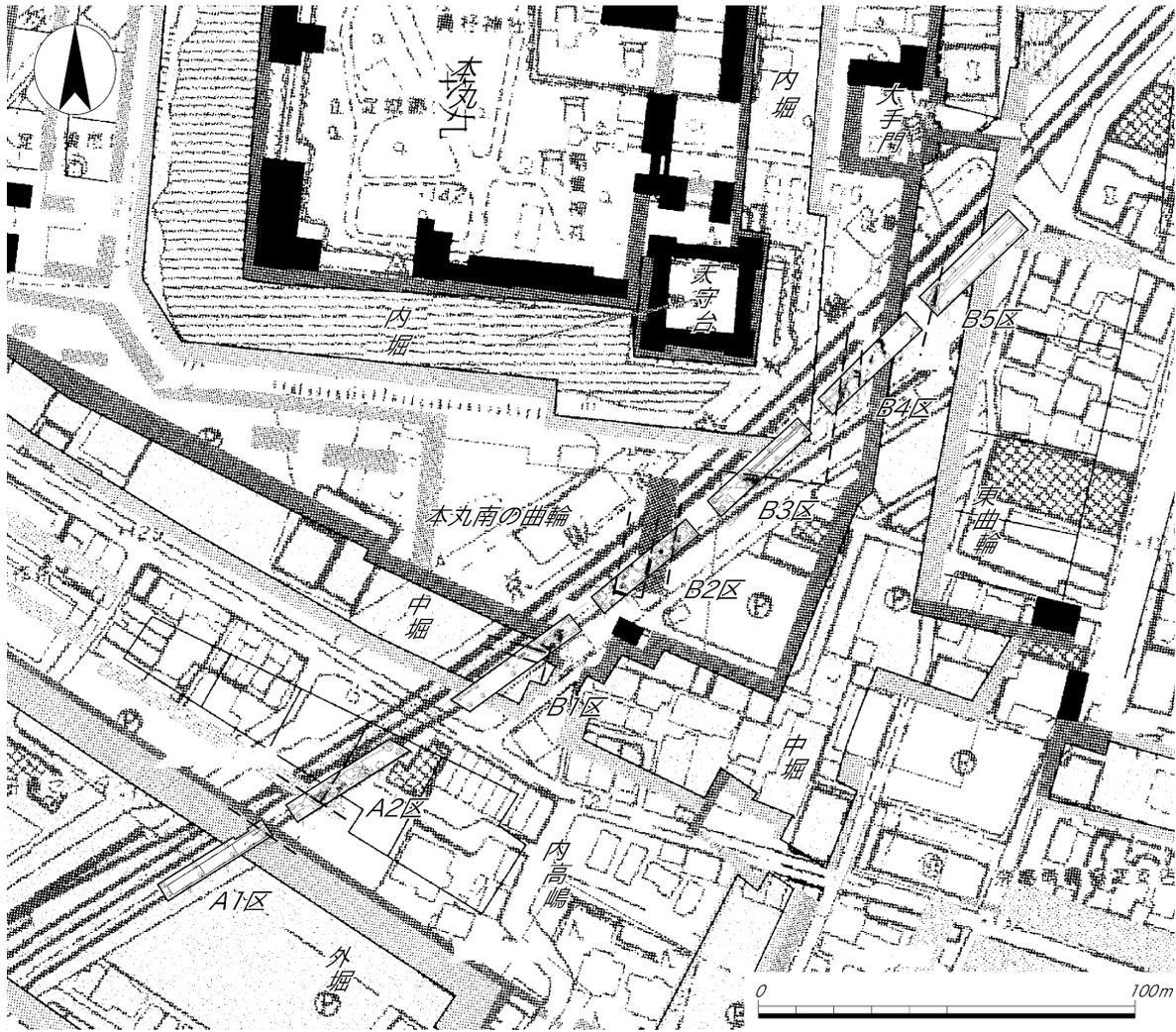


図 62 淀城復元図と遺構検出線（1：2,000）

日常生活とはかけ離れた空間であったことが考えられる。B4区では柱列や雨落ちが検出されたが、遺物の出土は少なかった。絵図にある大手門南側の小さな建物が推定されるが、こちらも日常生活の場ではなかったものと考えられる。

今後、周辺の曲輪部分が調査されれば、淀城武家屋敷の状況が明らかとなるであろう。

註

- 1) 西川幸治『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年
- 2) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 3) 尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡（4次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 4) 中村石材工業株式会社『淀城跡公園石垣改修工事報告書』京都市建設局公園緑地部公園管理課 1990年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書							
シリーズ番号	2006-23							
編集者名	尾藤徳行・丸川義広・能芝 勉							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどいけがみちょう 淀池上町	26100	1191	34度 54分 18秒	135度 43分 11秒	2006年6月 14日～2006 年7月11日	5次調査 64m ²	鉄道高架 化
				34度 54分 13秒	135度 43分 02秒	2006年8月 21日～2007 年2月28日	6次調査 1,350m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 淀城跡	都城跡 平城跡	江戸時代	土壇、柱穴、礎石、 雨落ち、布基礎、 石列、石垣	土師器、施釉陶器、焼 締陶器、磁器、染付、 瓦類、銭貨、鉄製品、 木製品、石製品、				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23

長岡京跡・淀城跡

発行日 2007年3月15日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961